心性實驗錄批判最後屁

原坦山老師　著錄
福田行誠上人　批判
原坦山老師　再辯

○大意

（實驗論は予の所述、批判は行誠上人の賜らるゝ所、誠公の批判死生沒と名けらる予復再辯して最後屁と名く、）

杜撰の撰述高批を蒙り深く感戴する所なり、然るに師の所批と予の所述と一同三異あり、一同とは共に破邪顯正を欲すると大同にじて小異なし、三異とは、一には師は經論の典故に依り、予は無始本有の自性に依る、二には師は經論の理義明辨顯了ならんことを欲し、予は自性法體實驗明白ならんことを欲す、三には師は古佛の法義明覈にして佛法を千古に彰揚せんことを願ひ、予は生佛不二の本性を實驗し宇宙間不易の實法を確定せんことを願ふ、此一同三異の別あるを以て、又再辯を費さゞるを得す、窃に惟るに諸佛は本具自性を大覺するが故に諸佛と稱す、經曰、大日如實知自心、名爲菩提、抑經論尊重なりと雖も、傳說魯魚の差なしと云がたし、自性本具の萬古不易なるに如かす、當今諸學日に進み、實驗の學益熾なり、胡亂の談は古法と雖も皆な悉く廢棄す、是れ予精究三十年實驗の說に非れば主張せざる所以也、今悉く師の所批に隨ふこと能はざるは敢て我見を立するに非す、所謂。相逢不下馬、各自有行程、是の謂也、

（批）曰批判有二、初造語之批、次立義之批、先批造語、

（題）離苦得樂、

（批）曰、苦離苦等の語は下化の一端にして、要の字に名くるに足らず、般若とか解脫とか或は上求下化とかありたし、

（再辯）曰般若は離苦の實智、故に云、照見五蘊皆空、度一切苦厄、解脫は離苦の證なり、故に起信論に、令衆生離一切苦、得究竟樂、を佛祖出世の總因緣とす、樂は無上菩提又涅槃と注す、不足となす可らす、

（題）一粟、

（批）曰、一粟の上に今の世の佛子など云の語ありたし、

(題)短、
(批)曰、短の上、亡羊を逐ふなどの語ありたし、
(題)理學、
(批)曰、理學の上に西洋の二字を安すべし、
(題)謬、
(批)曰、謬上彼れの言ありたし、
(題)無實、
(批)曰、無實の下にちかきの四言を加ふべし、
(再辯)曰、一粟等更に熟考すべし、
(圖)三心圖、
(批)曰、心の語、覺源心と和合心と不覺根心とを指すならん、是均しく心の動靜の上にて心を離れざる者なれとも、論釋の古格として心源とは名くれとも源心とは云はず、和合識などゝは云べし、和合心とは呼はず、心根と云へるはあれとも根心と稱するの熟語なし、然れは則ち是を指して直ちに三心と名けたらんは一家の

私立にして公然の目にあらず、名は正ふすべし、漫りにこれを造らば萬世の龜鑒とするに由なし、但し其所據あらば此を示せ、
(再辯)曰、夫れ經論中同名異體、（心の字の如き意識を指すことあり、七識をさすことあり、八識を云ことあり、草木の心を云ことあり、又臟腑を云ことあるが如く、處に隨て體相を辯ずべし、名に由て一定すべからず、）同體異名の類、（本覺佛性五蘊五塗の類なり）尤も多し、是中世已來名義の學太た熾んにして、繁冗紊紛、其實體を失する者多し、予之を實驗するに人身中確乎として三心あり、其餘の名義三心の異稱多し、別に配屬するが如し、故に古來の語格に拘はらず三心と論定す、（三識三性と稱するも妨なけんか、）覺源は覺性所依を論ず、（通身の覺性神經の本原なる故）不覺根は色蘊の本因、陀那の本體を云、起信の不覺に同じからず、起信は無明の異稱惑本を論ずるのみ、抑無明は陀那（即阿陀那）の覺源に入者にして、古今の論此に及ぶ者なし、故に造語も亦自ら差別あり、是皆實驗に出てゝ臆斷にあらず、此奇を立異を述るにあらず、法體如是のみ、具に心識論に演るが如し、
(圖)和合心中不覺心上流云々、
(批)曰、和合心の熟語なし、強て名けば和合識と云べし、但し和合の語もと義を解するの言にして掲げて稱すべきの名に非ず、但し楞伽等の中に其名これありや驗

すべし、△不覺心上流入覺源、此の語路にては無明逆流して覺原に入るを和合心と云へるの義となる、爾るに論に不生不滅與生滅和合非一非異と云へる文を義記にこれを釋して非謂別有生滅來與眞合と注するを見れば、入覺源の三字は來入の義なれば論說と乖角する者に似たり、又不覺上流入覺源と云ときは、是還源返流の義となりて和合相を泯し、本來平等同一覺となるの謂れなり、若混淆和合の當相を論ぜんとせば、覺源下流して不覺心に入ると云はざれば和合の相を說とは云べからず、涅槃經、佛性隨流爲種々味、今の起信論、（中末三め）自性淸淨心因無明風動と云へる如き、下流して迷に趣くを隨流と名け、上流して悟に還るを反流と名く、是大凡佛家の通名なり、

（再辯）曰、此亦實驗に依る、古來の傳說に拘はらず古義明瞭ならず、上流等の說は其實證に達せざれは空談益なきのみ、（我社徒朝夕務て止觀究理二三年にして僅にその麁相を解す、）

（批）巳上序文幷圖說を批票す、巳下本文を批す、

（再辯）批語尙多し、本錄梓行の時正削を加る者多し、今の本錄に闕せざる者は亦之を削る、

（錄）（實驗錄初丁右十行至左八行）氣水土の如き、乃至皆集合物、云々

（錄）（初丁左一行）辯曰、佛氏の徒一變巳後の說に通せず、云々

（批）曰、佛家と云べし、若氏を稱せんとならば釋氏と云べし、佛字氏族に係すべからず、昔儒之を辨せず數佛氏をもて云者は事に達せざるなり、吾黨倣ふべからず、

（再辯）曰、氏は姓氏にかぎらず且氏は廣く大なり、（堯舜氏と云て堯舜家と云ざるの類、）家は狹小なり、（三家者の類）今廣大の義を用ゆ、但淨家禪家等は佛法中の區分なれば、家と稱して相應ならん、

（錄）（初丁左九行）辯曰、予此を讀て愕然として云々、

（錄）（二丁左四行）辯曰、我徒依然として中古巳來の空義を拘守云々、

（錄）（三丁左五行）辯曰、我佛氏の學上古は云々、

以上空之論辯

誠批して曰、辨白の言へる我空の空の義、及ひ中古己來の起る所の空論虛義と稱する者、予未だ其委說を聞かず、敢請師の恐るゝ所の者を舉揚してこれを委細に示せ、今方に誠が見る所をもて洋說の由て起る所を說かん、彼言らく氣水土の如き他物以て聚合して之を成すと、又雰圍氣も諸氣相合して成る者、其元素となす

者、皆聚合物等云々す。按ずるに此說洋學に就て云へば精密盡せりと稱すべし、佛學に就て之を論ずれは未た曾て奇と稱するに足らず、唯識論の中、順世外道の計を出すに地水火風の極微一微二を合して父母の微と名つく、三合して子微と云、四合すれは孫微と名く、五合して孫々微と名く、乃至多百千合して一の水滴を成す、火風等亦然なり、實常能生麁色、勝論外道も亦此計に同す、唯識論合してこれを破す、述記一ノ末二ノ本これを解釋す、薩婆多成實論等これを示すが如し、義林章第六極微章あり、學者此を見べし、夫一滴水は四大中、水大の增長する者にして亦地火風の三大の和合してなる者也、彼の外道の所見猶四大の分析すべきを知る、此佛世己前數千萬歲の昔に在て此を說く、洋學者流是を知るの遲き何すれぞ今日に至るや、印度地方、或は此說の餘波あるべし、洋家の分析ひそかに此を竊て己れ自ら究理の術をえたりと謂へるや知るべからず、且彼れが云へる酸氣等の如き者も亦幾多の分析すべきあるべし、彼未た之を云ざるは精巧尙盡さずと謂べし、彼は分析未た勝論順世等の云へる孫微孫々微の分に到らず、況んや隣虛の阿耨色に至らんや、僅かに四大を分析するをもて、佛家をおどさんと欲するは、假裝の鬼面羅刹を怖伏せんと欲するなり、水土を分析するの餘勢及て空氣を分析するを推知す、學の工夫彼に在ては最も精密と稱するに足る、竊に按ずるに是測量の機巧をもて空中所在の密氣を斟酌し得たるなり、空を捉ゑて分析するには非るなり、空の中一種の秘氣あり、見聞の境

を離る、而して其實あつて焉に存す、倶舍論にいへる不可見有體の類なり、猶障礙有體に屬す、亦是色法の所屬、

（再辯）曰、空は五大中の空を論ず、勝論師等の妄計皆臆量分別に出てゝ實驗なし、故に所破を免れず、今西洋四大を分析するに皆機器法則ありて實驗明了なり、是彼の舍密學の講究する所、勝論の類にあらず、又酸氣等の分析すべきあらば、又更に精密と云べし、然れども恐くは空談ならん、

（批）空無爲の法と其性天隔す、此固より空の氣にして、空即氣には非るなり、夫空は究竟して無體なり、長短方圓輕重多少あるあつて分析斟酌すべき者に非ず、洋家の空を分析して二三或は四五となすと云者は、必ず分析せられべき者有て、而後に之れを分析する也、定て知其析する所の空氣と云へるも、或は少多厚薄あるべし、大小方圓あるべし、香味強柔あるべし、四大の分析已に爾なれば空氣の分析も亦決して然らざることをゑず、析理必ず同して異なることある可らざる故也、予故に曰らく、空氣とは是空之氣にして空即氣に非ずと、而して古人曰、魚は水中に游て水を見ず、人は氣中に游て氣を見すと、爾らば即ち氣をもて空と名つけ、氣の

外に空なからん、此も聞えたることなり、されど物必有のみあつて無なしと云可らず、實のみあつて虚なしとすべからず、陰陽の消息晝夜の交際一の闕くべからざるものの如し理必ず、然れば事を論ずること毫も差ふことあたはざるなり、さらば氣のみあつて空なしと云の論は取るべからず、若我佛敎に於いて、其空と稱する者をいはば、或は無爲の唱をもて示すことあり、婆娑倶舍中、三無爲と名け、唯識瑜伽論の中には六無爲と名つく、みな空の殊目なり、又無爲と稱せずして、但に空とのみ名くる者あり、般若經中しばしば三空門を說き、又四空の目を示す、楞伽第一に七空の名あり、仁王經上に十三空あり、乃至南本涅槃經廿三の中には廿二空廿五空を說く、大小乘の經論に在て單複ありと雖ども、空の異目を列する者、凡そ一百七八十種なるべし、大乘義章これを具說す、學者就てこれを研究し推理し、彼の洋家の所謂空と云る者、其中何の空に屬するやと云ことを知るべし、蓋し其色法に屬する者は外道既に極微の所見あつて之を分析す、洋家近世機械測量の法を獲るの基本なり小乘中に在ては析空觀を建立して以て、人無我の方便とす、外道極微分析の法を獲るの基本なり、大乘中に在ては體空如幻等の觀を建立して法無我に入るの方便とす、小乘人無我を獲るの基本なり、

其洋說の空を說くに於ける淺畧甚しきこと知んぬべし、蓋外道頑空中に益々として未た頑空の實法をも知ることあたはず、況や餘の空門を開閉することをゑんや、眞に是れ象を摸して箕帚とするの徒なるのみ、

（再）辯曰、今は五大中の空を論す、般若性空の論に及ばず、所引經論の義皆性空の名なり、縱ひ百千の空を說も、畢竟盡處界の法皆空淨ずべきの理を云即般若是予居常主張する所、彼外相に混ずべからず、

（批）予誠固陋、其洋書にをける未た一行を讀まず一理を究せず、而して云々抗說をなす者は實に盲者の五色を辯じ、聾者の五音を批するなり、慚愧の至りにたゑず、僅かに師か所引の洋書の言端に就て、且く試みに此を論ずるのみ、倘餘說あるべし、伏して請再難を垂示して予が所說の不當を指析せよ、一言と雖ども專ら護法に關係す、其事輕からず、苟も愚をもてこれを度外に舍んは、固より予か意に非ず、欽て白す、

（再）辯曰、師の博聞强記、典據確實、予每に欽伏する所、而して今恭遜此に及ぶ、更に敬畏を加ふ、然れども敎乘の說のみを執て、當今天地間未曾有の開化、諸學の所長を知ら

さる可からず、抑性空の談は佛法の秘賾彼外相の論に同すべからず、予佛子の偏見を彈斥せんと欲す、我か弊を改めずして如何そ彼が非を責ん、我短を責むるは我か法を護する所以なり、師幸に私情を棄てゝ批難を設けらる、予甚た甘心す、予此法の萬古に不朽たらんことを欲す、前に呈する所の時得抄、亦必す批難に倦むこと勿れ、予亦百折厭はず、

（錄）三丁左九行　全體新論云々、

（錄）四丁右六行至五左一行　涅槃經頭爲₂殿堂₁乃至佛の本意にあらず、

（批）曰、涅槃の文珍らし、（經論中尙類文あるべし、これを出して可なり、）佛頂云々の說いかゞあるべき、此を密說と云はゞ腹中經あり、神足經あり、解節經あり、千手千眼陀羅尼經あり、亦心の手足等にある密說と云ふべきや、事相顯著ならざる者は證とするに足らず、佛の本意云々、佛者にして佛本意を說んには或は轉迷開悟とか、或は上求下化とか、或は開示悟入なと云へるの外には斷としていはざることなり、法華經に佛爲₂一大事因緣出₁現於世₁と云へり、一大事の言、豈本意の義にあらずや、經論の中、佛の大事因緣は心王の腦に在ることを說んが爲めと云へる文あることなし、色心假合其

實虛妄の法なり、決了定實の說に非ず、若し此段について語を造らば、唯佛說の二言にて足る、本意の語を加ふるは過ぎたり、及ばざるなり、

（再辯）曰、我佛敎、及西洋諸說之を實驗に徵するに合あり不合あり、而して靈覺の元府腦中に在るの說、精究三十年確乎として移動すべからず、佛經中涅槃の明文ある希有と云べし、然るに轉迷開悟等云々、夫迷悟は必ず一心にあり、一心必ず所依あり所依必ず本末あり、（腦本とな原とす）故に所依を詳にして而後迷悟を論ずべし、迷悟は必ず所依の轉變に係る、是れ予後に洋書を引て辯解する所以なり、楞嚴に二種の根本を說き、（生死煩惱菩提涅槃、）又賊を捉る者は賊の所在を詳にすべしと說き、又陀那の耳根に暴流することを說く皆妄識の所在を指すなり、

（錄）五丁右八行　辯曰、佛氏多く心意識の方所云々、

（批）曰、佛說の中において、心を說くこと經論十百同異あれども、心の方所實體を指して頭腦云々の說なし、密敎に八葉心蓮云々の說あるよしなれども、予は未だこれを傳へざれば今にして顯然これを陳說しがたし、敎相中に在ては心の相貌位處を論ずること唯識宗をくわしとす、其宗は六經十一論をもて所依として、其說

細に深々なり、而して未だ一處として頭腦の說あることなし、蓋し腦髓神經等のことはこれ梵士五明中の醫一醫明家の關係する所にして、其識とする所病患養生の道を究理して人間一世の幻軀を保護するにすぎず、是をもて經絡の疏密より思慮動靜に至るまで、通明透徹これを掌に視るが如くせざるとをえず、毫もこれを差すれは死生の大事に係る、尤も困學精究すべき者なり、佛說の心を示す者は、分毫もて醫明家に似ざるなり、何となれば心地觀經中に佛心を觀ぜしむるとあり、頭腦の說なし、觀無量壽經に佛心を說て大慈悲とす、頭腦の說なし、華嚴經に心佛及衆生是三無差別と說く、頭腦の說なし、厚嚴經に阿陀那識甚深細と說く、頭腦の故に非ず、佛經中心の說あること百千數を知らず、而して說の頭腦に及ぶ者未だこれあらず何が故ぞ然るや、夫れ心頭腦にある唯人類に就ては必ず然ることを知る也、若夫百足は節々是腦なりと云へば節々是心なるべし、或人蠶を兩斷するのに雙足左右に走ると云へり、此腦、四足にありと云べきや、爾らば即ち、足々亦心なるべし、此に由て之を見れば、鱗々皆腦の虵もあるべし、羽々悉く心なるの鳥もあるべし、獨り頭腦を心の所在とすることと唯人を爾りするか、佛說の心を說く者もとより人類に局らざるより、諸經の中、頭腦心殿の說おほからざるゆゑんなり、佛說心を示す、決して一準ならざることを知るべし、心若五蘊と相應すれば欲界の果報を現ず、いはゆる頭腦心を安し、節々腦を安ずるが如し、心若禪定と相應すれば色界の果報を感ず、所謂初禪天に鼻舌兩識を闕き、二禪已上五識皆あることなし、無想天中には五百大刧を經て、第六意識を失沒す、此等の天中は頭腦あつて心なきなり、五根あつて五識なきなり、又心虛空と相應すれば、其報や無色を現ず、色蘊すべて斷滅す、唯四蘊空と相應す、此の天頭腦あることとなし、心空中に流行す、然れば則ち、心の三界に在る唯心の性を論ずべくして、心の所在を議することなき者此が爲め也、心の所在もとより定まることなきを以てなり、（是皆みな大小乘の通說なり）、若大乘經中に在て、第八賴耶を論ぜば其說廣大にして尋常にあらず、故に凡下の爲めに開演せずと說き玉へり、今唯識論に就て之が少分を云はゞ、いはゆる第八識は迷悟の本源にして因果の主となり。第七識は四我を體として恒執の主となり、第六識外轉して三性の了別を司さどり、前五識は五塵に對して現量を司さどる、其凡夫に在ては有漏の了別を體とし、其聖位にあつては無漏の智慧を體と

す、（第七識轉して妙觀察智となり、第六識轉して平等性智となる、初地の菩薩之を分得す、前五識轉して成所作智と名つく、第八識轉して大圓鏡智と名つく、妙覺にして之を滿足す、）蓋し識の體たる凡聖異なりと雖ども、みな了悟をもて性とす、其法たるすべて因緣所生にして其實は依他如幻を相とす、故に或鏡像をもて之を喩へ、或は緣影をもて之を示す。並に心識の實體固より執すべき者に非ることを比說するなり、故に根境識を判ずるに、唯能依所依の名をもてす、決して能居所居の目を以てせず、且意識の所依を說くに至ては前念の意根を以て所依處と定む、大小乘の通說なり、色法頭腦をもて之か所依處とするの說なし、（若經中たま〳〵心殿等の說あるは、入界報得の一種に就て之を云へる者か、決して十界總括の心王心處を說くの正說にあらず、）又第八識に就て三種の相を說く、謂く種子と有根塵と、器世界となり、器世界とは山河大地羽毛鱗甲みな第八の變現する所とす、是を第八の相分と名つく、了別の義を離れてすべて非情に屬す、華嚴經に一切唯心造と說ける此の謂也、心體局て頭腦にあらば何れの時か心體山河草木となることをゑんや、唯識の四分を說くは此の謂也、夫心境依正は因緣の發現する所にして、能依所依ひとしく畢竟空の法門なり、決定の說をなす者はみな外道の我執に入る、おそれざる可んや、般若經曰、色即是空、々即是色、と此の謂也、

（再辯）曰、實に涅槃經を除くの外經論の明文を見ず、然れども楞嚴觀音入流の章、全く佛意明了なり、今之を實驗するに聞根は陀那昇流と覺性下降と交際の地にして、予所謂和合心識の地位也、此に於て聞者を觀察して、陀那の流れを反入して寂靜無爲の覺性を證するなり、惜哉、中古以來實證の法衰へ、觀音入流の義曖昧として實用をなさず、故に予曾て圓通解を製して學者の爲に之を諭す、近來稍其彷彿を解する者あり、且經論其部位を詳說せざるは闕典なり、百足蹤等の蹤、洋說用ゆべし（博物新編三集の類）△色無色諸天等、予未だ諸天所住地の須彌山の有無俱に實驗せず、況や諸天をや、（家羽諸天等予別に說あり、）予唯人體上に於て眞心佛性の本體頭腦に在ること確乎として實驗疑ひを容れず、加之無明の本起、陀那の元質等了々として掌果の如し、然れども信ぜざる者は馬耳東風の如し、能依・所依・能居・所居・等左右言のみ、經に處中の語あり、唯其實に達して其語の小異に拘はる可らず、△八識は元より三心の和合物なり、故に清淨法身より一切淨品の法、皆覺心に屬し、山河大地より草芥の微に至るまで、知覺なくして生滅聚散の相ある者は陀那不覺心に屬し、人畜より蠢動の細含識に至るまで、皆和合心に屬す、（即衆生の說）語異なりと雖も意元より通貫す、色即是空等は般若性空の

法門、妄識妄執を蕩盡する妙藥なり、蓋夫六大の性（洋書に六十八元質と稱す）圓融の性あり、偏凝の相あり、有情非情は偏凝の相なり、般若所談圓融性空の理を以て偏凝體上を離ずべからず、（洋書に人身は十四元質の凝體とす、）予が心識論已に要に就て之を說く、色無色界乃至十方淨土等の說、予未だ實驗せず、故に之を闕如す、師若し實驗の說あらば予伏て之を聞んことを冀ふ、若し經論中の舊說は予未だ實驗せず、且食を說て飽ざるの疑あり、故に之が辯を缺く、

（錄）十四丁左四行 辯曰、想陰妄識、佛氏斷じて餘りなきに至る、云々

（批）曰、想は五蘊の隨一にして心所の一位なり、俱舍論には大地法の一種に名つけ、唯識論には五遍行の一種に屬す、皆言ふ、想は善惡無記の三性に通すと、故に惡に屬する妄想は斷ずべし、善無記に屬する者は斷ず可らず、今斷じて餘りなしと云者は且く惡妄想を指す故なるべし、爾らば語に簡別あるべし、汎然として之を言ときは三性漫濫の過があり、但し舊譯の經論、妄想顚倒等の語あるは、此想を心意識の總名として憶想妄想の想とす、蘊中に列するの想は、想像の想にして僅かに心處の隨一なり、想の言同して想の義は總別位を殊にす、辯白の想蘊妄識といへるは語樣汜濫す、之を正すべし、且斷不斷を論ずるはすべて、小乘の所說にして、且因中菩薩の法門なり、天台己上圓頓の法則によらば、妄即眞と達す、故に圓頓止觀曰、煩惱即菩提なれば集の斷ずべき者なしと云へり、爾らば則ち、辯白の佛氏斷じて餘りなきに至ると云へるの語は臺家の肯ぜざる所なり、禪家にして之を云はゞ大達のいはゆる莫妄想に屬す、さらば此語はなきを是とする者に似たり、如何、また別に造語あるべし、

（再）辯曰、若想と云はゞ三性に通ずべし、蘊と云へば必ず在迷の義也、蘊は眞性を蔭藏蓋覆する蘊惑の義なり、△煩惱即菩提、生死即涅槃、等禪敎の學者黄吻の雛兒も口實とすれども、予之を解せず、煩惱云々は地上大菩薩、五蘊皆空を證する境界にして維摩經に、婬怒痴是菩提とは大權の大士、諸大聲聞の得相を呵す、博地凡夫の夢にも見るべき境界にあらず、（但定性圓頓の機は此例に非さるへし、）想蘊は一切衆生生死の根元、故に楞嚴に、五想を五妄想と說く、（色蘊を堅固妄想となし、乃至識蘊を幽隱妄想となす、）唯識家の一隅のみを執すべからず、今其實體を論ず、之を闕て說さるを得ず、總て言語高遠にして實諧なく、空誕虛喝實用なき者は、實驗論中不取之、

（錄）辯曰又佛氏心意識の依處も知らず、云々經論云々

（批）曰、唯識論第八の文、十五依處門あり、其中第七根依處を說く謂、心々所々依は六根とのみいへり、王所の所依處之をもて定量とす、所謂其現在第六意識は、前念の意をもて根とし、現在第八識をもて依止とす、故に三十頌曰、依止根本識と說けり、第七識は第八賴耶識を所依とす、故に頌曰依彼轉緣彼といへり、彼の言を論に釋して曰、藏識是也と、第八識を說くに至ては唯識論中八段十義をもて頌を釋し、十理五經をもて此識の在る所由を證す、其文廣博、其義精密以て之に加ることなし、もと佛說に根據して、彌勒無着世親等の諸の大士の讃說する所、實に唯心最上の聖敎と稱すべし、而して此中所緣門あれども所依門を說き玉はず、いはゆる根塵器界の諸の色法はすべて第八識の變現に就て之を說き、第八見分の所緣とす、苟くも內外の境をもて第八識の所託とし所依とすとは決して說ざるなり、故に頭腦をもて心識の所依根據とすと云へるの說は聖敎門の中斷然として此あることなし、或人誠が言て云云、することを難じて曰く、夫れ地なくして屋舍いづくんか建たん、屋舍なくして人いづくんか安住せん、火を把らんには火櫃を用ひ、水を

掬んには柄杓を用ゆべし、既に依報と名く正報の所依と稱すべし、苟くも依報なくんば、正報何によつてか住せん、苟くも色蘊なくんば四蘊何によつてか安住せん、此理誰か之を疑はん、故に婆娑七十四に曰、前四蘊あり、識住其中乃至識住色中云々、俱舍光記に之を釋して曰、四是所住識、是能住、又瑜伽論五十四曰、識蘊差別說、五種中第三由所依、文曰、識隨色住、倫記之を釋して曰、意識隨色住、即是依住、若取依住唯依自身色等四蘊等と云云す。然り而して此中僅かに色とのみ說て、色質一身の中何れの處をもて心の所住處といはざるは尙是論藏古說の疎漏なり、今にして心王頭腦をもて其所依と定むるは洋家未曾有の精密を究めたりと云べし、唯識論に諸門分別す、而して此所依處を示さゞるは頗る闕典と云べし、況や頭腦心臓の論に至ては唯識家の十大論師と雖、未だゆめにだも之を知ること能はざるをや、大小乘の論說既に所住能住對說す、又依住の語は能所を並稱す、子獨り能住の識の義のみを論じて所住の色蘊のことを忽諸する者は、既に大小乘の論藏に乖く、況や頭腦の細論に逮することを得んや、但しこれに辯ありや否やと、答曰、婆娑俱舍兩論に說て能所を論ずるは且らく五蘊の次第を論ずるが爲なり、故に或

は五蘊の麁細をもて次第し、或は隨染をもて次第し、或は隨器をもて次第は、今の難問にいへる婆娑の所引は、其中隨器の一義にして請客の喩あり、（頌疏一七十四丁引之）又隨界の一義にして且らく能所の說を設るまてなり、五蘊を釋する中、其能所の名をもて釋する者は論說にあつて、僅かに此一段のみにありて意識を正釋する諸門分別中に於ける、未だ曾て所依所住の議に及ばざるなり、其旨は瑜伽の文を解するに至て之を知るべし、遁倫記（十一の下初紙）この瑜伽の文を釋して曰、四識住の義、四門分別、初明敎起、外道執識爲我、四蘊（心所及色蘊）爲我所是我住所佛破此執（我）而告彼言色受想行是識所住而非此我、汝由此因緣、故佛世尊說識住義、此釋に由るに四識住の中、且らく能所の依住を說くことは諸の外道五蘊を取て我々所と計するをもて、其見を對治せんが爲めに五蘊を分析してかりに能住所住の名を立るなり、（識を能住とし、受想行并に色蘊の四を所住とす、識獨り色蘊の一處に住すと云にはあらず、）必ず能住所住に實物あつて色乃至識と名くと執せば、亦是外道の一我見に墮す、唯五蘊皆空の智覺を希ふべし、五蘊能所の實執を取るべからず、亦瑜伽論五十一中經を引て曰、我終不說此識往於東方乃至四維云云、遁倫記此文を釋して曰、外道計我死後往於東西等今此非之、蓋欲色の

二界の如き誠に來去なきにあらずといへども、而れども外道の識を執する堅實なるに對して且らく無往來を說くなり、善巧方便尤もしかるべし、不達の人之を見て或は識に住處ありといひ、或は識に往來なしと云はゞ僅に文の似たるに認め義の大に差することを辨ぜざるなり、學者知ずんばあるべからず、難者地水火をもて責め、依報正報をもて迫るものは、其理淺薄なり、蓋し地水火は地水火の體に就て冷暖等を論ずべし、何んか火叉柄杓をもて之を論ぜんや、其之を把り之を汲むは一時の轉用、何ぞ決定の喩とすべき、又依正二報をもて責る者、理盡の難にあらず、何ぞや、欲色は必ず正報もて依報によるべし、上界無色界の如き、（無色に細色あるの說は別に論ずべし、今は小乘有部の說に就て之をのぶるのみ、）四蘊唯虛空と相應ず、決して依報の關係せざる所なり、識必ず色に依り、心必ず頭腦に依るなど云はゞ、但是人界假令の一說にして、決定の議にあらず、依色の義猶識依の正說にあらず、況や頭腦を所依とするの說に於てをや、且夫大乘に於ける有爲の法たる如幻即空と說く、又依他起性と說く、又因緣所生と說く、空花之を喩へ、揵達婆城之を譬ふ一の實物なし、豈心識能所の二名を立てんや、若し之を以て、佛法眞實の驗處と定めば、狂狗の土塊に吼え、醉猫の

鏡影に戯むれたらん也、若心殿頭腦必ず說くべくんば、大小の經論靡々之を說くべし、佛天眼の照鑑する所何ぞこゝに及ばざるや、飜譯の三藏果して此を傳へて譯出せずんばあるべからず夫れ然らざる者は何ぞや、經論の中三科法を說くこと數十處、而して體用に就て議することあれども能所に就ては之を論ぜず、蓋し識心の色法に係屬する者固より之を言て示すに足らざればなり、且婆娑瑜伽の論說によれば、心は色處及び餘の三蘊によると說けり、色の一蘊に由るとは定めざるなり、（大小論藏此說みな同す）其事上の難者の所引の婆娑瑜伽等の文を見てしるべし、唯識論等に外道の我を執する三計を出てず、一に即蘊（五陰に即して我と立つ）二には離蘊（五蘊を離れて我を立つ）三には非即非離蘊（雙非の我を立つ）皆蘊を實物と執し、又我に實を認むるの計する所なり、識心の能居所居を議するもの世俗にあつては其說究竟するに似たりとて稱するに足れりとし、執て此を佛家の撰範とせんこと、予において尤も疑なきあたはず、今にして云云贅說を作る者、之が爲なり、敢て請矩を擧げて再び冥路を示せ、

(再辯)曰、心識通身にある元より論を待たず、然れども指骨爪齒等は不覺心の所成なるが故に知覺通ぜず、抑總覺識知の根原腦にあることは萬古不易の確論、縱ひ千聖萬賢も變動すべからず、故に通身に知覺ある者は神經の流通によれり、若一手の神經敗壞すれば一手靡廢し、一目の神經敗壞すれば一目盲廢す、是實驗確定論、辯に及ばず、況や涅槃經中心王處中の明文あるをや、而して予論旨は此にあらず、頭腦中覺不覺の兩體を和合し、迷悟眞妄の本原なることは經論及び洋說も未だ說かざる所、（唯楞嚴圓通の章其意ありと雖、經文幽微にして古今の注疏家此を論せず、是實驗の法廢するに由れり、）予此に於て實驗するが故に之を流演するのみ、又唯識八段十義十理五等云云、予唯實體に就て實驗す、經論云云は其所傳あるべし、予未だ之を實證に符驗せず、故不辯之、又死後往來色無色上界の說は現證實驗の說をなしがたし、故不辯之所謂未だ生を知らず焉ぞ死を知ん、師甚だ之を疑ふ云云、予亦二十年前、洋學士小森某と理論負墮し、後精究十年にして始て實驗を得たり、師大に法の爲に切なり、予情見を容れず赤心を吐露するのみ、

(錄)全體新論一曰腦爲全體之主云云、

(錄)生理發蒙曰靈魂形の有無云云、

(錄)辯曰、此論精密云云、

(批)曰、全體新論生理發蒙共に各洋學に名ある者なるべし、而して一は靈魂在腦者と決し、一は腦か全體かを決せず云云、師の上來の所論を讀むに在辯の說を用る者に似たり然るに今發蒙者未決の說を立つるに至て、辯白して曰、難知を難知とし不測を不測とすると云て、發蒙の所言を指して此論精密と欸ず、其意また發蒙の未決に朋ふ者に似たり、前言後語に應ぜざる者は果して其說あるべし、文面粗略なれば、事委曲しがたし再び之を示せ、

(再辯)曰、師偶此文を解することを熟せず、今之を解すべし、發蒙云、腦の一處に舍るか、將其全質に舍るか、未だ之を端倪すべからざる云云、此全質とは腦の全質を云餘處を云にあらず、抑腦に前中後あり、故に古へより前腦に舍ると云ひ、中腦に舍ると云ひ、又惱の全質に舍る等の說あり、現に英國には腦は精神靈覺の本府なるを以て相腦學と云へる一科の學あり、此學未だ日本に行れず、(相腦學近來文部省譯出の百科全書中に骨相說の篇あり、圖解詳說す、明治十一年の春、坦山親しく官庫に閱みす、然れども信を置がたし今發蒙之を決せざるは愼密の至なり、予亦前年腦の前部にあるを善とす、後來能々精究するに全腦に舍ることを實驗す、人々胸中に在る如く思ふ者は和合の妄識胸中に滯礙するものなり、然れど

も容易に會得し難し、其故は庸人の腦は皆陀那脊髓液に蘊藏せらるゝか故に靈覺の用をなさず、所謂衆生濁煩惱濁是也定力を以て之を醒覺するに及て之を實驗すべし、發蒙之を決せざる愼密にして胡亂の說を爲さず、此予が贊歎する所以なり、

(錄)辯曰、蓋し之を明了にせんと欲せば三心の本體を究了すべし云云、

(批)曰、佛氏三心の本體を精究實證、而して後に果して人間の萬病千障を醫する人となる成んと樣に聞えて、一段の文章吾儕家にあつて快よからず倘造語の法あるべし、さて三心の本體のこと始めに之を云云するが如し、三心の語過失あり、佛家の通名とすべからず、且師のいはゆる三心の語は其法固より十界の依正二報に亘る、獨り頭腦ある人界のみに局て之あるにあらず、將た又無色界は色體なし、况や頭腦に於てをや、色界の中無想天は五百大劫無心に座す、色質あるも心王心所之あることなし、二禪以上は五根あれども五識皆無なり、欲界の中、第六識の如きも悶絕極睡眠等の五位の無心に住する時に於ける、識滅して其體を失す、腦の堅剛なるも之をいかんともすることあたはず、聖者の滅盡定に入る如き、一毫心識を存ぜずして、或は半劫一劫を經歷す、然る時に當て頭腦夫れ何をか待や、又曰獨り頭

腦をもて心殿と定むる其人間に在ては是なりとすべし、百足は節々是腦なれば三心も亦節々にあるべし、爾らば、一節一心ありて二節二心となるや、一節三心ありて二節合して六心となるや、果して然らざるや、且問ふ、頭腦所在の人心と三心と其體同とせんや異とせんや、若異ならば起信論には但に衆生心と云、唯識論等には唯心唯識と云、人心も三心も必ず同一なるべし、若同ならば人心は凡心にして、本覺心は聖心なり、ひとしく一頭腦中に共居して並びに一心と稱すべけんや、且本覺心は頭腦中に在て上に位し、不覺心は腰髓の際に在て下に位す、唯均しく心と稱す、而して迷悟兩々分析の理ありや、論說には二心並起を許さず、但等無間緣の次第起を許す、迷悟兩處分析位を異にする者は却て並起を許すものに似たり、又無明即明の理に差ふ者に似たり、又一衆生心の義に違するに似たり、又唯識唯心と說くに乖背するものに似たり、蓋し佛法は一法を說て二法と說かず、法華に唯有一乘法無二亦無三と云ひ、維摩に不二法門を說く是なり、又無を說て有を說かず、般若に諸法皆空を說く、所謂、無智亦無得、以無所得と設ける者是也、二祖大師曾て求心不可得との玉へる者は般若の說法なり、誠か見る所を以ていはゞ佛法の實驗は唯此の不可得をもてするのみ、三世十方の賢聖皆之をもて佛法を說く、餘法をもて之を說かず、故に法華經曰、餘二即非眞と圓覺經曰、一路涅槃、又曰、一道清淨と果して兩々分析して心を說くの例ありや否や、古言曰、先入主となると、蓋し名利に先入する者、後に佛法を說けば佛法悉く名利の嗅を帶ぶ、貪瞋に先入するもの、後に佛法を說けば佛法悉く貪瞋の嗅を帶ぶ、洋學に先入するもの、後に佛法を說けば佛法悉く洋嗅を帶ぶ、儒學に先入するもの、後に佛法を說けば佛法悉く儒嗅を帶ぶ、顯密大小に先入するもの、後に佛法を說けば佛法悉く顯密大小の嗅を帶ぶ、敎內敎外に先入するもの、後に佛法を說けば佛法悉く、敎內敎外の嗅を帶ぶ、眞宗に先入し、空宗に先入し、非有非空の宗に先入するもの、後に佛法を說けば佛法皆有空中の嗅を帶びざるものなし、先入主となりて其眞の無所得の法門に達せざるが爲也、三十二の菩薩は皆深位の證に稱ふ人なり、而して尙文殊の無言をもて無言を說くに及ばず、文殊の證悟之を維摩の一默に比するに尙三舍を避くと聞く、况や其種々の嗅氣を免れざるもの、種々の主宰を帶ぶるもの、佛法を說くに於てをや、說得てたま〳〵相似たるも、猶魚目の眞珠に似たる者にして

六祖の所謂法華に轉せらるゝ人なるのみ恐れざるべけんや、欽まざるべけんや、苟くも佛法の稱に就て實驗を求めんと欲せば實相般若の實の言もて說くべし、若し夫然らずんば悉く妄說に墮す、般若經曰、一法の涅槃に過ぎたるとあらんも、我說如幻如夢と此に由て之を觀れば師の言へる、五蘊能所の法をもて佛法の實驗と稱するものは佛法の名實甚だ相稱はざる者に似たり、且師の稱する三心云云の說はもとより佛家大乘不共の說にして凡夫外道の識知し及ばざる所なり、故曰、阿陀那識甚深細、爲凡下不開演、（唯識論、初能變の下に之を引く、厚嚴經の文なり、是經未渡の本なり、）と說て、第八賴耶の境は二乘猶之を解知するとあたはず、況や凡下に於てをや、況や本覺不覺等の起原においてをや、謂て之を言得たりとも、外道洋家豈之を信知し實驗とすることを得んや、師の說云云精細なり、以て世間に對して之を實にみつべく信ずべきものとするもの、はたしてかならずしかるべきや、否や、予において甚だ其疑を懷く、斯において、師が禪定中所得の文を寫して之を我が教相中の說に合せんとするに參差牴牾一にして足らず止むことを得ずして楮公を備ひ管城子を勞して以て師が一喝を待つ、蓋し洪鐘も之を叩かざれば鳴らざるをもてなり、欽て啓す

恐懼の至りに耐えず偈曰、

頭腦久悶亦酸病、　試須毘盧舊髑髏、　配劑任君丸與散、　且加一盞死牛溲、

空内大士大凡默然、有一菩薩有言說法聲震大千、人天可發、室外倏有喃々竊語者、痴狗吠聲歟、抑聾阿難之耳魔鬼歟、皆附一笑、　行誡

（再辯）曰經論中名義繁多、學者をして岐に泣しむ、故に予實驗に依て三心に論定す、夫三心は確乎として實體あり、故に之を立す、色無色等予未だ實驗せず、强て之を論ぜば當不當共に空談に屬す、故に之を辯ぜず、大凡經論中遺教經、起信論の如きは悉く實驗證說すべし、唯識論俱舍論等予實驗しがたきと多し、其部の論師に質問するに實驗に係らざると多し、（若是聖者所見の境界にして、凡夫分なしといはゞ今日に無益の法たるべし）故に實驗論中之を取捨せず、又經論中數心を說くと珍しからず、楞嚴の二種本、（生死涅槃等）起信衆生心、（心眞如心生滅）唯識の八種、（五六七八）釋摩訶衍論の十種、（冗多略之）等、固より總れば一心、開すれば三心、實體に就て論定す、（心識論の如し）師の所說中先入主となるの語あり、尤も目撃する所なり、然れども我邦儒佛の如き今に千有餘年見聞も亦熟せり、先入と云べし、然るに當今に至ては日下の孤燈の如し主と爲と云がたし、洋學の如き近世の開演と雖、政體諸學よ

り器械等に至るまで、彼を主とせざるなきは何ぞや、蓋夫無始已來、眼横鼻直、手捉脚行の民あり、六根六識の法あり、此中に向つて佛法世法乃至無量の方法あり、就中近世萬邦開化末見未聞の發明多し、我佛法獨り心法を覺するに長ぜり、但中世已來實驗眞證の法衰へ、傳開紀持の學となれり、予僅に實驗の一端を得たり、故に之を開演す、其餘廣大の法門は予未だ之を實驗せず、予實驗の意によらば般若は妄心妄想を空淨するの智なり、實相法性は眞心靈覺の性相なり、性と說き相と說く左右言のみ、且予說く所五蘊の能所を離るゝに非ず、予說く所の覺心は受想行識なり、不覺心は色なり蘊なり、此諸法和合して五蘊と名く、（即和合心、又衆生心）蘊空ずれば即般若、色空不二能所對絕す、之を眞空般若と云のみ、且三心云云の說は其理元より大乘不共の說にして凡夫外道の識知し及ばざる所なりと云云、蓋當今文化古人に超過し先輩未發の談多し、西洋の學流凡そ三十餘科（百科全書に九十二篇を載す、其中佛教篇あり）就中佛法に近き數學家あり、曰、精神學、究心學、生理學、人性學、相腦學、皆心識精神の學を勸め、究理實驗を旨とす、故に五六七八識等我佛法と名義を異にすれども皆悉ぐ研究せざるなし、予僅かに實驗の一路を得て古佛已墜の法燈を挑んと欲す、今世流布の佛法にして彼に當らんと欲せば恐らくは全體を失するに至らん、（已に地球地動の實驗確定して須彌天の說廢せられ元實の究理實地に踏して四大の說睡談となる類、若心識の法彼に壓せられば佛法立所なけん）予深く之を憂へ、法門を精究し身命を惜まず、幸に諸佛の應現親勅を得ると、安政庚申以來數度に及べり、然れども他の謗法の罪を起さしむるとを欲せず且同胞相鬩とを好まず、故に懇求のものにあらざれば猥りに說示せず、師法の爲め親切なる、予毎に歎伏する所、今予か所述に於て控擊甚だ洪劇細鐘微器殆んど百碎せんとす、止むを得ずして一二の麁音を發して法誼の深志に酬ふ、又恰かも放屁蟲の打撲に遇ふて最後屁を放つが如し、惡臭四遠を薰動すべし、老師の如きも恐らくは鼻を掩ふて一嗾を發せんのみ、

偈云、

止々不須說　我法妙難思、試會說一分、擧世皆驚疑、　火裡之蓮氷裡烟、　喚天成地々成天、　有人若問解何道、　爲報牛屎馬糞禪、一

壬申孟春　　　　　　　　　　坦　山

(五) 鶴巣集

緒言

一此集之本旨在治佛道之實際而不拘文字之巧拙是故往々有創設之詞看者察之
一此集原稿號時得集以甲子敍之今類別之除甲子亦從看閲之便
一集中已梓行者省之即時得抄實驗錄等又佗雜誌中收之者亦省之

目次

法體論
佛法不可斥論
交遇論
宗弊論
禪弊論
諸法無實
心
不生不滅
無事人
看敎
難易
辯心
性情
人才無限
辯頼氏之北條氏脩禪學論
洞宗嗣書辯
接得警策辯
金翅鳥王答説
雷獸説
商賈説贈透禪和尚之東關

文辭説
紙鳶説
迂足齋本快猩人説
佛氏怠慢議
曹洞宗制議
贈諸宗之集會所
贈人時得抄書略
贈腦脊異體論於加州天德奕堂和尙
與丈六和尙書
與奕堂和尙
答藏雲和尙
寄普明禪士書
又
簡淨國徹定上人
簡佐藤礫川
不朽錄序
長喜山鬼簿序
某寺祠堂化簿序
雲衲接待喜捨錄序
又
夢癖集序
臥龍梅書畫帖序
道理之世序
書道理之世後
遊山觀水記
同後記
嵐山再遊記
遊豆州初島記
自吉濱還江都記
龜井戸看梅記
興學記
玉印記
癡隱室銘
至道邱碑
醫生津田某求語
書逐得集後與和田生
題雨窓讀史後
題風外老人虎圖
題少妓圖
題芍藥戲蝶圖
乘國溫岳和尙畫像贊

良寛道人略傳　秘骨道人傳　評良寛庵主詩集
讀天柱和尚眼藏辨注　讀幽谷餘韵　讀拙堂文話
稻葉酒翁　早川誤葬
○鶴巣集法語禪話之部
接衆　法語　大溪山豪德寺山門疏
永源開山一種長純和尚三百回忌疏　同寺本尊釋迦牟尼佛安座
供養之塔記　安國山水陸會疏　圓相中觀音大士讃
賀奕堂禪師住諸嶽山賜徽號　賀雪巖和尚住豪德寺簡　大雄山開堂法語
當晩小參
○鶴巣集國文之部
宗弊　妄想菩薩成佛不思議經　惑病同原再告
妙法　佛教大意　惑病同源の餘論
禪客問答　佛法の國益たるを論す　惑病同原の實驗

○法體論

諸法之體其何爲者也。天其造之耶。地其生之耶。人其作之耶。或謂天造而有宰神。或謂自然而無樞主。或謂生氣吸力之所集。或謂因緣和合之所成。嗚呼其然乎哉。豈其然乎哉。聚則爲象爲形。散則蕭焉索焉。知之則萬法紛然。不見之則聲色泯絕。然則見知者萬法之原也。是故爲天造爲地生爲人作者見知之卜度也。是此者必非彼、尊彼者必卑此。蓋夫是非尊卑者。見知之情執也。若或脫情執者。謂之天造亦可也。謂之地生人作亦可也。謂之自然本成吸力因緣。亦復無所不可耳。所謂正人說邪則邪皆爲正、邪人說正則正亦爲邪也。法本無常範。似天而非天。似地而非地。似人而非人。由此言之。法也者名義之所成、名義也者見知之所立、若夫見知不立則萬法無所住、萬法不住則是非無所生、是非不生則爭論無所起、爭論不起是非不生、即是天下之至道也。

○佛法不可斥論（諸宗同盟之趣）

佛陀者天竺之古言也、此謂覺者、亦稱智者。起信論曰、覺心源故名究竟覺。然則自非諸

佛不能覺心源。而異教之徒不能究其實。務排斥之。所謂雖有至道不學則不知其善者也。予曾聞諸教之大畧。若支那之名教西洋之理學。可謂得其要矣。唯至治心惑究覺性。則以佛法為最。若夫治心防外之要。既已論之。今不復贅之。

○宗弊論

物之有弊也其不可已乎。凡物故則蠹矣。生多則害矣。釋迦老子已寂而幾三千祀。其蠹其害不可勝言也。蓋經論之徒。沈淪于義解之際。遂喪老子之意。少林之傳可謂惟得其宗。衣盂六傳而法充沙界。棒喝拳杈無非宗要。豈不亦盛哉。然而其卒亦不免有蠹害也。方今天下之禪林安衆牧僧。其儀却倍古昔。而其弊尤已甚矣。諸方之稱知識者。多領禪和恣應人天之供。或受江湖戒會之請。乘與揚々傳食于天下。蓋古昔之佛祖。未必有如此之事。而今已有之。豈不其儀倍古昔乎。雖然其實非有尺寸之道。多是名利之賈僧爾。豈不亦弊之已甚乎。且其儀先使禪和長座不臥。名曰折身。而所謂知識者。執木橛之名警策者。打僧衆五三下乃至數十下。名之曰接得。多唱古人言句。或誦自己見解。唯是鴉鳴鵲噪豈有交涉哉。其如此者日或數次。遂自顛狂又相罵辱。至其已甚者打殺之。人問其旨趣。輒曰策勵耳。

又以黃蘗德山為之辭。其中有癲氣狂心者。則曰某得入處某有悟由。為之印證為之設供。相引墮火坑。嗚呼噫嘻。謂之何哉。予嘗厭其群復遭其害。今而每憶之。未嘗不流汗大息也。且夫古人之棒喝既具其眼。故必有其用處。而且當機用之。未聞胡喝亂棒以為人者也。求道者不可以不察也。知法者不以不辨矣。然而是世之所謂知識。而緇流之巨擘者。至其下類。放慢邪恣無不為爾。今之為衲子者不亦難乎。

○禪弊論

道藏海云。夫道非禪難究禪非坐難得。故座觀究理謂之坐禪。且初學之禪。須從師家之提撕。猶如瞽之有相。然則不可不擇其人。蓋釋迦牟尼佛及達磨大師。至唐代諸師。其揆一也。宋朝已來弊風特多。試論其概。曰唱和坐禪。公案坐禪。念佛坐禪。土地神坐禪。調伏坐禪等是也。所謂唱和者。師家以一則話頭授學人。學人唱之以坐。若授以趙州無。學人乃唱曰。無々々々。恰如雨鳩鳴。若授以雲門須彌山。乃唱曰須彌山々々々。恰如寒蟬之吟。若如此而得悟。雨鳩寒蟬亦得悟。所謂公案者。師家授以一則公案。令學人工夫。學人工夫來演其意。其語若合師家意。乃印可證明。又更與佗公案。謂之透公案。多向佗語脈裡担惟。夢中說

夢不知慚恥。恰如猿猴捉水月。若其如此而得道。猿猴亦得道。所謂念佛者。師家從來不曾實參。故未夢見佛法。以有痴福之報。錯爲叢林主人。或雖從規矩而坐禪。曾無一事之可示乃請彌陀觀音或文殊彌勒等以爲本尊。坐中默唱其名又念其呪。蓋依其力此生悟道。來世生淨土。非但自作之。又令學人倣之聚頭坐禪。察其意之所存。恰如水母之欲假蝦目而求食。若如此而得法。水母亦得法。所謂土地神者。譬如三家七村裡石造土地神。無唱話頭亦非因理觀察。乃示曰非思量無分別。兀々無事結跏趺坐。時到身心自然脫落廓然大悟。若如此而大悟。石人土佛亦當大悟。所謂調伏者。譬如捕勒野馬入蛇竹筒。乃示曰。坐禪爲降伏煩惱妄想。若能如此而開悟。勒馬筒蛇亦能開悟。上來五種坐禪。方是佛法中之魔事也。參禪之徒若過如此贋知識。速回避之。當如過蟲毒之鄉。非特發心不正萬行徒施。復且爲永劫輪廻之媒。若欲透脫生死識得諸法實相。須從佛祖教。如理思惟觀察。是乃最初之方便也。予初讀之絕倒。以其言之涉戲謔也。既而謂善知識一言一行。未曾失其宗。後而嘆今世之弊又且有加之。予試言其由。曰軋轢禪。番太禪。(吏之執笞鞭者邦俗呼爲番太)理窟禪。機關禪。剽輕禪等是也。所謂軋轢者。學得古人言句伎倆之迹以爲佛法。若人問着則曰今日好天氣。或曰蹉過了也。或打席竪拳。千狀萬態無有窮極。故輕々問之如作家。而其實非有分寸之道。譬如戲場之王公其狀雖似其實至賤之匹夫耳。所謂番太者。令學人打坐。打之以木概名曰接得。其狀如狂如顛。乃曰佛來亦打魔來亦打。無眼學人讚之曰。此箇善知識孤危峭峻、遂以德山臨濟爲目。嗚呼似則似矣。其實風力客氣之維持而已。所謂理窟者。經論之理致祖錄之義路。橫說竪解以爲得其道。口給辨佞賣弄人天。胡說亂道以當宗旨。祖師曰。執事元是迷。契理亦非悟。事理雖異其非悟也一而已。所謂機關者。佛祖語中以難解之處爲機關。以求壓人勝佗。豈知古人或說理致設機關。皆令學人發正見之方便哉。是故在作家理致也機關也。亦猶如臘月之扇、昔者趙州問投子曰。大死底人却活時如何。子曰不許夜行投明須到。古人一問一答而了矣。是弄機關瞎禪者所未能夢見也。所謂剽輕者。其人輕海剽蕩毫無實詣。磊々苴々自稱自在。或撥無因果輕慢毘尼。問其意則曰逆順自在。而其奔利貪名如餓鬼之赴飯籠。蓋此流類皆是似而非者。苟不具正眼難究其實。大凡佛法在其人。則恁麽亦得。不恁麽亦得。若非其人則恁麽亦失。不恁麽亦失。得失唯存于其人而已矣。

○交遇論

交過甚多。而要之有三。曰勢交。曰義交。曰道交。勢交也者。其交如醴。其過如衡。富貴則千里之外引領歛肩。況其邇者乎。貧賤則親戚爲寇成讐。況其疏者乎。子瑕之寵。耳餘之隙。其勢然矣。古人曰一死一生乃知交情。一貧一富乃知交態。於戲勢亦不可止乎。是故賢而貧賤。不肖而富貴。以不肖禮賢者鮮矣。必也賢屈於不肖。古人入山逃世。蓋亦有旨矣乎。然而有道之士。野處則庶遇之。逢之于途則庶遇之。雖有識者豈能免也哉。義交也者其交以義。其過以忠信。是故依義妄執。以信亡利。臨危不失義。隨勢不變心。如管鮑陳雷是也。道交也者其交以道。其過以眞。故道之所存。非勢之所及。非義之所知。昔者百丈問黃檗。曰。何處來。檗曰。大雄山下采菌子來。丈曰。還見大蟲麽。檗便作虎聲。丈拈斧作斫勢。檗即打丈一摑。丈吟々而笑。便歸。夫百丈師也。黃檗弟子也。其過如此。是豈情識理義之所能解乎哉。嗟夫世之所多者勢交也。人之難能者義交也。難之又難者道交焉耳。

○心

心也者萬法之原歸也。唯佛盡之。聖能全之。賢能至之。迷之者爲癡。僻之者爲邪。其邪也非有損矣。其盡也非有增矣。明與不明而已矣。蓋夫天地之成敗萬物之終始。皆是一心之變幻。而未有一塵之任其外者存矣。是以得其法者。顯天地於毫端。納大山於鍼孔。復奚足怪焉。然而至之有道。學之有方。於是乎其教立矣。其教所以有深淺廣狹者。從其器之小大也。大也者謂其容斂也。小也者謂其昧劣也。且其小大復各有所異矣。有人於此。各二其耳目。一其鼻口。兩無三脚兩首者一也。然而老幼男女好醜長短。未嘗混然不辨焉。是以其有異也。又如挹諸海者。以大則有多水矣。以小則有少水矣。其器之小也。雖挹諸海而不過斗升也。雖取諸渤澥。而亦足以充其量也矣。蓋不睹萬流之壑汪洋之富矣。若夫萬圍之器。不容渤澥。一握之卑。難臨滄溟。其分然矣。然則安渤澥者。不足與語滄溟之大也。屈小道者不能與識大道之原也。小者小成之。大者大成之。未必膠守一法以不通其他也。蓋鎔鑄群器。滌蕩心疾。要在盡其全焉耳。且夫謂其廣則十方佛土。語其遠則曠劫無窮。有權說焉。有實語焉。權則有廢立之去。實則取捨之情絕矣。苟自非深其道者。烏能識其所以焉。賢者特得之不肖者秪信之。信之不已。而後能至之。是故小大雖異。其所歸者一也。經曰十方之中唯有一法。其此之謂也。

○不生不滅

不生不滅。不有不無等。佛家之常談也。三尺童子亦能誦之。而至問其宗。天下大衲半青半黃。達其實者鮮矣。又有一類愚者。以爲法身法性涅槃佛性等。一物確乎不變。從無始而至未來際。嗚呼是何見解。蓋經論之義且置之。試觀身心器界及山河大地。何處有如此妖恠的物耶。乾坤猶有生滅。況存于其間者。孰不生滅。豈不謂生滅即非生滅乎。然則生滅只是識見之生滅。而未有一法當其實者也。若夫知識見無實。則萬法豈有體哉。抑且生也滅也。非自稱生滅者。唯依人之測度耳。是以一心不生。萬法無咎。雖然非令心不生而後能然也。心性本來非生滅。唯人自煩悶而已。且夫滅生滅而本體如然。猶未爲究竟。古人曰。喚爲如如。早是變了。然則以何爲究竟。今日肚裡飢不能說下文。

○諸法無實

三乘五乘。及生佛迷悟。皆是世諦分別之法相。而未稱實乘。實乘者無乘也。無修無證。無佛無衆生。故釋迦老子曰。世間名字故。有須陀洹。乃至阿羅漢。辟尸佛。諸佛第一義中。無知無得。無須陀洹。乃至無佛。是故無求無爲。任運自在。以法界爲居。以無法爲法。謂之眞道人。若不能直如此者。須向對治門中參究。唯了諸法無實。莫久住化城。

○看敎

古人曰。看敎須具看敎眼。宜哉自古多墮文言名句之中。不免爲算沙義解之徒者其唯由此。故究典籍之異者。在察其知見之正邪而已。故曰正人說邪邪亦正。邪人說正正亦邪。但其難辨之。若在明眼士。則一句分緇素。片言辨眞僞。假使同言同辭。不可一毫以欺之。古人曰。黃梅七百皆是會佛法。唯有盧行者不會佛法。故得衣鉢。當知會解之於心性。猶如油之入麵。故一念之解心。使你入不自在之鄕。然而其脫之豈容易哉。古人或三二十年。如喪考妣。如患心疾。而後方得大自在。豈知解之不及經論師。而守愚之至於斯哉。頃者閱疏鈔之異。雖有知解之深淺。未見出意路之窠臼者。宜哉藥山之不許看經也。慧眼未明者。須出網脫筌。而後知滄溟之濶耳。

○難易

佛法非難非易。而難易存乎其人矣。古人三二十年。如愚如魯。艱辛勞苦。或至截指斷臂而後了之。由此言之不可謂易矣。經云龍女八歲成佛。又如鄭娘靈照女。皆是小女兒。亦能

會此事。然則不可謂難矣。蓋以不得其要爲難矣。以至其妙爲易矣。非道必有難易也。古人呵易行易解。誡小根劣機也。故悟之遲速在功夫之得失。而不必在人機之利鈍而已。雖然今世流布之禪。閑修濫證。未見得其實者。豈得不謂難矣乎哉。

○無事人

大凡學道。秖須要爲無事人。所謂無事非謂偸閑求逸而無事也。事事無事。法法無法也。龍樹大士曰。阿耨菩提尚不欲何况餘欲。又古人曰。不慕諸聖不重己靈。又曰。心中得無事佛祖猶是寃家。皆是眞箇無事人。而始能如此。若毫有揀擇取捨之情。烏能得無事。

○性情

性也者情之實也。情也者性之用也。萬物有性情而其在人也。聞見覺知性也。憎愛邪正情也。縛性謂之情。脱之謂之性。其實一心而已。故經曰。職想住於緣生善惡。而心非善惡是之謂也。蓋至人之行發於性。故雖如有情非縛也。癡者之性蔽於情。故雖有善非實也。而其縛之者誰也。若非李都督必是王長吏耳。

○人才無限

黃山谷云。詩意無窮而人才有限。以有限之才追無窮之意。雖淵明少陵不得工也。予往年以爲確論。又聞崔顥題黃鶴樓。後李白復登之。爲顥詩被凌壓。不能得句。遂登鳳凰臺成詩詞。予又謂甚哉。人才之難得也。白之才而如此乎。頃者翻然改曰。是非高論矣。人才若有限萬法亦有極。法苟無極人才豈有限哉。蓋是匆卒之說耳。予又有詩贈人曰。胸中有詩泉。句水涌不止。云々。不知佗人以爲何如耶。

○辯心

心之爲法不可究矣。該萬法統今古。非但念想覺知而已。謂其廣則森羅萬象山川國土扆子升天蝦蟇飛空。未有外其心者也。而異學之謂心也。以爲一身之主事物之宰。蓋是慮思之計度而迷痴之所依。吾我生矣萬累係焉。且夫身之爲質。以四大成之。事物之爲體。各依其位而住矣。其孰主之宰之。然則一身無主萬法無宰。而所以其令之然者。識想之攀緣爾。故知異流之徒永沒于迷途者。惟在不知其心也。

○洞宗嗣書辯

夫道非聞見覺知。復非理義之所詮。唯能達諸法之實者。察僞似於毫厘。以其名不信其實。蓋夫釋迦老子之時。未聞嗣書之言。唯授受衣盂以信之。西天東地亦皆隨之。及至盧氏有難而止之。中世已來。或傳拂以印之。或與杖以證之。或附嗣書以信之。豈有佗哉。惟欲其法之不謬而已。故天童附永平嗣書曰。佛祖命脈證契即通。道元即通。是其證也。近世所以命法之不謬者。反失其實。未嘗論眼目之正邪知見之深淺。一附以嗣書衣盂之儀。豈是佛祖之意乎哉。古人以爲盲者之持鏡者。不亦傷乎。然則達其法者雖無嗣續授受之儀。亦不可不稱眞正之士。自古無師傳而具眼目者。歷歷可數。復焉得與有嗣續之庸禿齒也哉。蓋大雄氏之設化也。三乘五乘及無窮之法。悉有其用而存焉。其機之不同也。其用從異也。執其一以非其佗不通其宗者也。達磨之至東土。不欲得萬兵。惟一將之求。故不談教乘之理致。不論階級之次序。傑然唱大宗。祖祖相嗣以成其宗。故能得其要者。嗣萬劫於刹那。失其道者。隔鐵圍於睫間。是未足異也。悲哉。今世之人。師問其儀。未有非牟尼之正嗣者。察其實不爲圓顱之頑民者鮮矣。古昔有恐者。夏日得氷。食之則寒冽徹骨。以惜其一旦而盡之。儲之以筐箱。被之以衣袂。旣而開之滴水而已。嗚呼今之不儲氷豈其多乎哉。曰然則廢之乎。曰滔滔天下皆是也。孰能廢之。惟在求其實耳。

○接得警策辯

我宗中世以來一弊生矣。蓋天下之叢刹使僧侶連坐。打之以木篦之名警策者。其打之一兩下。或至數十下。日或數次。名之曰接得。送至令學者狂發顚亂。或誤以爲渠旣發悟。又或爲之印證。送至設饌相賀。嗚呼甚矣弊之至。如此也。夫接之爲言。雖有多義。今取交應引承之意。而今以打撲爲接得。將何有所據乎。顧是謬解其義之流弊耳。古昔龍牙問翠微。如何是祖師西來意。微云與我過禪板來。牙過禪板與翠微。々接得便打云々。蓋是記者省其辭。而令妄者至如斯也。若具錄之。當言微接得蒲團便打之云云。而解之爲打撲之義。亦不甚謬乎。又警策者元警牛馬之怠慢者。潙山擬之著警策。妄者又製木篦名警策。以僧侶比牛馬。足發一笑耳。未聞佛祖之會。有木篦之名警策者。蓋是明末之弊具也。若夫當機用之。杖棒木杓打蹈斬斷。無有定範。古人或斷臂自刎折骨碎髓。豈得爲常規也哉。

○辯頼氏之北條氏修禪學論

儒士之徒排吾教。自古多其類。不唯頼氏而已。然吾教之徒亦多衰弊。今讀此論不能默置。蓋夫今古治亂成敗之於世也。非人智之所能測也。若有定數者。故極亂之世。雖有賢聖不能理之。至治之時。雖非大材力者猶能宰之。所謂世亂則聖哲馳騖而不足。世治則庸夫高枕而有餘。且儒士之徒動輒曰堯舜湯武。而堯舜之聖不能及二世。湯武之賢不免放弑其君何也。湯武之祖先。豈無恩澤於夏殷之祖先也哉。儒徒曰誅一夫紂非弑其君。嗚呼是何說也。所謂君臣之義以一世謂之耶。以累世謂之耶。若夫以一世謂。則祖先之君臣。非子孫之君臣。烏得立弑逆之名。若以累世謂。則湯武亦弑逆之臣已。烏得稱賢聖也。且伯夷叔齊諫之曰。臣弑其君可謂忠哉。夷齊亦稱賢聖之士。豈不知君臣義而言之哉。然則湯武巧簒其國者也。嬴政王莽暴奪其國者也。後世治亂代起。不能保其治。豈謂之至教哉。是故我朝　先皇神聖。知儒教之不足以治天下。傳萬世而不廢其教。備於諸道之一耳。是故自豐聰太子已來。大賢至德。助王政誨臣庶。自帝王以至士庶人。所師事欽戴者。莫不出於佛氏之門。故能御萬世不二其姓。抑刑政討伐之權。雖有異其府。然君臣之義未嘗移也。孰與彼昔之至尊後之僕隷。而今之人主古之夷狄者。彼未審其義之所存。而僅執儒教之一隅。欲議我邦之大統。愚之且陋者也。論曰。是狷介之士。所以治其一己者也。何關於家國哉。是言尤非也。仲尼曰。爲仁由己。由人也哉。傳曰。自天子以至庶人。一以脩身爲本。未有其本亂而末治者。然則儒亦以治己爲本。何獨不足於汝哉。彼將謂治一己者。不足治家國耶。將治家國者。不足治一己耶。將謂一己在家國之外耶。未聞不能治己而能治人者。其謬見固不足辯。論云。北條氏安於悖逆者。蓋禪教所致也。甚矣彼之言之妄也。彼未覩我教之門牆。而妄爲臆說。甚於途聽途說。且曰。君臣父子空假而不足言。是亦非也。夫我教有四重十重及百千之禁。而以殺盜爲最。未嘗許殺小蟲奪微物。安謂助其奪國簒家弑父弑君哉。且空假等之義。耳食名言者之非所能知也。自古巨儒賢臣。翼賛之奉崇之。尙恐不及。况敢害彝倫乎。吁彼賣文字咿唔。得以育妻孥足矣。何夢誹議大人至教而不知畏也。顧彼徒不過位列中士。不過業比俳優。而見我徒遇知於帝王公侯。以大師國師稱之。徒以妬心嫉情爲此說也歟。儒不曰乎。人不知而不慍。彼豈未誦之乎。論曰以警世之喜異端。而不察其害者。予亦恐世人迷彼之妄言。而失大道之所由。故今辯之。

○金翅鳥王客說（金翅鳥王吟在丙寅詩偈之部二）

余嘗製金翅鳥王吟似客。々曰子詠佛家之金翅鳥則善矣。世俗亦有金翅鳥子知之乎。余曰未知請說之。客曰。夫人間之爲金翅鳥也其形不一。今古萬邦各異。其宜或方。或圓或橢小大亦不同。大凡其色黃者爲上。白者次之赤者又次之。黑者復其次也。王公不畜之。不能得富貴。士民失之則不能保妻子。是故爭之不顧死亡。竊之不懼刑戮。雖有賢哲之士。不得其翼則如愚如魯。雖痴暗者能挾其翅。則應飛行于千仞而翺翔于雲間。其德如神其勢如電。無遠而不至無吉而不利。子唯知佛家之金翅鳥能屠龍捉虎。而孰有受其屠捉者也哉。我恐虛翺翔于空界。而不能伸翅于人間。但養徒大無用之力。而終不免屈蚊睫蚤腸之間。余唉曰諾。我已知之。

○雷獸說

世稱。東海之山有雷獸。其形似猫兒而較小焉。在平常茹草飲水。陰匿怯伏殆不若佗獸。若或天威炎熱地氣鬱蒸。登山嶽攀崎岫。噓氣摩威。乘黯雲馭雷霆。當是時也。獅子恐畏天龍逃竄。予初聞之惟失笑而已。今而甚疑之。是實耶是虛耶。世澆道微而虛僞之法熾矣。間有逃世深谷養道幽邃者。其志或沒乎名利。假令麻衣草食。風操出于巢許之上。其實鈎情於名利矣。若夫一旦而乘時世之雲雨。馭權勞之雷霆。則令人獅子立下風。眞龍避其威。故曰是實耶是虛耶。今而甚疑之。

○商賈說贈透禪和尙之東關

商賈之說廣矣。奚特貨財云乎哉。僧也俗也。亦有其道也。故澤庵示娼婦曰。佛賣法祖賣佛。末世僧賣祖師。汝賣五尺躬。安一切衆生煩惱。色即是空。々即是色。柳綠花紅。信夫此言也。釋迦賣法。四十九年。其滯貨殆迨後世。中世已來以佛家之議論爲商量。商量也者賣買之賈場之名也。蓋石頭之舖賣眞金。馬祖之舖賣雜貨。長沙之舖賣禪賣教。近世吾門之宗匠。亦能賣悟賣文字。賣伽藍賣血脉。其督徒領衆者。唯欲其名之售也。予亦行脚已來。雖欲商賣之利。天資匱之。而所求不給。東邊賣油。西地賣贅辯。及至今時。纔賣讀經。以糊口腹。於夫大賈雖可恥。竊安其分耳。如予友透禪々師。歷參若干年。韜昧若干年。悟也文也伎也能也。多歲之所蓄藏。實非小賈之所商量也。而今復將遊東關。予聞之愕然歎曰。大哉商賈

之道以多之歲所蓄藏。尙未爲足矣。復將賣其所餘買其所少乎。安小道者不足與語大也。海之不知足。是以能大矣。嗚呼予之小安也。安得不惶慚哉。且今雖幸辱下交之義。後來恐求爲門庭之備實。而不能得。雖然佛法固貴緣因。故記此語。爲後昆憐鄙之緣。亦非敢賣予贅辯也。

〇文辭說

文辭之爲器也。不可廢而亦不可執矣。網羅三際經緯萬法。後人依以進業得道。可以法可以鑒。或師或友、如之何其廢之。然而近世文辭之學盛。而其道衰矣。不詳其義之所存。而徒務章句之學。猶如愛其華而棄其實。蓋人情之執弊也。故文辭之要。惟在識其法而已。又有一癡人不解讀書消文。輙曰文辭非所貴也。嗟乎復惑之已甚矣。當今之時修道理法。捨文字而其何乎從焉。彼務華遺實者猶得其庶幾也。至概而棄之不可救藥矣。何謂實也眞俗二諦及一切言說之法。未足稱實。惟劈開諸法之眞性。而法界之理猶視諸掌。具擇法之眼而無可無不可。隨諸緣之相而無是無非。若其如此奚但文辭。雖魔波旬之法復何廢執之有也。

〇紙鳶說

有一士夫爲紙鳶說。而以眞鳶比君子。以紙鳶比小人之得權者。環坐稱之。予獨頷之。或曰子似不甚悅。予曰文則文矣。巧則巧矣。然君子比類論義。亦未必止如此也。或曰子試爲之說。予笑曰諺有之云。雉之鳴于原售其命也。予殆幾之。遂爲之說曰。夫紙鳶之爲物也不過紙與竹。而至飄颺逸飛凌霄者。人命之然矣。且其形如鳶者如奴者。方者圓者。或有角者無尾者。一從其人之所製。而未以己所不欲敢拒其意。故當飛揚在天也。非諂諛以取之驕傲以處之。徒依風力紙線之所維持耳。若或及風歇線斷之時。藹然委泥陷然投淵。亦是時運之升降。物理之自然。孰能免於此焉。而渠非有好惡成敗之情而然矣。其升也以人。其降也隨時。未有一毫之勸其心關情也。今夫鳶則不然矣。翰飛戾天其意必有所求。不然則有所恐畏矣。嗚呼。其性非有隼鷹之能鵝雁之味。而至如此者。人惡其剽奪之悍也。然則翺翔而降。杳飛而升。其情也必有矣。由是觀之。小人之性。劫攘嫉忌。惟欲之從。惟弱之憂。復與夫剽奪以爲情者。豈其遠也哉。蓋夫君子之處世。其進也以道。其退也應時。亦不庶幾夫升降不以關心者乎。然而君子取捨異宜。未必執此捨彼也。予秖取紙鳶之勸辭。一出於無私心。

復將欲爲其雪辱耳。

○迂足齋本懷猩人說（猩又爲怏或爲狌）

迂足齋本懷猩人者。湘台和漢蘭人也。予嘗問其說。猩人曰。予性迂而足矣。是予本懷也耳。又俗語迂足齋猶如虛。本懷猶如實。如虛如實。不實不虛。且湘者水也。台者山也。予居不擇水與山。又和者本邦也。漢者漢土也。蘭者阿蘭陀也。予所依不在一隅也。又猩者猩々也。人者人間也。予性至貪。而其於酒傾壺廢餐。其容如人。其腸如猩々。故曰猩人。又免飢寒於緇流。是以人或稱上人。是則所以猩之通上也。予曰迂也哉迂也哉。可謂名實相適矣。然而予聞其言之狂漫。戲爲此說。

○佛氏怠慢議（集議院建議之取要）

夫佛也者覺也。覺也者治心解惑之謂也。張氏曰。小則遷善遠罪。大則悟心證聖。此言得之。又曰今之浮圖。雖千百中無一能彷彿古人者。豈佛法之罪也。其人之罪。雖然禮非玉帛而不表。樂非鼓鐘而不傳。非藉其徒以守其法。則佛法殆將泯絕而無矣。此亦至論也。蓋近世僧徒怠其學廢其道。遂至今佛法受譏誕虛妄之謗。是皆佛氏怠慢之所速也。或諂曲而得貴富。或虛名而無實德。是世俗有識之所愧。而佛氏有靦然爲之者。豈得不痛歎哉。若欲矯此弊。莫如舉選公舉之法。若或巨寺大院。一得其人則其下自正。所謂本立而道生者也。但其法之不行。佛法衰廢之所由起也。

○曹洞宗制議（集議院建議之一）

戊辰之夏。官命越之永平寺。碩德公議一新宗制。敎化諸民奉報國恩。而永平之支派。有不服其制者。是故至今因循不振。加之以能登總持寺之愬訴。於是一宗之徒不知所宗嚮。以恐察之。一宗之源已混淆。烏得糺其支流之涇渭。若夫欲糺之。則宜於皇居之地設宗議所。闔國之錄寺。各公選有道才德之僧。公議評論以盡其至理。而若有難斷者各錄其所疑。決於多衆之所可。而後請官之撿許。達之府與縣藩。則公私不悖。宗道不亂。是以足上贊舉治下化萬民。蓋夫公選之法。以無私親阿黨之偏爲至要耳。

○贈諸宗之集會所（即同盟會）

某謹白。方今天下萬機一新。當此時西洋之諸教。殆將蔓延彌蔓。實佛氏成敗興亡之所係。不可不為痛歎。而顧其所由。非特彼國之權勢熾盛。教徒巧術而已。抑我佛法中世已來。諸弊交起。學徒偸惰。未能全脫彼之所破矣。奔馳於名利之途。而失佛祖之旨者。滔々皆是也。吾佛法衰疲務極之日也。譬之戰陣勞疲之難敵銳卒。不宜攻伐戰討。恐致一敗難收。豈暇論其國之正邪强弱乎哉。然則為之何如。莫如養其勞疲而滋長精力。養勞長力莫如務學。務學之要。在審其所適從。而予未審當今之所適從。謹質諸十方諸德明師。將黽勉從事。伏請清諭。

○贈人時得抄書略

佛法雖多。要之破邪顯正而已。邪破則正自顯。正顯則邪不能存。其勢不兩立。當今顧佛道之衰廢。其原有二。一由佛子之怠慢。一由西教之蔓延。而西洋諸學之所長在理學。理學之所據在實效。是故天文地理政體軍制醫術器械之屬。皆是理學之所發明也。彼排吾佛以詭誕虛妄者。理學耶蘇之徒也。世俗多憂耶蘇之教。予謂不然。蓋耶蘇之排吾教者皮膚也。故其說浮薄架空。務示實歸。固不足服識者。彼不過欲擴其教耳。理學之攻吾教者骨髓也。其說實効明驗。方今王公士太夫之所服用也。故予固不甚恐耶蘇。唯欲推服理學之徒。故其說大異諸家。今吾稿中。抄出切於時事者。名時得抄。以屬流布。恐有錯誤。請不吝忠告。

○贈腦脊異體論於加州天德院奕堂和尚

己巳七月六日。某白。金龍山頭老禪師侍史下。久不奉書信。早經數歲。近聞老座下有東京之役。恐宜趨謁。遠蟄縮于陋巷之中。孤貧困屈不能頓伸。以為遺憾。反顧曾在浪速風外老師之會。當時外公之禪。實出諸方一等。而愚誤過肯首。自以為足。爾來愈精研。方覺猶有進路。且近日西教益熾。吾道愈微。於是慨然有一二撰著。心識論曾呈之。今又呈腦脊異體論。必排情見不吝高論。恐復近欲赴東京。多々曲盡。先此衲子欲趨謁奉清教。請莫欠鉗鎚。頓首不備。

○與丈六和尚書 （為退吾和尚）

某月日某稽首九拜。白丈六大和尚大座下。久不奉清教。早經年所。恭惟止履萬福否。人天易化否。某依舊頑健。請莫切慮之。有一事於此。特以言大座下。曾聞祖宗之人師見知之

粹。未有若吾祖永平古佛者。而乃祖之遺身。有裨於後世晩學者。無若正法眼藏。眼藏之說。汪洋覼縷。辨萬法於區々。揀乳水於涓滴。自非眼目快瞭之士。得其要領者少矣。況年代悠遠。此彼交作者乎。於是。吾天桂老漢。以特達豁了之識見。發揮乃祖之蘊奧。證是剖非。述之辨注。見其褒後之語。蓋一世之勤也。某蒲柳之質。進不足勵衆率群。退不及汲溪摘蔬。徒放曠塵寰。匍匐人間。雖然非無薦善黜非之意。故募刻其辨注。以發乃祖之意。資將來之學者。復庶幾報桂老乳恩之萬一矣。數歲之際。介於胸臆。或以議相識舊友。未遇快然相唱和者。昔秋祖忌之日。又以告祖山之耆舊。及至東關。又詢僧統之職事。然而皆如不釋然者因察之。吾桂老之於諸方。猶如衆林之於喬木羣鵶之於一鸞。宜哉其忌嫌之多也。某愈慨歎。百慮千計。欲成其事。聞紀府者。幕府之至親。天下之貴族。而諸侯之列未有出其右者。而座下之化紀國。猶如風之偃草。惟冀座下之法力。以借紀府之援聲。且被之以紀公之序跋。而藏梓版於其國之名刹。永垂後世。豈不亦是乎。且聞有所依者必强。有所怙者必全。方今法運微弱。而非依王公貴族之力。則得其全也難矣。加之桂老者紀國之產。而其故家舊族。猶有存者。是其非不難爲乎。惟座下察之思之。所謂爲法而不爲名。爲道而不爲利者。唯在此一擧。若或抵萬一之譴責。或如梓資之費。某之所任。而非敢煩座下。書不盡言。事々亮照。不宜。

○與奕堂和尙書

座下北發之三日。訪尊侯於換骨堂。因審。杓柄漸長救濟人天。且有轉位住山之事。某聞之大悅。且以賀之。以言託默旨庵主。不知能達否。夫世間其人甚衆。而特於座下如此者。非特以親舊相識而已。抑在欲見難見聞難聞爾。俗云。彼其之子。不稱其服。某嘗論之曰。豈唯俗也乎哉。雖出家亦恐不能免其譏。方今錦繡其衣。緋紫其服。至論其道與德。多是禿頭之野夫耳。是豈非不稱其服乎。當是時。如座下。德不媿古人。齒超四紀。而其儀未備。非不稱其服乎。自今已後。可謂服德相稱。乃歌曰。彼其之子。稱其服耶。某邂逅于烏鵲樓之後。蝸縮於河內。飮食之外徒長狂疾而已。而當時命某以耳林鈔事。雖辭之以數次不可。遂貪舌頭之小蜜。且自許以謂。智者豈無有一失哉。愚者安知不無一得。亦自不愧剪劣。敢爲攪斂則。今而自悔。予過矣。予過矣。道不同不相與議。且窮困之切也。汲々乎衣食。唯饑寒之恐。以故閑餘不續。是某之所以不得不肯辭也。若或求一二於千百。僅々之際亦見其意之存矣。

○答藏雲和尙

是月十九日。換骨堂兩禪尼。捧尺素幷佳什而至矣。卽雪手敬讀再四。乃知高履益寧。且見和酬拙韻。荷負何勝。蓋是投臭餌釣金鱗者。喜躍不可言也。又筆陣之高致。實是空海法師之書體。摸擬逼眞者也。但草體之奇古。使吾輩淺見者殆難讀。徒發愧赧矣。又先回以良寬道者詩集校評竝序跋見託。因翫誦數次。尤慰卑懷。且批評遵命。別呈評語。想是不遜之罪不可逃。而不別作序跋。是意在欲讓佗人。若不得已。則以評語冠之。亦不敢望耳。座下高什逐件評之。亦是僭越之太甚者。斯只感交情之切而爾。復諺所謂岡眼八目。請以交情之厚恕其罪矣。某近日拙稿數章。別錄以呈。亦將當臭餌。且一篇漫筆。亦將答弘法之筆意。唯懇其志。而莫取其拙幸甚。

○寄普明禪士書

時維盛炎。老和尙及兄座下。護法弘化。人天之多幸不可加焉。某碌々依舊。請休慮。傳聞玄龍禪士歸省空王。嗚乎哀哉。予之於渠固有斷金之義。且其氣凛果雄。而若將有爲者。惜哉。不卒其業而至如此矣。然三日不逢難爲舊觀。不知臨終之日。卻有別消息否。夫生死不可已。苟不了其實。惡得有撥轉地。吾人之警策。豈敢可佗視哉。某貧而無供具之可贈。聊綴一偈。具空位。某頃者在叡麓。遊天台之教肆。粗究經論疏鈔之異。其立言論義。雖有淺深麁密之差。至其見地未見得其實者。宜哉古來致算砂之責也。嗟夫經論師固不足論之。祖門之人師。若延壽覺範皷山雲棲等。古來以爲宗說兼通者。某惟不爲然矣。何則不以雄辨强記爲說通。而以說不失宗爲通也。故質疑似之非。辨乳水之法。難遇其人也。某雖忝爲以此爲任。近者。至能之總持而旁將陋敎藏。宜入室以致別老和尙及諸公。惟祝融退令。且有東參之役。又過學公之適。遂不果素情。願賜海容。且爲諸公不別裁書。請以此意傳之。五分錄法要等。春際惜之其地。方今全璧隨貼名贈之。炎威尤熾。爲老漢莫怠保持。且自玉不宣。

○又

弘化丁未春正月五日。河州稻葉小庵衲某白鳥鵲大樓閣兩尊座下。天地添色。法界增壽。且遙望浪速之天。瑞雲織錦。祥氣罩空。某竊以爲。是必老和尙及諸公德輝之所感爾。不然何其地之特多瑞祥。因爲賀且祝曰。二嚴具足。法壽無疆。某亦隨例增齡。閑坐于空牕之

下。散步于曠野之外。固雖非有動天驚地之活計。亦非無甘分樂己之風流。乃寫詩若干篇。以具春暇之笑緣。若過圓通禪師諸禪德。請復以此言之。惟庵中蟄居于清貧。勿罪餬餅之小與書儀之不備。

○簡淨國徹定上人（時住岩槻淨國寺）

十一月十七日。某白淨國徹定上人座下。昨得卒晤。未暇盡情實。而遐旅窓。讀祀先辨謬西洋論二本。以忽察之。辨謬辨則可矣。西洋論未可矣。理氣之論未盡善。不宜刻之。若刻之則破者從後不可防禦。恐汚祉名。後來以祉名刻之者。須列名環閱議評而後刻之。予性狂狷不能藏伏。隨便覼縷不備。

○簡佐藤礫川

十月廿九日某白礫川君足下。偶辱知遇。多荷趨走之勞。璞玉無所用。豈望雙臏之刑哉。可進而不進者懦也。可止而不止者狂也。予已非懦何更遂狂乎。有詩寓意。笑玩是幸。不備。

（附題觀梅花有感之詩）

○不朽錄序

阿蘭若精舍者。公界之道場。而非僧侶之私物也。故自古歸依三寶。則王侯縉紳。忘其尊富而恭敬之。悍士武夫。失其勇力而禮拜之。匹夫匹婦不厭其勞而給事之。其信之者必有善報。毀之者必有惡報。記冊之所存。耳目之所驗。不可誣矣。然則三寶之在世。國家之祥福也。而我雲居山。開端于寶曆。幾百歲于今。而歷世二十有二。以及山僧。乃考先世之記載。寶曆九歲初立寺名於公界。其明年開山和尚示寂。後五歲三世示寂。後二歲二世復示寂。四世已來載籍不詳。然而察其終始。經世不熟。成功未全。其後歷世。恐亦不甚振。及至近世。產貲悉蕩。予甚歎一佛場之廢頹。化有緣之檀越。營小堂一宇。名曰如意堂。以釋雄氏爲世尊。以辨財天爲護法之神。願以此實基。成將來之嵩嶽。因今錄其所由及喜捨之姓字。永垂不朽。後世復續我志。不廢定慧誦讀之業。以報答四恩救濟三有。勿違紹隆三寶之任矣。

○長喜山鬼簿序（爲禪洞和尚）

幽則有神靈。明則有形象。而迷者異之。達者一之。故昧者之於物也。形勢利害厚之。其於

幽隱微冥也。疎之而不知其所厚。皆出於其所疎。唯有至人。厚其所疎。愼其所不知。故其道益熾。而其德愈實矣。余頃者遊北總。訪故人長喜山主洞公。洞公偶有檀越鬼簿之設。屬余叙之。而問其結搆。曰以統歲月。以記逝魂幽鬼之名。且禪誦之功。將資其來果。蓋於人之所疎而厚者。於洞公乎見之。余亦不勝隨喜。因以爲序。

○某寺祠堂化簿序

夫伽藍精舍者。佛法僧寶之靈府。而各家祖先神鬼之冥宅也。故自古歸宗三寶。孝道祖先者。必先建立精舍。莊嚴祭堂矣。且紹隆三寶之道德。資助祖先之冥福者。僧房住持之任也。某山古來非無祿産之備。而中世已來費弊代作。二殿俱廢。始至難扶持。雖然某苟帶住持之印。不能居然視之。以告十方有信之檀越。求喜捨之淨財。施財之多寡者。從家産之有無。功德之厚薄者。依信心之虛實。唯願使薄者厚虛者實。同洛平等大施之功德海。施者化者及隨喜之徒。豈得無悉到菩提之冥應也哉。

○雲衲接待喜捨錄序

夫吾大雄氏之設敎也。以檀度居六度之上。其制惑業也。以貪慾爲諸障之魁。蓋祖門之僧徒。放捨身心。冒險超阻。身行如浮雲。心操如流水。故謂之雲水也。其尋師求道也。至截指斷臂。擘身碎骨。何特螢雪之功而已。雖然不能以露宿水飮支飢寒。故開旦過於洛東岡崎接心庵。接待四來之僧侶。固不論凡與聖。豈問二支五派之區別也哉。於是募喜捨於十方。錄姓字於不朽。抑功德之厚薄者。在施者之心操。藥毒之罪福者。存受者之德業。惟願施者受者。共出離有漏之心業。永安住平等無漏之法界也矣。

○雲衲接待喜捨錄序

古人云。功德海中莫讓一滴。善根山上一塵亦可積。蓋夫萬德具足者。小善之積也。三途八難者。小惡之成也。故功德在其心之實僞。而不在其事之細大也。其心實則以之飯與餓狗。其功德同供養世尊。其心僞則造立數百精舍。度無數僧。全無功德。方今開旦過於洛東岡崎接心庵。接待十方之僧伽。以米袋募四方之施主。抑不論一撮二掬一袋二袋。皆是功德善根之一滴一塵也。及其成海嶽。固絕大小多寡之情量也耳。

○夢癖集序

自古如莊周盧生者。名乎夢者也。然而天地之間。貴賤得失。以至蟣跳蝿伏。莫不夢。而人多貴覺而賤夢。故夢雖有好事不錄之。曰夢也耳。後雖有災逆不爲意。曰夢也耳。或及有大好事劇災逆。爪其腐試其夢與否。抑好事欲不夢。災逆欲其爲夢。且夫癖亦多矣。爲聖爲凡。有大隱爲巨賊。爲英雄豪傑。凡非平常者。皆有所癖也。但有善惡是非之別耳。蓋癖也者。好而爲執習而爲性。雖欲止之不能止者也。古者曰。人癖於忿懥恐懼好樂親愛賤惡畏敬哀矜敖惰之所。其癖於善者。神祉之人賞之。癖於惡者。神禍之人罰之。又有癖之外於賞罰者。所謂書畵琴碁。及遊宴奇玩之類也。雖然癖之太甚。則亦多不能免賞罰之域。是知癖者兆於善惡。而善惡關於賞罰者也。獨予之爲癖也。其類少矣。何則非好而癖之習而執之。或假寐而夢。熟睡而夢。有少時多時終身多世之夢。又有轉變之夢不易之夢。又如人事苦樂憎愛憂歡。亦是平常之夢也。予之所夢。大抵如斯。而過閑記之。名曰夢癖集。然諺曰。聖人無夢。謂是無稽之語也。孔子有周公兩楹之夢。法華有好夢之語。然則佛也聖人也。親於夢者。予甚爲夢恨之。且君子思不出其位。不能言於不可言。行於不可行。若犯之罪責至矣。其言之行之。而無罪責者。其唯夢也歟。故今之所記。有非予之可行者。若人尤非其位。予將曰夢也耳。彼將不許。其夢而加之罪責。烏乎是亦夢也耳。唯恐有予儕不能夢之夢。予安得夢記之哉。

○臥龍梅書畵帖序

肥之天草。有洵汰山金性禪寺。吾故人超禪々師住焉。巳未之夏。至京師屢訪予。一日袖裡出畵梅曰。是予之所撫愛。曾得于吾近里楠母之邑人。其古狀奇怪。始如臥龍之護頷珠。故名曰臥龍梅。蓋此樹之至山門也。遠近聞之人跡不斷。抑臥龍之將起雲雨耶。且此樹之應山門耶。今予因事至上邦。將爲此樹製書畵帖。以募諸方之文雅。請序之。予曰。人之不有臥而不起者。物理皆然矣。昔者管公愛梅樹。及公之謫。樹飛隨之。今公之以臥龍名之。亦安知不起躍而昇九霄也。宜哉。公之以書畵褒之譏之。予見此樹之奇狀。知有神異。必也四方文雅之書畵。喜躍而隨此樹矣。予亦以腐文爲之先行。若或遇公之龍弛誰怠。復將欲隨樹而昇九霄也耳。

〇道理之世序

至大而難見。至廣而難測者實理也。該天地統萬物。豈非大且廣也哉。自古聰明英才之士。學之究之以盡終身之智力。而猶有不及者。豈非難見難測也哉。蓋夫難中之難妙中之妙者心理也已矣。觀近世開明之學。大科爲四。曰教曰政曰理曰醫。此四者上古混之。及至近世境域判然。察其學之盛衰。理學最後盛。而未出數百年能統括諸學矣。故雖政教之學。乖實理則不得成其用。余嘗曰。教莫善於佛教。學莫良於理學。如多馬彼因氏。理學之精者也歟。其駁耶教精且確者也。也耶教徒狡猾詭智。恐不能接鋒。余嘗有讀天主教詩曰。錯去錯來誰辨眞。賺兒巧飾誑痴民。嗚呼天主知吾否。吾是先天不滅人。余當時不能辨者。此書件々取證鑿々穿鑿。謂之照魔之靈鏡非過讃也。如多馬氏實先得我心者。而余之及見之亦豈不釋然哉。由是察之。余之所謂教莫善於佛教者。亦安知不有至後世如多馬者出。而淘之汰之殆無可遁也哉。余閲佛書以謂。猶如萬斛沙中擇數顆眞金。但取其金而留其沙礫而可也。然而非如彼耶教鍍頑石以金漿。故曰教莫善於佛教矣。抑淘之汰之亦必依實理。所以謂廣大無外者實理也。噫今之主於教壇者。烏得不取彼實理之桑土而綢繆教牖法戸也哉。雖然余於多馬氏未能無歉然。多馬氏以爲天地造化之主謂之眞神。如人心亦神之所授與。此未識人心之實體。蓋心也者亘乎萬世而不滅。周乎萬物而非有。故其顯也如有其實非生。其隱也如無其眞非滅。譬如水火之有生滅。而未嘗生滅其原質也。況有授受與奪者也哉。此理之至妙。非拘泥於聞見理學者流之所能知也。嗚呼多馬氏逝矣。余憾不能語斯人以此理使斯人屈死於造物主之藩籬。可惜矣哉。余友千河岸氏幹此書之譯事。而徴余序。乃忻然書之。日本紀元二千五百三十六年三月鶴巣逸民坦山題。

〇書道理之世後

予嘗疑。觀近世歐米之士莫不知於諸學。而其信耶蘇之惑誠可駭。今閲此書了拍節曰。千古之英雄能可醫歐米之惑。亦將醫東洋之癡教。所謂打草驚蛇者耳。明治十年五月五夜書於道理之世後。

〇遊山観水記

（十三日）

山水者大人之所遊觀。而非小々之所能及也。予自少歳好遊山観水。常憾足跡之有遺。

大凡有所徂。欣然樂遊觀于所未遊觀矣。蓋以事爲事則多所局執矣。不以物爲物則無非遊觀矣。丙午夏將發台麓到東參。自大津驛而乘舟。以到東江米原浦。此舟也近世之所造。而舟腰架車。舟子蹈之以當楫帆。若加以風力則一宵有餘。假使泝風浪。不過半日之遲。此夜也天晴氣凄水淸風凉。山掩翠月幾望。旣而到湖心。四山朦朧水月接光。遥望台麓之舊居。亦在此朦朧之中。又相識之相語也。若耳聞之目視之。惟憾獨在孤舟之中。徒憶相識與舊居。豈無山民與商客哉。惟其語言不出賺問賈利之際。時殆中夜。舟子激車圓月中天。予獨凭舷吟賞。若與月語。似與水侶。有一客問曰。嘗聞之山水者文人雅士之所遊觀。而非衲子之所宜也。子之好之亦有說乎。予曰有。蓋夫山水者乾坤之精靈。天地之眉目。萬物之所依以生育。孰敢不遊觀也。惟其所觀有異耳。弄奇愛景寄情懷於詩歌。是所謂文雅之遊觀爾。朝承佛光暮續法燈。爲王公師而爲郡生父。聲名如嶽。智辯如流。蓋是衲子之遊觀。而得罪人世者也。甘道安貧逍遥于山水。遊優于物外。蹤跡無恒威儀不拘。亦是衲子之遊觀。而潛跡塵間者也。惟大人之情。不爲物局不隨世遷。故其遊觀之大也。無凡無聖無穢無淨。若夫如此之人。爰有得失之可言也。客於是睡。予復弄風月而到前原。

○遊山觀水後記 （九月十七日共鳳外晃印二老及諸歸友）

前之有遊山觀水記。粗述遊觀之情。惟其言不據前車之轍。又徒一時之放言爾。頃者揭蓑遊浪速。有人促舟行。予復欣然隨之。此日也天日磨妍四山媚秋。無風無雲海晏而河淸。乃從福島之鄕。艤一葦於河上。其河則天下之名流。其源出于江之琵琶湖。經宇治至淀城與三河合。其尾至浪速終歸海灣。々口有一小山。蓋天保年中所築營。故以暦名之。其高數仞。方圓十數里。樹木榮茂屋宅盛華。遥對連山近臨滄海。實攝國之一觀也。其成未超十秋而能至如此。固雖人力之所致。亦得不謂天造哉。於是掛纜灘下。登山臨嘯擧灣遊咏。至舟中所載劇宰無主。其娛不可勝言也。歡極情盡。反有思歸之意。乃命舟子又向河頭。河頭泊樓船。載酒肴妓樂之美。且其喧嘩倡拍之態。妖冶舞踏之狀。遥而望之。宛似一棚之傀儡。蓋富驕之兒。恣情遊觀者乎。實山野之所未慣見。亦是一時之遊觀爾。旣而夕陽射帆。又溯安治川而終還福島。

○嵐山再遊記

海內櫻花之勝。以嵐山爲第一。而予昔年漫遊之日。與兩友遊之。時在晚春仲旬。不見一片之殘花。加之途遇風雨。衣袖淋漓。纔投逆旅。而免飢寒。於是有逝水之嘆。後數歲歷遊諸方。近住洛傍。而花時或爲人事失暇。又爲風雨過期。遂及今春。今春得少暇。仲春二十日。又與兩友遊之。而花未及半。山川寥々。興味未全。乃歎曰。時之難遇如斯乎。昔年失於晚。今春失於蚤。亦不能無慊意。後二十二日、復與一友遊之。是日也。天晴氣和。毫無風雨之魔。先至北岸。望南岸之櫻花。燦々爛々。殆及滿開。乃傾腰間之孤瓢。恣散步吟咏之情。徐渡吐月橋。至南岸。遙望北岸遨遊之狀。亦可以發興意。其人則賤貴少長幼老醜妍。有少女。有妖婦。有僧。有醫。有書生。有伎客。或携娼妓。極管絃歌舞之娛。或騎樓船。盡流觴詩酒之歡。來者去者。笑語者戲謔者。怒叫者醉倒者。如其尋常四民。固不待言之。即戲評之曰。南岸之花。有妖雲艶霞之色。北岸之花。有嬌舞媚歌之情。大凡耳目之所及。無非遊興之媒。予喜遇其時。記見聞之萬一。抑亦如興味之情實。各人之弄所。雖有長卿子建之筆。不能記其彷彿矣。

○遊豆州初島記

六月八日。會豆州初島初木明神之社祭。予以坐夏于土肥吉濱得及之。是日（早晨少陰。恐有風雨）辰後氣清雲晴。遂艤小舟而行。同侶七人。舟師五人。先發吉濱。一再喫劇浪。意殆退怯。既而波浪稍定。漸得帖心。問舟師以地宜。舟師曰。自某至某相摸也。自某至某伊豆也。某名某々號某等。紛々冗々不可備記。蓋相豆之連山。顚列于西北。隱顯出沒于雲烟之中。亦一好景也。武總在其東。而在其南者初島與大島耳。過之則西土印土之洋海也。吉濱距初島三里。中巳而發。下午而到。其祭儀皆村社之風規。無足記者。家屋四十。頗質直而無盜及暴戾者云。予與數輩徜徉歷覲。島方數里。無山川而地形如岡。尤名于桃實。稍植黍稷。海上多產石決明。島中皆雜樹。而松殊居多。且憩且餉。將歸就舟。炎熱增劇。解衣游泳洋中。更攀舷而揚帆。大凡自朝已來。天不絕晴。雲烟四布。順風二里。而回顧雲烟猶稠。頓失初島之所在。又覩漁船四五隻。渠情在得魚。故不喜見僧人。雖好問無好答。乃風力漸衰。激揖棹而還吉濱。薄日如月懸于雲西者。尙三竿許。

○自吉濱還江都記（夏坐于相州足柄下郡吉濱宗德院）

丙寅六月二十二日鷄鳴發吉濱。默翁蘭臺二子隨送數里。夜已曙天亦晴。相共飲別于村店。訪故人英公於小田原板橋。而宿。（禪英和尙住板橋盛壽院）二十三日以有前約到褭

乘寺報恩院。相識黃公輪住之。(上州前橋林喬寺默童和尙輪住于報恩院)二十四日在同院。以履前約製石垣記。且終日請詩書者不絕。爲之欲腕脫。呼杜康助精力。朝來細雨午後暴劇。二十五日黎明。發雄山將赴大磯。聞津渡之絕。渡十文字橋憩村店。聞大山石尊之開場。轉路欲赴大山復問其非。蓋村店婆子欺予也。然己進而不能退。是日午後小雨。雲霧冥晦不辨西東。及至不動殿前天稍霽。如有一池于目下者武相之海也。如池中有點然盃子大者江島也。雲霧爲大陽所驅逐。紛々擾々海陸山谿明滅其際。亦一奇觀也。漸下而宿大山。二十六日小雨漸晴。宿江島。二十七日陰晴不恒。取路於鎌倉救命寺桂村比野村而宿橫濱港。二十八日自橫濱野毛橋賃船到江都。

〇龜井戶看梅記

丙子三月六日絕晴。拉一生將賞春探花。先發小川坊。買腕車抵淺草奧山。遙望梅園纔見梅蕾。乃轉腕車抵龜井戶梅園。梅花稍盛而臥龍梅未半。園境朴野。樹容古老槎牙縱橫甚有逸趣。予四十餘年前嘗住此近傍押上村。而春時在佗未嘗訪此園。今日初看之賞味殊多。園中臥龍梅尤古奇。蓋數百年之物。恐植成於德川氏之初年者歟。然則殆三百年偃然安臥於草莽之間。而招引大都之士女車馬絡繹。能占都下梅園第一之名矣。古昔諸葛氏之臥草廬也。劉先主三顧。而使臥龍騰驤於天下。以成千載之名矣。此梅三百年偃臥。而能傾動大都之耳目。可謂不辱臥龍之名矣。既而茶一喫就歸路。詣菅公之廟祠。祠前一梅樹標曰飛梅。嘗聞之菅公愛梅。其謫在筑紫也梅樹飛騰而隨之云。此地之距筑紫數百里。而菅公之靈寓此祠也。此梅飛騰而至此地者耶。噫此梅而飛騰往來於數百里之際。其果得神變妙通者耶。予大有所感乃賦詩曰。錦衣車馬接聯行。總是劉君三顧情。草臥驚馳六十歲。愧無一事比梅兄。復閑步而逐閑境。遠望萬里之曠景。悠々然如神仙之逍遙於天外。遂至兩國橋頭。就一飼店而買醉飽。復歷觀閙市。至夕照而還舊居。

〇興學記 (爲國定和尙)

古者謂。雖有嘉肴不食不知其旨也。雖有至道不學不知其善也。蓋夫所以其爲道者不一。其在竺土也。佛氏之外其流九十有六。在支那自孔老楊墨以及諸子百家。皆以其道爲道以其學爲學。是故或相詆斥或相讎敵。方今歐洲之學蔓延于率土。而彼以吾道爲誣誕爲虛妄爲姦詐。詆斥讎敵無所不至。豈非吾徒危急存亡之秋哉。當此時。吾徒或植髮而就

利。或不律而爵譎焉。醜穢辱恥復已極矣。嗚呼悲夫。使吾世尊爲兇魁妄首。以寶法爲空誕虛僞者無佗。吾徒偷安惰慢而無學術。但其所業不過求世利浮名耳。不謂如之何則復不可如之何。由此察之。不可不興學勸業。但願十方同好之賢哲。不論宗趣之異同。不顧門牆之爭閱。捨自佗之情勢。遍以就學循道。遠報古聖之大仁。永不失群類之正怙。復防捍外魔之侵掠。豈非當今之急務哉。

○玉印記

丙辰之春。間行京師。而骨董舖見一玉印。篆松聲樹間之四字。即購之以爲予印章。而製者篆者持者。共不可知。雖然以篆文考之。恐隱士之所帶也耶。抑隱士下世之後或絕其後或爲蕩子流浪市舖者耶。逸士傳曰。許由隱箕山無杯器。以手捧水飲之。人遺一瓢。得以操飲。々訖掛於木上。風吹瀝々有聲。由以爲煩遂去之。又寒山詩曰。微風吹幽松。近聽聲愈好。又曰幽澗常瀝々。高松風颼々。蓋今此篆文。皆有其意。故曰隱士之所帶者非耶。但予浮遊城市横行寰闠。如不應篆文之意。雖然予曾謂。動靜雅俗。在其人而不在其地。在其心而不在其形。故得其意者。雖在城市寰闠之際。處々皆深山幽澤也。雖在百煩千鬧之中。事々皆間靜三昧也。然則人馬駢闐。亦猶不異松間樹下。且予逃於痴狂者也。雖在城市寰闠之間。未曾憂煩長者之車。復何欲倣山間溪底之小隱也哉。

○痴隱室銘（戊寅九月巳來卜小室於淺草公園）

一居處無恒出入不拘。以天地爲一盧。以萬物爲伴侶。安於所遇適於所處。而有不安不適者則避之逃之。祇任我性而已。

一我性不好僞雅虛飾權勢倨傲。故自非純雅之士不若庸俗之客。有詩云。我每逃三俗。俗僧又俗儒。就中俗吏踶。永不相馳驅。雖然不挾俗氣權勢者不例之。

一雖有大賓貴客不設酒饌。所謂不喜飲食客。且以我安於癡貧也。有詩云。隱超巢由癡與貧。雖非求隱更無倫。支公何意買山遁。却以遁名賣世人。

○至道邱碑

西備州之處士高田氏。新脩一邱以爲祖先之墳塋。丁未之春。其國之禪英謙公。遊浪速。偶語予以其故。且索之名與銘。予曰。其處其人其事其物。予未識之。途聽途說不錯者幾希

矣。請辭之。公愈强之。乃謂曰。人之不能得周者事物也。復不可以偏者心也。故事有隱顯。心無今古。若夫無已。則詳其心之所存。而於其事畧之耶。公曰可。蓋此擧也脩墳塋。所以致孝於其先也。且建之誌表。所以告志於後昆也。然則雖未及見其事。其心必發於孝。佛曰孝順父母師僧。孝順至道之法也。仲尼曰至德要道以治天下。亦孝之謂也。由此觀之。孝也者緇素之至道也。遂名之曰至道之邱。銘曰。家談綿々。孝順祖考。不出戶庭。誠感蒼旻。佛名至法。尼稱要道。孫嗣竝鑑。永守至道。

○醫生津田某求語

丙寅之夏。余安居于相之土肥。醫生津田某來見曰。某今年六十一。耳目聰明四支健强。且以求壽詞。余曾聞之。醫之不養生。儒之不行狀。僧之不律儀。世俗以爲三失之鼎足。而翁之健强如此。其養生可知矣。且聞上醫療未病。而翁旣如此。其療未病也必矣。余乃記其語。爲翁賀之。復竊諷儒佛之徒云。

○書遂得集後與和田生（稱理一郎羽州米澤人）

嘗有無明證道之篇。而識見鹵莽。文義疎淺。恐是遼東之白豕耳。頃者足下强索之。即寫各一篇。且冠之以自敍詩一篇。總名曰遂得集。敢以贈左右。多有失誤。請莫嗇示諭。蓋吾道高遠。自非至人其不謬之者鮮矣。經論師之失。歿于義解焉。吾宗中古已來。弊惡代作。爲人師者。多爲浸淫。及至今世。難遭正師。是所以我不敢檻僭喩之謗也。且夫能仁氏之德。尚有十惱之難。而異流之徒。至此諸蟲毒。豈是古人之失也哉。故予此集非所望於世人。而今爲足下喋喋不已者。特欲求一士之諤々而已。

○題雨窗讀史稿後（社中文會）

雨窗閱諸子讀史文。及讀諸葛亮文天祥之事。掩卷良久。涕淚潸焉與雨滴而降矣。蓋方今若我佛道。殆若漢祚宋運之將滅也。當此時。豈不有若諸葛氏文氏。而忠肝義氣足。感動天下萬世哉。若夫漢宋者人主一世之祚運耳。若佛法實亞細亞第一之大教。而釋迦氏之智德。亦非漢高宋祖之類。猶且將拂地而滅焉。古人曰貪夫殉利。烈士殉名。又云匪熊匪羆。卒彼曠野。嗚呼噫嗟我復將斃於曠野矣。余評此文。不覺發此感。乃書諸文稿之餘楮。時雨聲已息。涙痕未乾。隣雞報曉。時經告辰。屈指二月二十四日之第四時也。

○題風外老人虎圖（龍海院藏雲師所藏）

大凡有似而非者。有眞而可疑者。有類而不可辨者。但智者能察之而已。余曾見畫虎。其狀如猫兒。及近世觀眞虎。威猛獰烈爪牙峻利不可觸犯。聞其哮吼則山岳震蕩百獸潛伏。是圖畫之所不能及也。日者至大珠山。見風外老師所畫之虎。誠如見眞虎聞哮吼。余曾侍外老師。々之居常溫柔而有幽彩。殆如猫兒之可弄翫者。及其呈禪機弄爪牙。令人熱汗浹背。大異彼虎皮猫質者。今此圖足想像師之眞。余乃愕然爲之記。

○題少妓圖（爲月渚上人）

夫毛西趙楊者。人間之名花也。櫻棠牡丹者。草木之佳人也。故稱其容則妖嬌冶媚。稱其色則艶麗嬋娟。而自古耽淫人花者。多皆傾國喪家。未聞愛賞草木而至失道義者。蓋是在情識言語之有無而不在容色之妍醜矣。日者閑夜訪月渚上人。案頭看少佳娘之圖。予戲問其名。上人笑曰。近日許嫁。未有婚字。試字之。予曰。昔者玄宗稱貴妃爲解語花。而遂爲之喪家國。抑爲解語所誤矣。今此娘生畫氏之手。而着丹青之粧。其容雖佳。無喪家國之害。假令嫁百千萬家。不爲汚節。而今在淨刹僧房之中。雖同床共席。不以爲穢行。且其態如欲笑而不笑、如欲語而不語。能持如笑如語之嬌媚。而住不老不死之生涯。是毛西趙楊之所以不及此娘者。豈非以無情識言語之實也。由此觀之。雖有人間之妖冶。不異草木之嬋娟。字之曰不語花。且誡之曰。汝愼勿生情識。愼勿發言語。若或犯之。擯出上人之院房。而投卑煙花之海底也耳。

○題芍藥戲蝶圖

芍藥牡丹者。花裡之富貴者也。山僧者。人中之貧賤者也。貧賤而讚富貴。恐近諂諛。然而戲蝶之遊花。有栩々悠々之樂。而未有僥倖阿諛之巧僞也。若夫爲諛爲戲。附之傍觀。予唯安于蝴蝶之栩々而已。

○乘國溫岳和尚畫像贊（名元民。住下總結城乘國寺。溫岳其號也。爲其徒徹心和尚）

昔者張子房狀貌如婦人好女。而漢家之深謀奇策。無不出焉。及其論功受封。辭大取小。故能免於猜嫉娼忌之際。終成大漢之洪業。方今總之乘國溫岳禪師。慈忍謙讓。而其狀貌

行事甚類子房所謂實而如虛有功而不居者歟人多見其狀貌而知其奇智者蓋鮮矣復安知不有佛氏之大功宏基待此人而後立者哉師名元良與子房同其名亦是不期而然者非耶

○良寛道人畧傳（爲藏雲和尚）

良寛道人號大愚北越出雲崎橘左門泰雄之長子也天資超邁深默溫和幼而有出塵之志早歲喪父續其遺業蓋非素意也一日突然薙髮時年二十有二暫依光照寺破了和尚偶會備之圓通寺國仙和尚行化其國乃隨雲遊服事數年仙附偈云良也如愚道轉寬騰々任運得誰看爲附山形爛藤杖到處壁間午睡閑爾後歷參諸方深究道奧萍游殆二十年遂還故國住國上山巔之五合庵又移居于山下乙子森之小庵或一鉢孤錫分衛于村落市廛或打毬鬪草與稚兒孩女嬉戲諧謔大凡師之心迹逈脫名利不拘世途詩歌翰墨不事彫巧皆出于天性師嘗謂人曰貧道所不嗜有三曰詩人之詩書家之書庖人之饌鈴木隆造曰師之可傳者我知其三曰其詩有三昧之韻致其書有懷素之逸趣其和歌有萬葉之遺響而如其道德非我徒之所測也蓋可謂知言矣師年古稀分衛罷炊孤迹晏如爲崎木村元右衛門者感請諸其別舍饔飧數年以天保辛卯正月六日示寂其舍闍維得舍利無數葬其邑之隆泉寺予嘗遊國上五合庵之故址又訪行實於山下之故老又屢就其參徒貞心尼者詳其履踐風彩蓋三隱布袋之流也至其實詣深造之地雖平常親炙者不能測度矣抑與彼空詩浮文貪利罔名者豈得同科而論之也哉

○秘骨道人傳

秘骨道人者不知何許人也依其自言生于東海之國長于東西南北之地未定居住之處豈識終身之鄉哉天質疏懶而形容豁達圓顱破衲雖似佛子其實出於貧窶之不獲已也心如狂口如醉雖無三文錢之貯能併吞天下士而高談大笑傍若無人復性嗜酒無錢不飲々則酩酊不悔往不慮來戇直磊落殆無可稱者復嘗好詩文不欲强爲不求敢巧演意之所適而已人或嗤其不才猶加面之受水也道人有語癖動輒稱秘骨秘骨本張參之通語而猶言奇怪但以多稱其語人喚目之道人亦自稱而不止遂以爲名若夫好々先生蓋爲之傳者誰也亦是秘骨之戲癖也矣

○評良寛庵主詩集

予曾聞北越良寛老師之名也尚矣。又固與藏雲禪師好矣。日者與雲公話及寛老之詩。既而遺之。且其言云。有人欲刻其集。請校評之。予乃誦之數次。且察其詩之體度。多具漢魏古詩之風調。而其意蓋追慕寒山拾得之道風。故其詩往々出入于三隱詩集。其最相類者。雖措諸其集中。殆不可辯。予又曾讀月坡氏妙子之集。而渠皆倣三隱者也。抑歎方寸之實詣。不免有所愧於三隱矣。今及讀此集。始覺無所讓焉。然則道也學也才也。可以今古求。難以一世期。而今古之間。亦將不過屈指耳。

○讀天桂和尚正法眼藏辯注

識見確實。據論的快。祖宗已來亦不多見也。蓋今時以傳習當宗旨。以軌學立家風。未見習外之宗。軌外之風者。是無佗。由不能脫窠臼而已。如此老可謂無師之智。能唱格外之宗矣。雖然其語往々觸時流之嫌忌。是所以此書之不公於世也。而世人之小見。亦非師之尤矣。於戲永平之後發此書之眞者。非此老而誰也。

○讀幽谷餘韻

筆鋒流滴。語意平展。絕無明李滑突之弊。其稱爲禪徒文章之絕作者。非過讚也。或曰佗是文字者流。無祖宗之眼目。余曰君子成人之美。取其可取。置其餘而可也。且夫比諸彼貪婪浪逸貢高而牆以稱衲子者。豈不亦優乎。

○讀拙堂文話（津藩侍讀齋藤謙有終著 前後共十六卷合爲八本）

誹歌者流相會。及會罷相伴而出。稍々別去。殘者必短。去者最後唯有二人。悉短前者。既而相別。僕問其主曰。唯有主公及與今去者眞好手否。主曰否。今去者亦與前者同耳。僕駭然少焉曰。方知室最遠者是眞好手也。余讀拙堂文話以謂。拙堂之室其最遠耶。然亦安知不有去者復會又或室更遠者來哉。

○稻葉酒翁

河州稻葉邑有酒翁。號伊左衛門。與一婆住。貧困酸苦不可勝言矣。雪夜霜晨無被無褐。

繫弊衫擁破席。其始未貧也。田宅產具悉殁之於飲酒。雖至其如此。千謀百出未嘗缺飲酒也。一日甕橐皆罄。日昃不餐。其婆百計得米五合。乃議翁曰。爲飯耶爲粥耶。翁曰爲吾分米二合。婆固識其不可止。遂與之。又以購酒。予聞之歎曰。甚哉嗜好之至也。人若進學理業得如此。奚不就之愛也。且劉伶李白。古者之名於酒者也。然猶或不至如此矣。若假之以二子之才。亦將有傳于千載乎。可惜唯其所多。不過酒而已。復惡免爲一匹夫也。

○早川誤葬

河州六番之鄉有力者。號早川。出在外數歲。天保某年其鄉之西數里。有縊斷梁者。而不知其人。告官表之四方。既而聞六番。父兄親族及鄉人駭至。以爲早川。遂請葬之。其明年之忌。親族爲之設供。飯僧念佛。當是時早川經歷諸方突然歸家。過其筵之未散。家親喪魂。鄉人怖走。以爲幽魂浮魄之至也。少焉色定。始知前者之葬者非早川。而其死者終不知何人矣。嘗聞之古昔有忘其妻者。今其父兄亦忘其子弟。可爲話柄歟。

○鶴巣集法語禪話之部（示衆。接衆。法語）

示衆曰。曹山大師示學人。偈云。從緣薦得相應疾。就體消停得力遲。瞥起本來無處所。吾師暫說不思議。曹山老漢一時施設。大有老婆爲人處。雖然山僧不恁麼。先就體參究。又從緣薦得。若但就體。則應用不妙。但從緣則實處不寧。若能到无處所地。全體安寧。應緣自在。方始說不思議。猶且仔細莫輕忽。祝々。

示衆曰道得麼。如是高聲唱者數次。衆無語。

示僧曰。見愛疑慢四者。我人生命之所係。而死生之大源也。勿淫於利名。勿溢於世途。勿安於小成。三者學者之大患也。致之者祖佛之大道也。學之者衲子之大業也。不究之則萬法之實體。未曾決矣。任之至死衲子之大節也。吾子之勤之。

臘八示衆曰。古往釋迦老子於今曉明星出時。會此事乃曰。有情非情同時成道。這老太甚狼藉。予若在使佗啞却。雖然諸人作麼生說成道之道理。假使說得十成。尚是佛法邊事。未嘗得本分事。若夫本分。不住有佛處。走過無佛處。始得。且道畢竟到什麼處。衆無語。

示衆曰。於逆順境。得毫厘無罣碍否。於祖佛一切言教。得絲毫無疑處否。於一切處。得心體如虛空否。於祖佛階差明了否。得現諸佛大神力否。於無分別無差別處。得大自在否。此是向上人履踐處。若於是毫有不安處。直須體究。勿自欺。

示僧曰。此道固在聲色之外。故學之先究其大體。而後究微細流注之惑塵。是佛祖不傳之妙行也。蓋夫流注之爲惑也。如陽炎。如煙霧。如幻雲。如光影。如水月。究之盡之。而後古佛之道可期也耳。又曰。龍樹大士曰。法愛於人天中爲妙。於無生法忍中爲累。又曰。入諸法實相中。一切諸觀諸見諸法皆名爲罪。抑諸法實相者。非佛眼則不能見之。非見佛則不能發佛見。非不惜身命者不能見佛身。佛身者。非色相非名義。法界虛空遍滿無邊也。無量智身也。佛子信之修之證之入我々入同一法身謂之證。

又曰。夫生死之大也。該萬類而亘累世矣。其爲終始不可測也。其欲究之者。雖有百家之學。未能至其源矣。究之盡其源。而能安之者。其唯佛氏乎。佛氏之學。雖異其科。達其實者。唯碧眼氏而已矣。蓋其爲敎也。欲究其源者先究其理。理盡宗極而後能斷其源。斷而後知生死之非我。知生死之非我。而後知萬法之在我。是故先欲求之者。不求利名。不存自佗。不惜身命。否則不許入我社。衲子其體之。有僧還鄉示曰。大凡此事。在聞見覺知之外。而亦不出其中。故父不能附子。師不能授弟子。古昔香嚴參潙山。頓悟及南堂參五祖演之因緣。切須體究。且夫學道之大要有三。一須去惡業就善緣。二須起萬行斷情識。三須覺心源除惑本。一則人天之敎也。二則三乘之學也。三則佛祖之證契也。方今吾子之病。在信力不堅處。在心操軟弱處。在情識不脫處。在聰明虛飾處。已是恁麼而恁麼去。恐不勝了大事。今且臨別故送之以規言。

(制前小參)山僧曾有一轉語。離却言句伎倆。如何通消息。大凡拂拳棒喝木毬斫牌。乃至女人拜翻筋斗。擧足下足。左轉右轉。皆是屬伎倆。有句無句。乃至一切經論。一切公案葛藤。皆是屬言句。離却這二途通消息來。(問話了、)乃曰。趙州有謂。諸方難見易會。此間易見難會。須知趙老有別生涯。豈在爭人誇我哉。雖然恁麼見箇什麼會箇什麼。方好參詳。珍重。

行乞示衆(冬安居于武州高麗郡久米鄉永源寺初會。)山僧曾自盟。假令麻衣草食孤錫露眠。至于投壑斃溝。決不以佛法當人情。又不爲名利衒揚賣弄。是故非請不赴。非義不行。此非自高自尊。恐不勝矯弊行道也。今冬應堂頭和尚請安居本刹。常什枯淡。宜分衛補常什辨粥飯。夫分衛之法。不論多少不拘貧富。故有淨施則萬金不辭。苟非其義則一毫莫取。萬金非多一毫非少。所謂法等食等施等受等。取捨得喪不動一塵。初足稱衲子之行履。山僧又有偈曰。用之則行捨之藏。取捨何須論得喪。嶺上白雲無手脚。閑漫非懶走非忙。

示僧曰。夫學道先明其大體。而後須斷細惑。所謂大體者。先去其麁惑也。細惑者微細流注之識體也。而惑體俱生俱行于心性。故斷之尤難。所謂鍛金去濁要無殘滓也。蓋諸法之

實相。非關迷悟。迷亦實相。悟亦實相。而其相隨迷悟之所見。而轉而已。譬如水之四見。四見非水之實相矣。今子已知其大體。更須工夫參究。昔者潙山年七十餘。謂仰山曰。寂子你心識微細流注無來幾年耶。仰山未即答。却問和尚無來幾年。潙山曰。老僧無來已七年矣。寂子如何。仰山曰。慧寂正鬧在。須知古人實踐實行不欺絲毫。豈如今人胡問亂答。師學搽糊買弄佛法底。所夢見也哉。抑工夫之法。於順逆境上參究。於機輪轉用處着精彩。於說不得處宜深用工夫。或就體或就用。大凡體鬧則用鬧。體如則用如。體空則用空。古人大機大用。亦要驗辯實處。是故古人云。喚爲如々早是變了也。又云青天亦不免喫棒。且道如々爲什麼變了。青天有什麼過。速道速道。

又曰。古人開覺心源。得的當省要之妙處者。出于不知不慮之緣。如擊竹桃花破指折脚等。是皆平常深用工夫。故遭逢此時節。諺曰秘事如眼睫。謂其至近而難見也。此事亦如是。故行路作務等時。不得行履別處。工夫參究不出箇中。究去究來遂至妙田地。譬如盲者之在寶藏中而開眼着々皆寶。予知子平常用心此事。今因事就途書之助工夫。子佗日知我不欺人幸甚。

僧索語示曰。守護國主陀羅尼經云。欲知菩提當了自心。若了自心即了菩提。大日經云。如實知自心名爲菩提。仁王經云。菩薩未成佛。以菩提爲煩惱。菩薩已成佛。以煩惱爲菩提。須知汝等心性。即是菩提。唯爲誤受用。入六道墮三途。唯能如實識得了。六道三途直是菩提道場。唯這轉處在汝一心矣。

(小參應倉片氏請)(住武州所澤稱助衞門)大凡有爲名利賣弄佛法底。又有爲佛法同行底。即今爲俗姓家打葛藤。恰似賣弄底。雖然本分衲子所到是道場。所行是菩提。不妨擧問頭來。(問答了)曰。釋迦老子有言。一切世諦於如來即是第一義諦。唯是第一義諦。恐於諸入爲世諦去。唯這一段大事。方好參詳。

示衆曰。三祖曰。至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。洞然明白。毫釐有差。天地懸隔。趙州曰。老僧不在明白裡。坦山不然。道非難易。唯要揀擇。但是憎愛。洞然明白。毫釐無差。天地懸隔。蓋夫成佛作祖。須參三祖大師。跳黐佛祖。須還佗趙老。入三途隨魔外。須山僧始得。雖然那箇是道。仔細揀擇看。

(冬至小參)釋迦老子曰。欲知佛性義。須觀時節因緣。因緣若至。佛性即現。方是今朝日南至。歲月已復一陽。如衲僧復何處。(問話了)乃曰。古昔有僧問趙州曰。萬法歸一。一歸何處。州曰。我在青州。作一領布衫重七斤。且道趙老意在何處。雖然仲冬嚴寒。一領布衫有何用處。

○示衆

有人屏外喚請謁。必識其人是男是女是幼老。而及辨其凡聖。曚然不能識。即喝因是凡是聖。衆無語。

○接衆

有僧求參。喚僧名。僧應諾。曰。是什麼。僧無語即高聲喝曰。是什麼。如是斂回。僧無語。請益。即痛與兩掌曰。是什麼。有人擧示得庵。傳語曰。當時若其僧呵々大笑如何。曰猶更痛打。

(小參)永平高祖曰。操行之心。不與道符合。身心不安樂學道荊棘生。南泉大師曰。道不屬知不屬不知。々是妄覺。不知是無記。若達不疑之地。如大虚廓落。此箇大道仔細辯見將來看。(問話了)乃曰。趙州僧問。如何是道。州曰牆外底。僧曰不問這箇道。州曰問那箇道。曰大道。州曰大道通長安。以山僧謂之。長安雖樂不堪久居。那處是安樂地。仔細參究好。

示衆曰。臨濟大師曰。一念淨光。是汝屋裡法身佛。一念無分別光。是汝報身佛。一念差別光。是汝化身佛。臨濟老漢說三身。直截簡要。是則是矣。唯是如霧中望月。山僧不然心性無念即是法身。常住安樂即是報身。應用無碍即是化身。唯須要看同中之異。異中之同。

○請環溪和尚住大溪山豪德寺疏代山門兩序

大溪潺々。遠傳碎玉之浪。豪德赫々。遥呑富嶽之高。東海叢席獨恣名。天下巨鑑多避盛。恭惟環溪禪師。法門甘露。宇內至珍。機儀峻嚴早挽回先天之力。禪源深密已榮復老桂之魂。名實不曾少缺。人境宜相適稱。乾坤覆與載。萬物共長成。今古咎又休。一時須旋復。伏請速拈曇花之拂。切照仰景之心。

豪德十景　一照心堂　二拈花塔　三松柏壇　四望嶽丘　五臥龍櫻
六楓樹林　七碧雲關　八清凉橋　九黄鳥圃　十三隅山

○永源開山一種長純和尚三百回忌疏

一種之禪味。長純々裏純。瞬間超三會。遠賑道家貧。磨而不曾磷。攪而誰能亂。凝精至乘。渾然不見小疵。着眼頂上。傑爾無容擬議。直是祖門之偉材。豈非洞宗之良柱。三百之星霜中興密山之門葉。萬德之光燄。永長大龍之威猛。伏願蘋蘩之微供。眞靈之顯應。

○永源本尊釋迦牟尼佛安座供養之塔記

蓋夫。無心而化者。諸佛之應身也。能應而無心者。法身之佛體也。體用不二者。一如之報身也。是故在此而無處所。在彼而非一異。其趣機也。如有來往。其應感也。似成隱顯。方今營立精舍。莊嚴道場。悉是篤信之膏血。諸佛世尊。豈得無有隨類各得之感應也哉。偈曰。上天孤月輪。萬水現該身。彼此無邊際。一多絕僞眞。

○安國山水陸會疏

安國之山。富嶽擬望。總寧之刹。大觀特奇。俯惟。天尊地卑。上下和睦。四生之蠢頑。永霑利水之澤。六道之崎嶇。普御平陸之車。無垠禰懲。遠窮曠劫。

○圓相中觀音大士讃

觀自在菩薩在圓相中。沙門坦山曰。大小薩埵尙在方圓中。何不向無方處去。菩薩曰。無刹不現身。何敢擇方圓。坦山合掌而讃曰。南謨觀自在菩薩。

○賀奕堂禪師住諸嶽山賜徽號（七月廿九日賜禪師號九月廿二日開堂）

明治庚午季秋朔。北總某謹白諸嶽山衣鉢大座下。昨日住山徽號之盛事。件々盡善美。不特吾人之應快。實維佛氏之洪榮。宗門之光耀。又聞開筵之宏擧。以不能趨覲爲憾。幸遇嘉信。聊奉尺素。申聞慶讃。歆羨之情。俯惟尊慈。偏賜照容。

○賀雪巖和尙住豪德寺簡

北總某白豪德堂頭老和尙座下。前日辱賜專使及追蠅拂。又聞有開堂演法之儀。因事不能趨走。聊以楮幣一方表賀意。柔留是祈。又呈拙著一本。若見錯誤敢煩示諭。多々附後唔。不備。時維孟冬下浣某再拜。

○大雄山最乘寺開堂（在相州足柄上郡關本村）

這一瓣香恭爇向金爐。端爲明治天皇陛下。祝延聖壽萬安。這香謹爲釋迦牟尼老子及天四七震旦二三我朝高祖承陽大師弘德圓明國師本刹開祖了庵明老大和尙乃至歷

世諸大和尚。聊酧法恩之萬一。這香爲故昌福京璨先師。報法乳之一滴。山衲曾依先師脫世累。更依風外正光二師。究研大仙之妙路。直到今日得游戲於曠世。雖然唯是六十年來不起底。即今抛向諸人面前。諸人試評價來看。(問答不錄)古往趙州老漢六十始出家。老夫今年六十二。亦更學出家。記得。僧問趙州如何是趙州。州云東門南門西門北門。趙州可謂宗說自在。雖然若問老夫如何是坦山。應曰頭圓髭長。且謂却有諸誑否。請試評定好。久立珍重。

○當晩小參

古佛有謂。宗乘自在何費工夫。雖然今古往往工夫裡費終身者。比比皆是也。唯能工夫熟時休。工夫而已。試謂諸君如何工夫如何休。(問答不錄)誠夫三家村裡俳優誤被大方惑。辱諸嶽大專使總寧老敎正光臨。加以白槌之儀。卑情不勝躍歡之至。派頭同門之耆宿。四來應機之尊長。不論尊卑。不拘自他。厚辱光儀欣抃奚罄。十方隨喜之龍象。山門之一衆。深蒙擁護。固是孤船之好遇。偏堪厚謝。抑是佛海之大因緣。盡未來際永仰資持。久立珍重。

○鶴巢集　國文之部

○宗弊

木朽れば蛆を生じ水腐すれば蛞蝓を生ず、敎法の弊ある亦然り、弊なる者は固有にあらず、多くは見執に生じ偏黨習慣に成る、佛氏の敎其始め純粹にして二途なし、其滅後幾はくならずして小大の二乘流れを分ち、上座大衆の二部より遂に分れて二十部となり、支那已東に至ては岐中又岐を生じ、盛衰起滅僅に五三のみならず、今世に至て宗名を立する者大略數家あり、曰敎、(此中又數家あり)曰密、曰禪、曰淨、曰律、敎とは經論の名義に依附し、各所依の經論を以て宗旨を定む、其弊や漫、譬へば愚蒙の奴婢、他人の財寶を數へて自ら半錢の貯へなきが如し、密とは遮那を即身に成し萬德を衆心に具ふ、其弊や濫、譬へば梨園の王公、其貌巍々たるも其實は至賤の技兒たるが如し、禪とは直に人心を指し見性成佛せしむ、其弊や狂、譬へば盲瞽にして奔走し株を守て兎を待つが如し、淨とは穢土を厭ひ淨土を忻ひ、常樂を身後に求む、其弊や痴、譬へば尾生信を守て溺を招くが如し、律とは淨戒を持し佛儀を習ふ其弊や局、譬へば樵漁の玉輅に乘り婦女の鐵鉞を把るが如し、大凡そ其人に非されば道虛く行はれ

ず、故に經に譬喩を說て云、王一の大臣に命じ、一の大象を牽て衆盲に示さしめ、王衆盲に問て曰、汝象を見るや、衆盲各曰、我已に見るを得たりと、王其狀を問ふ、衆盲の中、牙に觸るゝ者は石の如しといひ、其鼻に觸るゝ者は杵の如しといひ、其脚に觸るゝ者は木臼の如しといひ、其脊に觸るゝ者は牀の如しといひ、其腹に觸るゝ者は甕の如しといひ、其尾に觸るゝ者は繩の如しといふ、彼衆盲、大象の全體を說く能はず、而も亦象體を離れずと、今此諸宗の認むる所、亦是佛法の一體なるべし、唯恐くは全體と言がたし、故に務めて宗弊を洗滌し、直に其本源に泝り、大雄氏の實知實見に證達し、眼膜を活開し全象を認得して錯誤なからんことを要すべし、

○妄想菩薩成佛不思議經

如是我知、爾時に東方無量億不可說の國土を過て淨土あり無佛世界と名く、其國に佛あり阿閦提如來と號す、一時忽然として大自在身を現し、此娑婆世界に化生し居士身を現し妄想菩薩と名く、時に臭口より不可思議無碍の光明を放ち、諸の沙門婆羅門善男善女天龍夜叉惡鬼羅刹人非人の爲に、太平樂の法門を說て曰、嗚呼憐むべき哉今の學佛の諸仁者、或は經論の義解に沉沒し、章句の穿鑿に精神を費し、畢生にも學道の要旨を知らず、或は兀坐習禪して有氣力の死人の如く、終身實用をなす能はず、抑其由て來る所以を察するに、起信論に曰、(馬鳴造)離念の境界は唯證して相應すと、又黃檗曰(宛陵錄即心是佛無心是道)と、是皆中下の者の爲に接引の語なりと雖も、往々無念無心の地に埋沒して其罪を知らざる者多し、我亦過去を憶念するに、禪徒の爲めに誘惑せられ、兀々地に坐定して無念を學し、寂々然として工夫を凝して無心を求む、誤て數年の好日月を費せり、吁、何の嫌ふべき有てか心念を無にせんと欲するや、諦に聽け、諦に聽け、宇宙一切萬法、其實理を究め眞際を盡し諸法の實相を明らむるも、悉く心念の功德に非さるなし、是故に迦文の經に云はすや、諸佛の正徧智海は心想より生すと、然るに無心無念を修習し、木偶の如く石像の如く死屍の如くなるは何等の愚蒙ぞや、善學の諸仁者、必ずや無念を學ぶ勿れ、念々無碍を要せよ、無心を求むる勿れ、心々自在を要せよ、此法門に住する菩薩は、行住坐臥七顚八倒直に無碍自在を得、或は王公となり宰官となり、華士族となり、窮弊民となり新平民となるも隨處に無碍自在を得、太平樂に住すべし、之を迦文の經中には法藏菩薩、世自在王如來の

所に於て大願を發し、一切法に於て自在を得、成佛して無碍光如來と號すと說けり、今我法中には妄想菩薩、心自在王如來の所に於て無心無念の大深坑を出離し、成佛して一念無碍光如來と號す、即說偈曰。勿嫌煩惱。煩惱是道。勿畏生死。生死即眞。勿求無心。心心自在。勿住無念。念念無碍。勿求菩提。本來是佛。勿住涅槃。萬法一如。此經を名けて妄想菩薩成佛不思議經と曰ひ、又學要頓速成道經と號すべし、此經を說く時、聞く者皆愕然として毀謗を生ず、嗚呼憐むべきかな、今此法門に於て信ずる能はず、毀謗を生ずる惡業の因緣を以て舊に依て娑婆世界に住して、碌々憀々として凡夫地に在り、時に居士忽ちに阿閦提如來の本身に復し、無佛世界に返り、太平樂に安住せり、

○惑病同原再告

大凡佛法社會及び一切人類社會に於て、最勝利益とも稱すべく、未曾有の發明と唱ふるも過稱に非ざるべしとする者は、我が數十年精究實驗に於て得る所の惑病同原の說なり、(明治二年發明同廿三年廣告)然れども世人の之を信ずる者寥々たるを以て、今復更に二三の社中に告示せんと欲す、夫れ佛教中、一切の惑本を無明と稱すれども其實物を的示するの說なく、全地球上の理學、醫學、生理學等の諸大家一切の病源を研究すれども未だ確實の定說なし、(熱病脚氣に限らず)然るに予身命を惜まず自身に於て種々の實驗を經、大ひに發明する所有て我が邦は勿論、西洋諸國へも廣告すと雖も、(明治三年已來)(腦脊異體論、惑病同原論を廣布せり)佛家醫家の諸氏を始め之を信ずる者の稀なる、又之を嫌惡する者の多き、恰も彼カリレオ氏の始めて地動の說を唱起せしに異ならざるを覺ふ、然れども少年の英才壯齡の傑士、或は學業半途にして病魔の爲めに妨害せられ、遂に退學廢業に至り、或は之が爲めに夭折するに至る者多きを聞く每に窃に哀嘆を催し、我が此術を習學せしめざるを恨む、頃者華嚴經を閱するに云、(四諦品)苦集聖諦は彼蜜訓世界の中には或は病源と名く、又彼最勝世界の中には或は痴根と名くと、(痴根は新譯起信論に無明根と云者是なり)又佛經中世界と稱する者は當今の世に社會と稱するが如し、別に土地國界ある者にあらず正に知るべし、苦集とは即ち惑本、無明、病源、痴根、皆同物にして所謂最勝蜜訓の異稱なること了々たり、其病源、痴根の實體は即ち脊髓液なり、(發明已來種々の實驗多し、悉確實にして細疑なし、)脊髓液上流して明覺智性を纒縛滅無するが故に無明と名け、之を積む久しければ種々の疾病を起すが故に病源と名け、心地に(腦胸腹部)常に

煩悶惱苦を生ずるが故に煩惱と名け苦諦と名く、又心身の本性を蔭蔽蓋覆するが故に五陰と名け五蓋と稱す、此の如く種々の異名あれども其實は一物なり、是予が艱辛刻苦の修因より成する所の結果なるが故に創聞の士疑惟を生ずる莫れ、且毀謗臏刖をも顧みず、瑛言を吐露して止まざる所以なり、

○妙法

社友の爲めに妙法蓮花經を講ず、且粗妙法の大意を演ふ、夫れ妙法とは心の異稱なり、心は動物固有の靈覺にして其至妙なること元より言を待たず、然れども凡庸の徒は渾迷にして其實を盡す能はず、故に古聖、其妙用實體を揭示して妙法と云、其妙たる蓮花の淤泥に汚れず、穢濁の中に在て清潔嬋艶人目を奪ふに喩ふ、經とは常恒不易の義にして、六合三際千差萬別あるも唯一本性の發現なるを云、即ち人々本具の心性、死生去來清濁淨穢の中に在て一毫も幾動移易に渉らず、常恒湛然なる者也、唯至聖に非れば其妙體を究了しがたし、故に經に曰、唯佛と佛とのみ諸法の實相を究盡すと、試に見よ覆載の内空界の索々たる日月の代明なる、山の高く海の深く人類の直行し禽獸の翱翔俯匐し、魚介の游泳潛藏する何者か妙法の開花に非ざらん、聖哲は其中に妙樂を極め、凡庸は其中に迷倒す、苦樂淨穢の別あるが如しと雖も亦妙法の春夏秋冬なり、故に古聖、其迷倒を諭し至妙の樂花を開發せしめんと欲す、之を妙法蓮花經と名く、若し夫れ六趣の諸苦に展轉し、八難の艱險に困躓するは妙花の萎苶なり、常恒の至樂を得、無畏自在の妙用を顯し、萬法唯心の青黄なるは妙法の結果なり、若し具さに之を論ぜば、一切萬類の種々なるは唯其開落の終始に外ならざるのみ、

○佛教大意 (明治十四年)

大學綜理加藤弘之氏書を贈て來四月十六日午後七時より大學校講義室に於て佛教の大意を演說せんことを求め、且問を設けて曰 (問は加藤氏答は坦山)

問、佛教の本旨とする所は何の點にある乎、

答、釋迦氏自ら寂妙至樂の心法を發明し、之を以て眞如、佛性、菩提、涅槃、妙喜世界、極樂世界等の名を設け、億萬の說ありと雖も到底最妙至樂の心法を明すに過ぎず、今

其大略を演へん、(說略)

問、佛教の人間世界に必要なるは何の理に出る乎、

答、人間の智力、最妙至樂の心法を盡す能はす、所謂三苦八苦等の苦惱を受く、釋迦氏之を悲愍し種々の方法を設け、其苦惱を解脫し、妙樂無爲の心法を得せしむ、其尤も必要なるとは十惡を止め十善を行せしめ、之を以て自佗を利益し、平等至樂の眞淨世界となすにあり、今其大略を演へん、(說略)

○惑病同源の餘論

近世諸學盡く進步し、古往聖賢英傑と稱せらるゝ者の所說と雖も、多くは思想の臆計に出てゝ實理實驗の效なき者は、遂に之を廢棄し痕迹を絕するに至る者少なからす、予小少より心識の學に從事し其本原を實究するに、獨り釋迦氏の教、一心二種の本原を論辯し、(清濁迷悟)人心の至妙樂地を占領する最勝の方法たるを證明せり、而して其方法の中、定力のみ(金剛定、首楞嚴定等)他の聖賢英傑も之を明さす、其徒の其學に從事する者も其實際を極め難きか故に、卒に大祖の實法を曖昧糢糊の究理に埋沒せしむるに至れり、蓋し其本原二種の心法とは、所謂一心に淨穢の別あり、淨とは菩提涅槃、眞如、佛性と名つくる者にして、(皆同體異稱なり)人々本具自性覺智の實體なり。濁とは妄識、亂想、愛慮、苦惱の情念なり、此二種の心、庸人に在ては和合混濁して辨する能はす、故に此混濁の心を以て心の本體と謂へり、迦文氏之を大覺し其本原を分拆開顯し、其方法を以て佛教と名つく、惜哉上古諸學未開の時なるか故に其實說明了ならす、空く名義を傳へて今日に至れり、今や諸學大に進步し、人體身心の中一微塵も名狀すへからさる者なし、是に於て佛教中、見惑、思惑、煩惱障、所知障、等の實體を精究するに、諸惑の本源たる無明なるものは人體中何を以て名つけしや、予之か爲めに數十年の工夫を費し畢生の智力を盡し、遂に無明の實體を發明せり、(明治二年心識論、惑病同原論、腦脊異體論、明治六年心性實驗錄、明治十年惑病同原再告等)夫れ無明の物たる、其始め流動質にして其終り粘着凝結す、是故に其終始實體を究むると最も難し、蓋し人體各主務の定器ありて一毫も犯すへからず、眼の物像を照見し耳の聲音を聽覺し、胃の飲食に於る肺の呼吸に於けるが如く、腦の知覺に於ける亦然り、而して腦の知覺器、胎生已來無明と和合して一種の識體を成す、是即ち一切通常の人心なり、是心識、外緣に隨て生滅妄動煩悶惱擾

名狀すへからす、（所謂智情意の三、相紛亂交錯）故に之を生滅心と名け煩惱識と號す、其實體を究め惱苦の結根を斷し、（是る和合識を破すと云ひ又煩惱を解脫すと云）清淨純覺なれは菩提涅槃等の勝境に至る、其結果愈堅く惱苦を生すると益甚しけれは疾病と名く、（惑病同原苦因一體）若し其之を脫離するの方法に至ては經論中に蔓延瀰布する所なり、其苦本を拔き、究竟樂地の極點に達する者之を大涅槃界と名け、又極妙樂世界と號す、是吾か敎の最上結果なり、

○杜撰の禪和を斥す

禪客問、子の心識論、西洋の說に依て心識流布の源支を說く、或師之を破して云、西洋所說の心は妄心也、佛祖所說の心は三世通貫不生滅の心也、天地懸隔なりと如何答、忘心の外、三世通貫不生滅の心何れの處にか在る、禪客無對。乃示曰、經云菩薩未成佛。以菩提爲煩惱。菩薩已成佛以煩惱爲菩提。と、夫れ妄識の妄念妄境に隨て煩悶惱動する之を煩惱と云ふ、惱動の相歇めは即ち菩提、別體あるにあらす、故に曰、妄を除かす眞を求めすと、諦かに信せよ、一念妄動の心體即是三世十方通貫無碍不生不滅の大菩提なるとを、故に楞嚴經に佛阿難に示して曰、生死に沈淪するも汝か六根、菩提涅槃を證するも汝か六根と、然るを汝妄心の外眞心ありと云は丶、一體二心の妖魅なるへし、若又西洋人の心は出來合の粗物にて、佛祖の心は誂へ向の上品物ならんか、笑ふにも氣の毒なる話なり、客曰、某一禪師に隨て坐禪辨道數年、某常に示すに云、心は內外中間に在らす、十方三世に通貫し細無間に入り大方所なし、現前の身心は皆妄なり、此臭皮袋を脫却し眞面目を現前すと、今子の說と大いに異なるは何そや、答、是杜撰の假長老、宗匠知識の名を貪り如此の邪說群生を誤る者古へよりあけて數へかたし、且汝か爲めに眞妄の區別を說ん、夫れ一念の心體、天より降らす地より生せす、生に在て生にあらす滅するか如くにして滅に非す七顚八倒して常住不變、是を不生不滅眞、如本心と云ふ、然るを無明の妄因、（無明妄因のとは別に定說あり）六塵の妄緣に隨て妄業を起し、名に隨て名に轉せられ利を見て利に迷ひ、不生に生を執し不滅に滅を見る、是皆妄見妄情の法なるか故に之を生滅の妄心と云、一物數名別體あるにあらす、佛云、一精明分れて六和合となる、（後世人師百法七十五法等の論釋あれども皆對緣の法にして心法は唯一なるのみ）然るを杜撰の禪和、起滅の心所も知らす、修證の通塞も辨せす、西洋の理學にも及はさ

る目くら悟り、無益の苦行に身心を勞し、欲界定にも及はさる我慢と名利の日履取り、坐禪に好日月を費すか氣の毒さに、無明心識の二論を著はす、諺に所謂多くの鼻かけ猿、一匹の鼻ある猿を笑ふか如く、吹ひ止まさる者は何事ぞや、禪客逡巡而去る、

○佛法の國益たるを論す（明治四年官衙に呈する者）

或問曰、子の如き有益の法にもせよ、治國安民の法に於て所用なきか如し、如何、答曰、佛法の本意は治心解惑のみ、人々心を治めは垂拱して天下平かならん、豈益なしと謂んや、問、當今富國强兵を以て治國安民の上策とす、如何、曰、人々富國强兵を談して其實に達せすんは恐くは至治を期しかし、予か所見を以てするに、治國安民の本源は人心を和するにあり「人心和する」ときは强兵利器なしと雖も猶至治を期すへし、夫れ心は萬法の原なり、故に一心正しけれは萬法皆正しく、一心邪なるときは萬法皆邪なり、故に心を治むるとを得は、之を文に用るときは才識を益し固陋を破す、之を武に用ゆれは智勇を加へ怖畏を離る、之を居常に用ゆれは身心和樂にして惑病を斷す、豈國家の巨益にあらすや、問、當今富國强兵を談する者非か、曰非ならす、大凡窮して正を失せる者は唯仁人義士之を能くす、小民の如きは窮すれは必す不善を爲す、故に富國の法なきを得す、且義國は横奪なし、必すしも兵の强弱を論せす、暴國は侵掠を事とす、强兵に非されは之を待つと能はす、但人心を和するは本なり强兵は末なり、若人心を失すれば强兵利器皆敵國の用をなす、何の所益かあらん、故に人心を和するに至ては佛法大いに益あり、少欲知足より（今の僧侶多欲不知足なるは佛の法にあらず）無我無諍の法を敎へ、因果報應の理を諭す、故に分外の望みなし四恩を談じて國王國土の恩を報ぜしむ、故に痴闇の者と雖も尙能和意協同して暴戾に至らず、豈是益なしと謂べけんや、或曰、今佛を排する者は然らず、之を文に用ゆれば詭誕にして益なし、之を武に用ゆれば柔弱にして兵氣を挫折し之を民に用ゆれば虛妄にして實義なしと、如何、曰、從前の佛者、佛法の本意に達せざる者其弊なきにあらず、若夫實地に達して之を用ひば其益前の如し、其末を追ひ其弊に從へば其害所說の如し、苟も其人に非れば道虛く行はれず、譬へば武の如とし、能く之を用れば治國の要道たり、能く之を用ひざれば民を害し國を亡す、何ぞ必ずしも佛法のみならんや、

○惑病同原の實驗

余惑病同原の實驗に於て殆んと死に瀕する者三回、愈其原因確實にして纎疑なし、余弱冠にして出家し深く禪學に盡力し、禪教諸師に随て佛教の方法を受傳し、定慧を兼修し自ら證契と認め、諸師の印證を得る者數回、而して自ら心地を觀察するに、煩惱識依然、忘動心依然、念想心依然、又小森某の爲めに痛く駁斥せられ、大に慚愧し、種々工夫し最强の定力を用ゆる數年、遂に臍下に大癰を發す世人皆必死となす、而して僅かに死を免る時年三十八、是定力を以て、胸腹の妄識を驅逐するが故に大塊腫を發するなり、更に進て腦胸に最强の定力を用る者數年、遂に奇狀の腦病を發す、身體羸痩し心思異常、世人皆發狂となす時年四十二、是定力を以て腦胸の妄識を驅逐するか爲めに心識に大變動を生ずるなり、爾後二十餘年種々工夫實驗し近来又一奇病を發す、總身不隨意にして飲食を絕する者十餘日世人皆必死となす。醫師の診斷に心臟の變質腸胃の衰弱なりと、余之を肯はず、故に其藥を服せず、蓋し是れ定力を以て驅逐する所の腦胸腹、妄識の餘殘を排除するが爲めに身體非常の大奮力を發する者にして、若身體の生力稍弱なる時は必ず死す、醫學等の能く及ぶ所にあらず、故に余醫藥を假らず居然として唯廢退の妄識と生力の戰闘を想觀す、大凡百餘日にして妄識の餘滯を除盡するを得たり時六十五、余此に於て益實驗明了なるを得たり、抑惑病は同原にして忘識の結滯なり、妄識は脊髓より發する所の粘液腦中に結滯し胸腹及び全身に蔓延する者也、之を驅除するの法は、最强至猛の定力を除くの外更に別法なし、余の設くる所の學則に演るが如し、

般若心經の要領　坦山

去れよされかしこに去れよ天津日を隱くす浮雲さり盡すまで

注例　釋指摩訶衍論、述指慧遠法師、無姓名人名者自注也

(六) 標註 大乘起信論兩譯勝義

天竺　馬鳴菩薩造
梁　三藏眞諦譯
唐　三藏實叉難陀奉制再譯
日本　原坦山會取兩譯勝義幷注

歸命盡十方、普作大饒益、智無限自在、救護世間尊、及彼體相海、
無我句義法、無邊德藏僧、勤求正覺者、爲欲令衆生、除疑去邪執、
起信紹佛種、故我造此論、

論曰、爲欲發起大乘淨信、是故應說、說有五分、一作因、二立義、三解釋、四修信、五利益、

作因有八、一總相、爲令衆生離苦得樂、非求世間名利恭敬故、二爲顯如來根本實義、令諸衆生生正解故、三爲令善根成熟衆生、不退信心、於大乘法、有堪任故、四爲令善根微少衆生、修習信心故、五爲令衆生消除業障、調伏自心、離三毒故、六爲令衆生修正止觀、對治凡小過失心故、七爲示專念方便、生於佛前、必定不退信心故、八爲示利益勸修行故、此諸句義、修多羅中雖已具有、然由所化根欲不同、受解緣別、所謂如來在世、衆生利根、佛色心勝、圓音一演、異類等解、故不須論、佛涅槃後、或有能以自力、少聞而解多義、復有廣聞而取解者、或有自無智力、因他廣論而得解者、亦有自無智力、怖於廣說、樂聞略論、攝多義而正修行、我今爲彼最後人故、總攝如來最勝甚深無邊之義、而造此論、

衆生心　偈頌云衆生謂四衍、衆生謂四種生、是一法界藏偏於彼入盧衆有四種、一者如來衆、二者一切菩薩衆、三者一切聲聞衆、四者一

云何立義分、謂摩訶衍、略有二種、一者法、二者義、法者、謂衆生心、是心則攝一切世間、出世間法、依此顯示摩訶衍義、以此心眞如相、即示大乘體故、此心生滅因緣相、能顯示大乘自體相用故、所言義者、則有三種、一體大、謂一切法眞如平等不增減故、二者相大、謂如來藏、具足無量性功德故、三者用大、能生

切綠起衆、是名爲
四衆生有四生卵胎
濕化四衆攝二諸聖
四生攝二凡一
眞如相若具一
之則當實三心之眞
體如實之性大日
經所謂如實知二
自心名菩提者
是也盡其心之實
如知之之智曰
菩提
二門一釋頌云有二
七異一同一人法依
行林境界位異故異
名異義故七右頌云何
爲二一同一所謂遍
同故九二丁之文南陽蠶
忠云或名異体同或
名同体異因拉濫奐
唯如菩提涅槃眞如
佛性名異体同眞心
妄心佛智世智同名
讃異　傳燈錄
各攝　釋云二之十
各攝眞如一切法者謂
以眞如門攝一切
法無一法而非眞
如故以一生滅門攝
三一切法無一一法
而非生滅故念眞
如門不能攝生

一切世間善因果故、一切諸佛本所乘故、一切菩薩皆乘於此入佛地故、

云何解釋分、此有三種、一者顯示實義、二者對治邪執、三者分別修行正道相故、

顯示實義者、依於一心有二種門、一者心眞如門、二者心生滅門、此二種門、各攝一切法、以此二門不相離故、心眞如者、即是一法界、大總相法門體、所謂心性不生不滅、一切諸法皆由妄念而有差別、若離妄念、則無一切境界之相、是故諸法從本已來性離語言、離名字相、離心攀緣、究竟平等、永無變異、不可破壞、惟是一心、故名眞如、一切言說假名非實、但隨妄念、無所有故、言眞如者、此亦無相、言說之極以言遣言、非其體性有少可遣有少可立、問曰若如是者衆生云何隨順悟入、答曰、若知一切法、雖說無能說所說、雖念無能念所念、是名隨順、妄念都盡名爲悟入、復次眞如者、依言說分別有二種義、一眞實空、究竟顯實故、二眞實不空本性具足無邊功德、有自體故、所謂眞實空者、從本已來一切染法不相應故、離一切法差別相故、無有虛妄心念故、應知眞如非有

滅門一切諸法、又
生滅門不能攝故
眞如門一切法故
所以者何如是二門
皆悉平等各各別
故攝要云一切法
者即十八界法在一
眞如門攝一相根
味具名二眞空以
性體性周遍法界三
在生滅門名
細六麁一　引註疏頭
若離妄念之疏云
是七識爲心念也
離心逐曰識心
寂滅無一動念成是
名正觀　引之四十
二卑經曰飯二千億
三世諸佛不如
飯無一無念無住無
修無一者念染實
空釋之切化法
總名爲云空幻化差
別體相無爲實作用
非眞故名身空而能
隱眞顯法身如來實
德眞諸是故名爲三
如來之藏離念
離妄念之功夫
謂之學道了謂
之離契永離云唯
證乃知難可測
心生滅遠云如來

相、非無相、非有無相、非非有無相、非一相、非異相、非一異相、非非一異相、總說以一切衆生妄心分別皆不相應、故說爲空、若離妄心、實無可空故、言眞實不空者、由妄念空無故、即是眞心常恆不變、淨法圓滿、故名不空、亦無不空相、以離妄念心境界、唯證相應故、心生滅門者、依如來藏有生滅心、不生滅與生滅和合、非一非異、名阿賴耶識、此識有二種義、能攝一切法、能生一切法、云何爲二、一者覺義、二者不覺義、言覺義者、謂心體離念、離念相者、等虛空界、無所不偏法界一相、即是如來平等法身、依此法身說名本覺、以待始覺立爲本覺、然始覺時、即是本覺、無別覺起、始覺義者、依本覺有不覺、依不覺說有始覺、又以覺心源名究竟覺、不覺心源故、非究竟覺、如凡夫人前念起惡後念制伏、令其不起、此雖名覺即是不覺、如二乘人及初業菩薩、覺有念無念、體相別異、以捨麤分別故、名相似覺、如法身菩薩、覺念無念皆無有相、以離分別麤念相故、名隨分覺、如菩薩盡地、滿足方便、一念相應覺心初起、始名爲覺、遠離微細念故得見心性、心即常住、是爲如來名究竟覺、是故經說、

藏者是第八識也有二生滅心者是第七識也此言依者同時相依如影依形此三句妄有所以不生　釋云五有爲法根本無明生住異滅能攝四種無爲法

如本覺證及一切界心所識五法界法界隨來而與五能識共會和合同時俱轉是故說言不生云云又再校心識論四丁蓋眞心如水無明如塵和合名濁水也 當知凡聖迷悟皆是一念之階梯且和合識之爲非淺智之所知 離念 釋云三之六丁說離大無明念故言離念也離四種無常之相故言離相等虛空 釋云三之五丁左性虛空理有二十種義一者無障礙義諸色法中無障礙故二者周徧義無所不至故三者平等義無簡擇故四者廣大義無分際故五者無相義絕色相故六者淸淨義無塵累故七者不動義無成壞故八者有空義滅有量故九者空空義離空著故十者無得義不能執故如是義用差別若據其體無別而已此虛空理二種淨智親所內證 如凡夫人 釋云三之十丁滅相有二起業相繫業苦相受若滅無識善品故今此人覺滅相 如二乘 釋云異相有二執取相計名字相無假用相執著故 如法身 釋云住相有四轉相現相智相和續相住持心識色相識習故 一念無住之要路學道之明鏡 如菩薩 釋云三之十丁根本無明生本覺時生三細相故名二生相 相初一者獨力業相 二者獨力隨相之用 三者俱合動相生相之稱取初相故 見性成佛之本義、心識論之未草合看

如海水 大凡以三動主靜義論則以三風水喩爲是如楞伽經此以三濁識論則論以三塵水喩爲從如楞嚴以三結解百圓覺以三空華喩則如三百喩 心識論 釋云三之二本覺眞心體性淸淨相用自在而不守自性故隨無明之緣作三種相 不覺 釋云根本不覺何因緣故得起而有因不因如何得起而而有如耶何等法中而不如故謂三法中而不如故言二不如二者當有二何義謂造逆義故云何三

若有衆生、能觀無念者、則爲證得如來智慧、又心起者、無有初相可知、而言知初相者、即謂無念、是故一切衆生、不名爲覺、以無始來、恒有無明妄念、相續未曾離故、若妄念息、即知心相生住異滅、皆悉無相、本來平等、同一覺故、復次本覺隨染、生二種相、一智淨相、二不思議業相、智淨相者、謂依法薰習、如實修行、功行滿足、破和合識、滅相續心、顯現法身、智淳淨故、一切心識相、即是無明、無明之相、不離覺性、非可壞非不可壞、如海水因風波動、而水非動性、若風止滅波動即滅、非水性滅、衆生亦爾、自性淸淨心、因無明風動、起識波浪、如是三事、皆無形相、非一非異、然性淨心、是動識本、無明滅時、動識隨滅、智性不壞、不思議業相者、依於智淨、能起一切境界、所謂無量功德之相、常無斷絕、隨衆生根、自然相應、種種而現、得利益故、復次覺體相、有四種大義、與虛空等、猶如明

法一者一實知一法二者一眞如法三爲三一心一法法是名謂三者切實知一法者謂能者一一如覺者則謂遍達平等一眞理則法者謂境一心法所依所謂三界一心則所依謂三法界體 又云四之十一丁根本無明如何能動心證能起諸念此處雖了十地非境三賢不了不唯佛窮了不可說妄說一然依經說一強稱但云不覺妄山日古佛猶如此所謂知人法者長故恐譯經人故不妄說之而論師胡說亂註聽之從在說說自誤人悲夫豈不覺者色覺蘊形之原也如三前後論一實心論迷人 今就二所驗錄過說釋初二心體所知論 當體究生起境界 釋云四之十三末那識末那十一丁衆相根本無明相轉相現相智相識智識相續識現

鏡、一眞實空鏡、一切心境界相及覺相、皆不可得故、二眞實不空鏡、一切世間境界、悉於中現、不出不入、不滅不壞、常住一心、一切法即眞實性故、一切染法、所不能染、智體不動、無漏功德、薰衆生故、三不空離障鏡、煩惱所知、二障永斷和合識滅、本性淸淨、安住故、四不空示現鏡、依離障法、徧照衆生之心、令修善根、不覺義者、謂不如實知眞如法一故、不覺心起、而有其念、念無自相、不離本覺、猶如迷人依方故迷、若離於方、則無有迷、衆生亦爾、依於覺故、而有不覺妄念迷生、不覺既無、眞覺亦遣、復次依不覺故、生三種相、不相捨離、一無明業相以依不覺、心動爲業、覺則不動、動則有苦、果不離因故、二能見相、以依心動、能見境界、不動則無見、三境界相、以依能見、境界妄現、離見則無境界、以有境界緣故、復生六種相、一智相、謂緣境界、生愛非愛心、二相續相、依於智故、苦樂覺念、相應不斷、三執取相、依於相續、而生執着、四計名字相、依於妄執、分別名等、五起業相、依執名等、造種々業、六業繫苦相、依業受果、不得自在、當知無明、能生一切染法、復次覺與不覺、有二種相、一同相、二異相、言同相者、如種々瓦器、皆同土性、如是無漏無明、種々業幻、皆同眞相、是故佛說。一切衆生、本來常入

即是意識微細分位無別體耳又說末那十一種異名予別有圖解心性實驗錄知釋云譬如種子出花唯一無出無過一切類菓枝葉芽一切類

復次釋云舉本覺及與無明二者於本覺三識為本覺為因無明為縁以無明為因本覺為縁由親為因由疎為縁故

此意 釋四之廿三丁

有三義一者根依能生故二者發依止故又釋三四之廿三丁相識兩字甚別大異一者神解義本覺流轉還滅二故據二鈍根無明流轉故依初門還滅故建立識名依後門故建立相名

坦山無明心識二論宜參考且思學道之不容易

涅槃菩提、非可修相、非可作相、畢竟無得、亦無色相可見、見色相者、唯是隨染幻用、非是智色不空之性、以智相無可見故、言異相者、如種種瓦器、各各不同、如是種種幻用、相差別故、復次生滅因緣者、所謂衆生、依心意意識轉、此義云何、以依阿頼耶識、有無明不覺起、能見能現、能取境界、起念相續、說名為意、此意復有五種名、一名業識、謂無明力、不覺心動、二名轉識、謂依動心、能見境相、三名現識、謂現一切境界、猶如明鏡現衆色像、現識亦爾、如其五境、對至即現、無有前後、不由功力、四名智識、謂分別染淨法、五名相續識、謂念相應不斷、任持過去善惡等業、令無失壞、成熟現未、苦樂等報、使無違越、已經之事、忽然而念、未來之事、妄生分別、是故三界、唯心所作、離心則無六塵境界、何以故、一切法從心起、妄念而生、一切分別、皆分別自心、心不見心、無相可得、當知一切境界、皆依衆生、無明妄念、而得住持、如鏡中像、無體可得、唯從虛妄分別心轉、心生則種々法生、心滅則種々法滅故、言意識者、即此相續識、依諸凡夫、取着轉深、計我我所、種々妄執、隨事攀緣分別、亦名分離識、亦名分別事識、此識依見愛煩惱增長故、依無明熏所起識、非凡夫二乘之所覺、菩薩從初正信、發心觀

不相應 釋云四之三十丁 心念法異故念法之依染心品之依淨如是二依各各差別猶如水火二而已

須悉滅盡

相應者所作行染相應俱轉之識心體和合不相應者本生死之原因之惑本微細生滅與三釋云位本識而不相應二惑與分別事識而生滅共相應

察、若證法身、得少分知、至究竟地、不能盡知、唯佛窮了、何以故、是心性本來清淨無明力故、染心相現、雖有染心、而常明潔、無有改變、雖復偏生一切境界、而無變易、以不達一法界故、不相應忽然念起、名為無明、生諸染心、復以本性無念、名為不變、是義甚深、唯佛能知、染心者有六種、一執相應染、二乘及信相應地遠離、二不斷相應染、信地勤修、能少分離、至淨心地、永盡無餘、三分別智相應染、從具戒地、漸離至無相行地、方得永盡、四現色不相應染、此色自在地之所除滅、五見心不相應染、此心自在地之所除滅、六根本業不相應染、此從菩薩盡地、入如來地之所除滅、不了一法界者、始從信地、觀察學斷、至淨心地、能少分離、入如來地、方得永盡、相應義者、心念法異、依染淨差別、而知相緣相同、不相應義者、即心不覺、常無別異、不同知相緣相、染心者、是煩惱障、能障真如根本智故、無明者、是所知障、能障世間業自在智故、此義云何、以依染心、能見能現、妄取境界、違平等性故、一切法性、平等寂滅、無有起相、無明不覺、妄與覺違、是故世間種種境界、差別業用、皆悉不能如實而知、復次分別生滅相者、有二種、一麁、與心相應、二細、與心不相應、麁中之麁、凡夫境界、麁中之細、及細中

無明滅　大凡滅有三相一曰止滅轉止者也止息動相也滅者動相斷滅也轉者轉知向外也

之麁、菩薩境界、細中之細、是佛境界、此二種相、皆由無明熏習力起、所謂依因
依緣、因是不覺、緣是妄境、因滅則緣滅、緣滅故相應心滅、因滅故不相應心滅
問、若心滅者、云何相續、若相續者、云何言滅、答、今言滅者、但心相滅、非心體滅、
如水因風而有動相、以風滅故、動相即滅、非水體滅、衆生亦爾、以無明力、令其
心動、無明滅故、動相即滅、非心體滅、若心滅者、則衆生斷絕、無所依止、以體不
滅、心得相續、復次以四種法、熏習義故、染淨法起、無有斷絕、一淨法、謂眞如、二
染因、謂無明、三妄心、謂業識、四妄境、謂六塵、熏習義者、如世衣服、非臭非香隨
以物熏、則有彼氣、眞如淨法、性非是染、無明熏故、則有染相、無明染法、實無淨
業、眞如熏故、則有淨用、云何熏習、染法不斷、所謂依眞如有無明、以有無明染
因、即熏眞如、以熏習故、生妄念心、此妄念心、復熏無明、不了眞如法故、不覺念
起、現妄境界、以有妄境界染法緣故、即熏習妄心、令其念着、造種種業、受身心
等苦、此妄境熏習義有二種、一增長念熏、二增長取熏、妄心熏習義有二種、一
增長根本業識熏、令阿羅漢、辟尸佛、一切菩薩、受生滅苦、二增長分別事識熏、
令諸凡夫、受業繫苦、無明熏習義有二種、一根本熏成就業識義、二見愛熏成、

就分別事識義、云何熏習、淨法不斷、謂以眞如熏於無明、以熏習因緣力故、令
妄念心、厭生死苦、求涅槃樂、以此妄心厭求因緣、復熏眞如、自信已身、有眞如
法、本性淸淨、知心妄動、無前境界、修離法、起隨順行、不取不念、乃至久遠熏習
力故無明遠離法、起滅、無明滅故、心無有起、心無起故、境界隨滅、以因緣俱滅
故、心相皆盡、名得涅槃、成自在業、妄心熏習義有二種、一分別事識熏、令一切
凡夫二乘、厭生死苦、隨已堪能、趣無上道、二意熏、令諸菩薩、發心勇猛、速趣涅
槃、眞如熏習義有二種、一體熏、二用熏、體熏者、從無始來、具足無量無漏法、備
有不思議業、作境界之性、依此二義、常無間斷、熏衆生心、能令衆生、厭生死苦、
求涅槃樂、自信已身、有眞如性、發心修行、問、若一切衆生、同有眞如、等皆熏習、
云何有信不信、無量前後差別、答、雖一切衆生、等有眞如、然無始來、無明厚薄、
自性差別、過恒沙數、我見愛等纏縛煩惱、依於無明所起、前後無量差別、唯如
來能知、又諸佛法、有因有緣、因緣具足、乃得成辦、如木中火性、是火正因、若無
人知、或不施功、欲令出火燒木、無有是處、衆生亦爾、雖有眞如體熏因力、若不
過諸佛菩薩等、善智識緣、不修勝行、不生智慧、能自斷煩惱得涅槃、無有是處、

雖有外緣、微內未有熏習力、亦不能厭生死苦、求涅槃樂、若因緣具足者、自有熏習力、又諸佛菩薩慈悲攝護、

乃能厭生死苦、信有涅槃、修習善根、善根成熟、則値諸佛菩薩、示教利喜、乃至成佛涅槃、用熏習者、即是衆生外緣之力、有無量義、略說二種、一差別緣、二平等緣、差別緣者、諸衆生、初發心乃至成佛、於中若見若念、或爲父母諸親眷屬、或爲僕使知友寃家、或起四攝六度、乃至一切無量行緣、以起大悲熏習之力、能令衆生、得見聞利益、增長善根、此緣有二、一近緣、速得菩提故、二遠緣、久遠得故、此二差別、復有二種、一增行緣、二入道緣、平等緣者、一切諸佛菩薩、皆願度脫一切衆生、自然熏習、常恒不捨、以同體智力故、令其或見或聞、入淨三昧、隨所斷障、得無礙眼、於念念中一切世界、平等現見諸佛菩薩、此體用熏、復有二別、一未相應、謂凡夫二乘、初行菩薩、以意意識熏、唯依信力修行、未得無分別心、與體相應故、二已相應、謂法身菩薩、得無分別心、與諸佛自體相應故、得自在業、與諸佛智用相應、唯依法力、任運修行、熏習眞如、滅無明故、復次染熏習、從無始來不斷、成佛乃斷、淨熏習、盡於未來、畢竟無斷、以眞如法熏習故、

從次釋云此下分
明顯示生滅門中
三種大義一坦山日
是題祖釋未可
全體抑眞如之體
大即是生滅滅已之釋
三大耳何則前說
二之二生滅不生滅
十四丁
共以二非有爲非無
爲本法二有爲通所
依體二故
大智慧明 釋云除無明之闇夜一
徧照 釋云照法界之源邊
眞實 釋云離妄想之虛假
自性 釋云自然解本量
常樂 釋云離塵垢無始來果
淸涼 釋云遠離累
南釋北云如明鏡之隨逐相具
分別識之分際永斷分別者六七
別亦非云
方是參學之至要當知佛祖有二自受用之生涯

妄心則滅、法身顯現、起用熏習故、無有斷、復次眞如自體相者、一切凡夫、聲聞緣覺菩薩諸佛、無有增減、非前際生、非後際滅、常恒究竟、從本已來、本性滿足一切功德、謂大智慧光明義、徧照法界義、如實了知義、本性淸淨心義、常樂我淨義、寂靜不變自在義、如是等過恒沙數、非同非異、不思議佛法、無有斷絕、依此義故、名如來藏、亦名法身、問、上說眞如、離一切相、云何今說具足一切功德、答、雖實有一切功德、然無差別、皆同一味一眞、離分別相、無二性故、復以何義故、得說差別、以依業識生滅相示、此云何示、以一切法、本來唯心、實無分別、以不覺故、起念分別見諸境界、名爲無明、心性本淨、無明不起、即是大智慧光明義、若心起見、則有不見之相、心性無見、則無不見、即是遍照法界義、若心有動、則非眞識知、非本性淸淨、非常樂我淨、非寂靜、熱惱變衰則不自在、由是具起過恒沙妄染、心性不動、則過恒沙淸淨功德相義示現、若心有起見、有餘境可念、則於內法、有所不足、如是無邊功德、即是一心、更無所念、是故滿足、即說眞如、名如來藏、亦爲如來法身、復次眞如用者、謂一切諸佛、在因地時、發大慈悲、修行諸度四攝等行、觀物同己、普皆救脫、盡未來際、不限劫數、如實了知自他平等、而亦

三身之本義可見究

初發心　釋云從所
乃至金剛一切菩薩
明了通達依正無二
分際故

答　釋云六之十七丁以
智攝色無二一色
而非智故說名智

不取衆生之相、以如是大方便智除滅無明證本法身、自然有不思議業種種自在之用、周徧法界、與眞如等、亦無有用相可得、何以故、一切如來、唯是法身、第一義諦、無有世諦境界作用、但隨衆生見聞得益故說爲用、此用有二、一依分別事識、凡夫二乘心所見者、名爲化身、此人不知轉識影現、見從外來、取色分限、不能盡知、二依業識、諸菩薩從初發心、乃至菩薩究竟地、心所見者、名受用身、身有無量色、色有無量相、相有無量好、所住依果、亦具無量功德莊嚴、隨所示現、無量無邊、無際無斷、非於心外、如是而見、此諸功德、皆因波羅蜜等無漏行熏、及不思議熏之所成就、具無邊喜樂功德相故、亦名報身、又凡夫等所見、是其麤色、隨六趣異、各見不同、非受樂相故、說爲化身、初行菩薩、見中品用、以深信眞如、得少分見、知如來身、無去無來、無有斷絕、唯心影現、然此、

菩薩猶自分別、以未入法身位故、淨心菩薩、見微細用、如是轉勝、乃至菩薩地盡、見之究竟、此微細用是受用身、以有業識見受用身、若離業識則無見相、以諸佛法身、無有彼此、色相互相見故、問若佛法身、離色相者、云何能現色相、答、以法身是色實體故、能現種種色、謂從本已來、色心不二、以色本性、即心自

身一以色性即智
故說名法身故

不動之心體起念
現若是非凡夫二
乘及初位菩薩之
所能知

性、說名智身、以心本性、即色自性、說名法身、徧一切處、所現之色、無有分齊、十方菩薩隨所堪任、隨所願樂、見無量受用身、無量莊嚴土、各各差別、不相障礙、無有斷絕、此所現色身、一切衆生、心意識不能思量、以是眞如自在甚深用故、復次爲令衆生、從生滅門、入眞如門、所謂推求五陰、色之與心、六塵境界、畢竟無念、以心無形相、十方求之、終不可得、猶如迷人謂東爲西、方實不轉、衆生亦爾、無明迷故、謂心爲念、心實不動、若能觀察、知心無念、即得隨順入眞如門、

對治邪執者、一切邪執、皆依我見、若離我見、則無邪執、我見有二種、一人我見、二法我見、人我見者、依諸凡夫、說有五種、一者如經中說、如來法身、究竟寂滅、猶如虛空、凡愚聞之、不解其義、則執如來性、同於虛空、常恒徧有、爲除彼執、明虛空相、唯是分別、實不可得、有見有對、待於諸色、以心分別、說名虛空、色既是妄心分別、虛空亦無有體、一切境相、唯是妄心之所分別、若心離妄動、則一切境界滅、唯一眞心、無所不徧、此是如來自性、如虛空義、非謂如空是常是有、二者如經中說、一切世法、畢竟體空、乃至涅槃眞如法、亦畢竟空、本性如是、離一切相、凡愚聞之、不解其義、即執涅槃眞如法、唯空無物、爲除彼執、明眞如法

法我見是非特
學道之大要而已
即是如來藏大甚深
諸法實相諸佛出世
之本懷及等閑否
過諸注離染

身、自體不空、具足無量性功德故、三者如經中說、如來藏具足一切性功德、不增不減、凡愚聞之、不解其義、則執如來藏有色心法、自相差別、爲除此執、眞如本無染法差別、因生滅染義示現、說差別故、四者如經中說、一切世間、生死染法、皆依如來藏起、一切法不離眞如、凡愚聞之、不解其義、則謂如來藏具有一切世間染法、爲除此執、明如來藏從本具有過恒沙等清淨功德、不異眞如、過恒沙等煩惱染法、唯是妄有、本無自性、從無始來、未曾與如來藏相應、若如來藏、體有妄法、而令證會、息妄染者、無有是處、五者如經中說、如來藏、有生死、得涅槃、凡愚聞之、不知其義、則謂依如來藏、生死有始、以見始故、復謂涅槃有其終盡、還作衆生、爲除此執、明如來藏、無有初際、無明依之、生死無始、若言三界外、更有衆生始起者、是外道經中說、非是佛教、又如來藏、無有後際、證此永斷生死種子、得於涅槃、亦無後際、法我見者、以二乘鈍根、如來但爲說人無我、彼人便於五蘊生滅、怖畏生死、妄取涅槃、爲除此執、明五蘊法、本性不生、亦無有滅、本來涅槃、若究竟離妄執者、當知染法淨法、皆悉相待、是故一切法、從本已來、非色非心、非智非識、非無非有、畢竟不可得相、而有言說者、皆是如來善巧

離念等語初發菩薩
當貼在額上

千劫百丈曰劫者
滯也亦住也李通玄
曰立時劫者衆生
之情塵也又曰心
緣劫盡見際何休
諸佛法明本非時
擬計時立劫非是
佛乘二乙十當
一丁右
知衆生之情滯豈特
三万百万故釋論
引十五万契經異說
自剎那至三大
阿僧祇劫諸衆生
心無量無邊各差別
故隨其心品說
信行相如是不同
今此文且依本疏
釋解

方便假以言語、引導衆生、皆爲離念歸於眞如、若隨言執義、增妄分別、不生實智、不得涅槃、

分別修行正道相者、謂一切如來、得道正因、一切菩薩發心修行、趣向義故、略說發心、有三種、一信成就發心、二解行發心、三證發心、信成就發心者、依何位修何行、得信成就、堪能發心、當知是人、依不定聚、以法薰習、善根力故、深信業果、行十善道、求無上覺、値遇諸佛、及諸菩薩、承事供養、修行、經十千劫、信心成就或以諸佛菩薩敎力、或以大悲、或因正法欲滅、以護法故、能自發心、既發心已、入正定聚、畢竟不退、住佛種性、勝因相應、或有衆生、久遠已來、善根微少、煩惱深厚、雖値諸佛菩薩供養、唯起人天種子、或起二乘種子、或有求大乘者、根則不定、或進或退、或有供養諸佛菩薩、未滿足十千劫、於中遇緣、亦有發心、所謂或見佛色相、或供養衆僧、或二乘所敎、或學他發心、如是等發心、皆悉不定、若遇惡緣、或便退失、墮二乘地、復次信成就發心、略說有三、一直心、正念眞如法故、二發深心、樂集一切諸善行故、三大悲心、願拔一切衆生苦故、問、上說法界一相、佛體無二、何故不唯念眞如、復修一切善行、答、譬如摩尼寶、本性

明潔、在鑛穢中、若人雖念寶性、不以方便種種磨治、無得清淨、衆生眞如之法、體性明潔、具足功德、而被無邊客塵所染、若人雖念眞如、不以方便種種熏修、無得清淨、以垢無量無邊徧一切法、當修一切善行、救一切衆生、顯現眞如法、彼方便行、略有四種、一行根本方便、謂觀一切法本性無生、離於妄見、不住生死、又觀一切法因緣和合、業果不失、起於大悲、修諸善行、攝化衆生、不住涅槃、以眞如離於生死涅槃相故、二能止方便、謂慚愧悔過、能止一切惡法、令不增長、以眞如離一切過失相故、三生長善根方便、謂於三寶所、起愛敬心、尊重供養、頂禮稱讚、隨喜勸請、正信增長、乃能志求無上菩提、爲佛法僧威力所護、業障清淨、善根不退、以眞如離一切障、具一切功德故、四大願平等方便、謂發誓願盡未來際、平等救拔一切衆生、令其安住無餘涅槃、以知一切法本性無二故、彼此平等故、究竟寂滅故、菩薩發是心故、則得少分見佛法身、能隨願力、現八種事、謂從兜率天退、入胎、住胎、出胎、出家、成佛、轉法輪、般涅槃、然猶未名法身、以其過去無量世來、有漏之業、未除斷故、成由惡業受於微苦、願力所持、非久被繫、有經中說或退墮惡趣者、非其實退、但爲初學菩薩、未入正位、而懈怠、

微細起滅之心相祖門後來名流注識是學道末後之牢關也拔其根豈不難乎

者、恐怖令彼勇猛、又此菩薩、一發心後、遠離怯弱、畢竟不畏墮二乘地、況於惡道、若聞無量阿僧祇劫、勤苦難行、乃得涅槃、不驚不怖、以信知一切法、從本已來性涅槃故、解行發心者、當知轉勝、初無數劫、將欲滿故、於眞如中、得深解故、脩一切行、皆無着相、知法性體無慳貪故、隨順修行檀波羅蜜、知法性離五欲過故、隨順修行尸羅波羅蜜、知法性無苦惱離瞋害故、隨順修行羼提波羅蜜、知法性無身心相、離懈怠故、隨順修行毘黎耶波羅蜜、知法性無動無亂故、隨順修行禪波羅蜜、知法性離癡闇故、隨順修行般若波羅蜜、證發心者、從淨心地、乃至菩薩究竟地、證何境界、所謂眞如、以依轉識說爲境界、而實證中、無境界相、唯眞如智、名爲法身、此菩薩於一念、徧往十方一切世界、供養諸佛、請轉法輪、唯爲衆生、而作利益、或爲怯弱衆生、超地速成正覺、或爲懈慢衆生、說經無量阿僧祇劫、久修苦行、方始成佛、如是示現無數方便、不可思議、而實菩薩、種性諸根、發心作證、皆悉同等、無超過法、決定皆經三無數劫、但隨衆生世界不同、所見所聞、根欲性異故、示所行亦有差別、此證發心中、有三種心、一眞心、無分別故、二方便心、任運利他故、三業識心、微細起滅故、又此菩薩功德成滿、於

色究竟、示一切世間最尊勝身、以一念相應慧、頓拔無明根、具一切種智、任運而有不思議業、能現十方無量世界、普化衆生、問、虛空無邊故、世界無邊、世界無邊故、衆生無邊、衆生無邊故、心行差別、亦復無邊、如是境界、無有齊限、難知難解、若無明斷、永無心想、云何能了、名一切種智、答、一切境界、本來一心、離於想念、以衆生妄見境界故、心有分齊、以妄起想念、不稱法性故、不能決了、諸佛如來、離於見相、無所不徧、則能現見諸法實性、顯照一切妄法、有大智用、無量方便、隨諸衆生所應得解、皆能開示種種法義、是故妄念心滅、了一切種、成一切種智、問、若諸佛有無量方便、能現一切處、利益衆生、何故衆生、不常見佛、或覩神通、或聞說法、答、諸佛如來法身、平等徧一切處、但依衆生心現、衆生心猶如鏡、鏡若有垢、色像不現、垢除則現、衆生亦爾、心若有垢、法身不現、

云何修習信分、此依未入正定衆生說、何等信心、云何修習、信有四種、一信根本、謂樂念眞如法故、二信佛具足無邊功德、謂常樂頂禮恭敬供養、聽聞正法、如法修行、願求一切智故、三信法有大利益、謂常樂修行諸波羅蜜故、四信正行僧、謂常供養諸菩薩衆、正修自利利他行故、修五門行、能成此信、所謂施門、戒門、忍門、精進門、止觀門、云何修施門、謂若見一切來求索者、所有財物、隨力施與、捨自慳貪、令彼歡喜、若見衆生危難逼迫、方便救濟、令無怖畏、若有衆生、而來求法、以已所解、隨宜爲說、不應貪求名利恭敬、唯念自利利他、廻向菩提、云何修戒門、所謂、在家菩薩、當離殺生、偸盜、邪婬、妄言、兩舌、惡口、綺語、慳貪、瞋嫉、諂誑、邪見、若出家者、爲折伏煩惱故、應離憒鬧、常處寂靜、修習少欲知足、頭陀等行、乃至小罪、心生怖畏、慚愧悔責、護持如來所制禁戒、當護譏嫌、能使衆生捨惡修善、云何修忍門、所謂見惡不嫌、遭苦不動、亦當忍於利衰毀譽稱譏苦樂等法、云何修精進門、所謂修諸善行、心不懈退、立志堅强、遠離怯弱、當念過去久遠、已來、爲求世間貪欲境界、虛受一切身心大苦、無有利益、是故應勸修諸功德、自利利他、速離衆苦、若人雖修行信心、以先世來、多有重罪惡業故、或爲魔邪所惱、或爲世務所纏、或爲病苦所逼迫、有如是等衆多障礙、是故宜應勇猛精進、晝夜六時、禮拜諸佛、誠心懺悔、勸請隨喜、廻向菩提、發大誓願、常不休廢、諸障消滅、善根增長、云何修止觀門、謂息滅一切戲論境界、是止義、

或現　大凡形相之現、非眞佛、眞佛現於心中、是非見佛者、不足與語也

明見因果生滅之相、是觀義、初各別修、漸次增長、至于成就、任運雙行、其修止者、住於靜處、端坐正意、不依氣息、不依形色、不依地水火風、乃至不依見聞覺知、一切分別想念皆除、亦遣除想、以一切法、不生不滅、亦不得隨心外念境界、後以心除心、心若馳散、即當攝來住於正念、是正念者、當知唯心無外境界、即復此心、亦無自相、念念不可得、若從坐起、去來進止、有所施作、於一切時、常念方便、隨順觀察、修習淳熟、其心得住、以心住故、漸漸猛利、隨順得入眞如三昧、深伏煩惱、信心增長、速成不退、若心懷疑惑、誹謗不信、重罪業障、我慢懈怠、如是等人、所不能入、復次依此三昧故、知法界一相、謂一切諸佛法身、與一切衆生身、平等無二、即名一相三昧、若修習此三昧、能生無量三昧、以眞如是一切三昧根本處故、或有衆生、善根微少、爲諸魔外道鬼神所惑亂、或現惡形、以怖其心、或示美色、以迷其意、或現天形、菩薩形、如來形、相好具足、或說總持、或說諸度、或說平等空無相無願、無怨無親、無因無果、畢竟空寂、本性涅槃、或復令知過去未來、及他心事、辯才無礙、使其貪着世間名利、或數瞋數喜、性無常度、或多慈愛、或恒樂昏寐、或久不睡眠、或身嬰疹疾、或性不勤策、或卒起精進、後便

今世流布之禪、不爲外道之所屬者、有耶無耶

休廢、生於不信、多疑多慮、或捨本勝行、更修雜業、愛着世事、種種牽纏、亦能令人得諸三昧、少分相似、皆是外道所得、非眞三昧、或復一日二日、乃至七日、住於定中、得好飮食、身心適悅、不饑不渴、使人愛着、或令乍多乍少、顏色變異、或復勸令受女等色、若爲諸見煩惱所亂、退失善根、是故宜應審諦觀察、當勤正念、不取不捨、遠離諸障、應知外道所有三昧、皆不離見愛我慢、貪着世間名利恭敬故、眞三昧者、不住見相、不住得相、乃至出定、亦無懈慢、所有煩惱、漸漸微薄、以三昧力、壞其種故、若不習此三昧、無有得入如來種性、以餘三昧、皆是有相、與外道共、多起着味、依於我見、繫屬三界、修此三昧、現身即得十種利益、一者常爲十方諸佛菩薩之所護念、二者不爲諸魔惡鬼所惱亂、三者不爲一切邪道之所惑亂、四者令誹謗深法、重罪業障、皆悉微薄、五者滅一切疑諸惡覺觀、六者於如來境界、信得增長、七者遠離憂悔、於生死中、勇猛不怯、八者其心柔和捨憍慢、不爲他人所惱、九者設不住定、於一切時、一切境中、煩惱種薄、終不現起、十者若住於定、不爲一切音聲等外緣之所動亂、復次若唯修止、則心沈沒、或生懈怠、不樂衆善、遠離大悲、是故修觀、修習觀者、當觀一切世間、有爲

之法、無得久停、須臾變壞、一切心行、念念生滅、應觀過去法如夢、現在法如電、未來法如雲、忽爾而起、應觀有身、悉皆不淨諸蟲穢汙、煩惱和雜、無一可樂、如是當觀一切衆生、從無始來、皆因無明熏習力故、令心生滅、已受無量身心大苦、現在未來、亦復如是、無邊無限、難出難度、不能覺知、甚爲可愍、如是觀已、生決定智、起廣大悲、發大勇猛、立大誓願、願令我心、離諸顚倒分別、修行諸善功德、盡未來際、以無量方便、救濟一切苦海衆生、令住涅槃第一義樂、作是願已、於一切時、隨已堪能、修自利利他之行、行住坐臥、常勤觀察應作不應作、復次若唯修觀、則心不止息、多生疑惑、不隨順第一義諦、不出生無分別智、是故止觀應俱行、謂雖念諸法、自性不生、而復念因緣和合、善惡業報、不失不壞、雖念因緣善惡業報、而亦念性不可得、若修止者、對治凡夫、樂着世間、亦治二乘、怯弱之見、若修觀者、對治凡夫、不修善根、亦治二乘、不起大悲、狹劣心過、是故止觀、共相助成、不相捨離、若止觀不具、必不能得無上菩提、復次衆生、初學是法、欲求正信、其心怯弱、以住於此娑婆世界、自畏不能常值諸佛、親承供養、懼謂信心、難可成就、意欲退者、當知如來有勝方便、攝護信心、謂以專意念佛因緣、隨願得生他方佛土、常見於佛、永離惡趣、如經中說、若人專念西方極樂世界、阿彌陀佛、所修善根、迴向願生、決定得生、常見佛故、終不退轉、觀佛法身、漸次修行、得入正位、

云何利益分、如是大乘諸佛秘藏、今已總說、若有衆生、欲於如來、甚深境界、廣大法中、生淨信覺解心、入大乘道、當持此論、思量修習、當知是人、決定速成一切種智、若聞此法、不生驚怖、當知此人、定紹佛種、速得授記、假使有人、化三千大千世界衆生、令行十善、不如於須臾頃、正思此法、過前功德、無量無邊、若一日一夜、如說修行、所生功德、無量無邊、不可稱說、假使十方一切諸佛、各於無量阿僧祇劫、說不能盡、以眞如功德無邊際故、修行功德、亦復無邊、若於此法、生誹謗者、獲無量罪、於無量劫、受大苦惱、是故但應仰信、勿生誹謗、自害害他、斷三寶種、一切諸佛、依此修行、成無上智、過去菩薩、依此得成淨信、入無上智、現在今成、未來當成、是故衆生、應勤修學、

我今已解釋、甚深廣大義、功德施群生、令見眞如法、

他方佛土、李通玄曰、機未成則求淨刹於他方、根已熟則顯法身於自性、

馬鳴大士起信論梵筴已亡、僅存二譯、亦有異同、故對觀會取於兩譯之勝義、未曾創添一字矣、

原坦山識

(七) 覺仙證道歌 (原漢詩)

覺仙老人坦山選

四大を積聚して人と爲す、成壞隨緣本眞に任かす、依然として孃生す臭皮袋、敢て保つ本性不壞の身、是心ならず是物ならず、元名くべきに非ず强て佛と稱す、千生擾々として變易なく、萬死寂々として淪沒に非ず、頽祖佛不傳之法有り、得る時は了々として行業を脫す、了する時は塵劫も同刹那、了せざるときは刹那も塵劫と成る、從前誰人か喚て禪と爲す、常に恨む名字終に未だ圓かならざるを、眼目定んで動く三千條、心意擬議す萬八千、難辛刻苦總て益なし、面門の鼻孔孰に從てか覓む、漫に快活を逐ふも事旣に違ふ、却て鬼窟に住して癡奚に拆く、生々不生孰か生を妨げん、不生の生曾て生に非ず、謂ふと莫れ生を度して佛と成すと、生佛由來自づから圓成、淵底の沈兎虛く執捉し、空裡の野馬漫に啗啄す、八萬の塵勞斷ずるを用ゐず、一靈の心性覺に關るに非ず、我は是太平無事の俗、佛法を將ち來て相徵すると莫れ、佛法行業一も守る無し、世上の伎倆百不能、佛を罵り祖を唾して業識を逞ふし、驢と作り馬と爲りて所得に從ふ、月花地に落つ是何の聲ぞ、風脚空に走つて甚の色を知らん、直饒妙高を拔くの力有るも、自家眼底還て測り難し、摩竭山に入て徒らに寥々、碧湖航海漫りに得々、君に勸む鳥玄歩を擧ぐるとを休よ、願くは無生の路を行く莫れ、果は祖佛を超べ總て管する莫れ、法は涅槃を過ぎて亦顧みず、地錐を卓する無きも未だ貧と稱せず、食粒米を絕ちて方に始めて貧、四天の王曾凍餓無裩の兒珠寶を積む、舌大千を覆ふて說けども盡きず、身寸絲を脫して敢て惜まず、少林纔に有り溫和の說、垢を包み慚を忍て心印を傳ふ、龍城領下の璧を奪ひ、深閑髻裡の信を偸む、痴兒了せず外に向て求め、空裡に馬に跨て何に進まんと欲す、誰が得往昔多年の非、心身艱苦漫りに勞疲し、枯木定中念想を絕ち、故紙堆中に思議を錯る、有爲相法功德を積み、無爲淨裡心識を空す、自ら謂ふ小修行日淺しと爲す、未だ得ず安穩自在の力、偶一旦霄路の通ずる有り、又覺ふ暫時心意の空すと、幾回か歡喜し且愁惱す、日久しく月遙にして舊に依て同じ、他の憐を取らんと欲して說を得ず、自悟を要求して還て裂離し、巧盡き力窮まり心殆んど死す、死心却て得たり通身の悅、千丈の涯上決して川を駛す、百草頭邊に安禪を了ず、皆爾覺來る生死の夢、任運として祖佛の關を透過し、終年晏如として禪

を要せず、座臥行住自ら暢然、魔佛分明なり睟目の裡、照用自在擬議の間、唯人間玖壜の客と爲、羨まず天上無漏の仙、生緣盡了て唯應さに死すべし、脚跟困し來て也た止むべし、能く生死を脱して生死に住し、憂喜を斷ぜんと欲して憂喜に遐る、金剛の眞心般若と名く、即ち是五陰敗壞の下、錯て久遠に向つて佛を求むると莫れ、箇々の脚底自ら肅洒、頓に至尊を辭して功を論ぜり、阿爺阿爹休議同じ、苑後花咲いて綠樹の傍、山頭蛸飽きて碧空に眠る、眸を轉ずれば天外玉露墜つ、頭を回せば池邊春意動く、啼鳥は風香を帶びて天に飜り、落葉は徑を沒して霜は地を掩ふ、誰家の巧兮梢末を彫し、何處の匠兮天月を劉す、寒蟬は樹を抱ひて何事をか悲む、清磷は絡を穿ちて涼竭るとなし、嶺上閑雲風の吹くに任す、階前の蘚紋人爲に非ず、天寒ふして孤飛氷爐に凭る、雪飛て連嶽素衣を裝ふ、我に唯一條の錫あり、東西南北經歷を恣にし、時あつて往するも有意に非ず、緣なくして居し跡を停めず、垢淨の別眼中の妄、三千の境夢裡の相、一心了ぜざれば千差あり、千差を坐斷すれば一相なし、千差萬相元と碍えず、唯人自ら甘じて封界を立つ、十方の士微塵の中、刹那の頃曠空の外、孰か謂ふ百劫佛果を成ずと、尾生信を守つて自ら禍を惹く、恰むべし影を逐ふて却て頭を失す、知らず燈

光元是火なるを、心豁是事理を融するにあらず、眼明敢て彫僞を作さず、語を寄す巖々たる伶俜の人、悉く是堂々たる長者の子、從前奚に憑つて功德を失し、久劫錯つて心識を認むるに由る、浮塵金光無碍の眼、泡聚清淨自在の力、譬へば鞘中の芙蓉劍の如く、又灰裡の猛烘燄に似たり、灰を撥て四邊觸るべからず、鞘を脱すれば天地皆魔を喪ふ、更に神庫の重秘鼓に似たり、之を把れば妖魅形容露はす、一鼓すれば祖佛も猶逡巡し、再鼓すれば泥犂還て了悟す、塵俗の道劇雜多し、緇披の流眞務少し、或は人天に向つて囁呪を衒ひ、又世間に入つて妄法を索む、心中貪を爲す他人の利、終年免れず魔に攝せ被るを、有漏の痴福漫に愁盡、無愧の臭顏苟に合さんと欲す、元平々坦々の事と雖も、逕涵々汨々の業と成る、唯心眼と爲して了絶せず、枉げて嶮路に入て沙劫を經、偶々淨業を修するも意眞ならず、三經五論漫に獵涉し、他の謗を惡み他の讃を喜ぶ、平等性裡に際岸を立つ、安ぞ得ん明眼靈機の士、目擊之中親く相見し、眞道を求めんと要せば眞得がたし、唯求心を息めば道得易し、澄潭切に忌む玄默を守るを、沈吟して漫に窒塞を愁ふる莫れ、饑來れば飯を喫す別に法なし、昏じ來れば打睡して勞力を休す、火裡の蓮誰れか識るべき、松柏の操尤も測り難し、若し錢財を愛ま

ば身常に煩し、名聲の厭ふに由て心每に惑ふ、人能く眞實の旨を知らんと要さば、問ふこと莫れ世上の非と是と、直に到る纖毫不疑の地、廓然記に非ず無記にあらず、空しく身を勞して黄土を穿つを覓め、外に向つて意を刻して佛祖を求む、巍々たる高士猶免れがたし、悠々たる庸流豈數ふるに足らんや、有と說き有と執し空々と說く、有元有に非ず空矣ぞ空ならん、辟同意違ふ小異に非ず、意同じく辟異にして大同と作す、賢聖妙界心上の塵、菩提涅槃も性地の痕、諸法本來唯是妄、唯是諸法本來眞、世人了せずして出世を求め、痴根徹骨頓に制し難し、獨り已躬のみ長く昏昧ならず、復且く他に向つて災害を傳ふ、縱ひ心原を了ずるも保重すること莫れ、直に神力を振つて須らく擊碎すべし、唯能く解して安閑の身と爲る、夢幻法中別人に非ず、毘盧頂額に痛棒を喫せしめ、阿鼻底裡に法輪を轉ず、拋來す驪珠珊瑚の樹、玉殿寶樓も亦住せず、不住不依又蹤を絕す、人疑ひ更に甚處に向つてか去る、驢載の前馬年の後、不蹤の步無音吼、不蹤の步兮唯脚に任せ、無音吼兮漫に口に從ふ、聖心と凡情とを脫却して、無差法中何ぞ爭を須ん、睫眉の際塵剎を隔て、毫厘の差深坑に墮つ、法々元知る非是なきを、躑躅詎ぞ更に萬里を望まん、氣春溫を傳へて百花發き、風何くより來り誰に向つて問ふ、氣甚に憑て生ず徒論を休めよ、碧眼の胡も曾て不識、黄面の老も方に困に堪たり、身也心也責あらず、雖兮易兮所益なし、十字街頭安車に乘じ、長年傭賃の客と作る莫れ、法に眞僞なし誰か能く解せん、證に深淺あり陀制に非ず、路遠くして多難化城を過ぎ、時澆くして每に聞慧に住し易し、若し實法に遇へば却て驚駭し、偶々念想を逗て漫に會解す、曾て畵龍に由て愛惰を起し、忽ち雲雷を見ては疑怖を生ず、古より達士は多く存せず、當今知らず能く幾くか在る、一粒の米千日の飢、半文の錢萬兩の債、努力至らざれば債償せず、粟米多からざれば飢瘥へがたし、不會は唯他の不會に任せ、唯古道を傷ふて漸次に壞る、悉く是胡亂修證し來り、無眞に由て正道流在す、喚て如々と爲すも既に假說、煩惱何須ん換皮耝、傳ふべからず語るべからず、無言說の處妙訣あり、大活を得んと要さば須らく大殺すべし、炭餤の中堅氷結ぶ、請看よ少室安心の人、亦曾て臂を斷じ且つ雪に立つ、未だ實所に到らざれば得かなし、永年噬臍復何極らん、山に上つて若し山頂に到らずんば、山頂の好景看得がたし、海に入つて直に須らく海底に徹るべし、海底の珠寶特に億のみならず、萬法之中何ぞ殊勝ならん、證元道にあらず道證にあらず、證にもあらず道にもあらず矣をか思議せん、思

はず識らず唯相應す、六賊和兮物を逐はず、群迷謝兮還て佛を嫌ふ、不斷の月常に妍々たり、無邊の風長く拂々たり、等閑りに放下せば多くは差過し、仔細に檢點せば亦却て失す火要涼冷たり氷雪熱せり、但情下に向つて亂説を休めよ、語裡出身軌に拘らず、句外明宗轍を守るなし、遙峰煙を含んて鳥語幽なり、斜陽十里春節を試み、蝸牛雲を御して鳴一聲、無舌の語奈何が決せん、

(八) 鶴巢餘韻

鶴巢坦山撰

○春草吟寄神林復所（在下總）（己亥年）

昊天生品物、父母産此生、雨露品物殖、教誨人倫成、東風催芽萠、濕雨長葉莖、
芽萠不辯類、葉莖始知名、花明多賞客、草深少人行、不踐深草裡、焉摘靈芝英、
曾被春風澤、還負南帝令、常欲花英馥、未得葉莖盛、爲此春草吟、聊欲比我性、
寄語林先子、徵志懷賢聖、

○雨中送春（庚子年）

晩春風雨掩遍界、迹日空濛徹不晴、深綠脱芳斷鳥道、落紅滿地絶人行、隨時先
沾女兒袂、與物早傷騷客腸、唯有癡人似遁世、曾無節物關其情、

○斷臂（壬寅年）

獵人逐鹿失歸路、韓狗不知積雪深、神祖發狂忘臂痛、病穿髓腦不安心、

○呈風外老師（初參在前年再參之時呈此詩）（癸卯年）

老風外矣老風外、年老形枯不歇心、百草々中無絃曲、千秋萬古孰知音、

○偶作（同）

卸却菩提兼煩惱、非凡非聖又非仙、頭如頑石身如屍、一箇幻心隨萬緣、

○疏山壽塔頌次風外老師韻　（乙巳年）

富如毘阜用何儉、徒累匠人無與錢、但抛券跳開寶庫、誰家壽塔不成全、

○晩春抵芳野詠雲井櫻呈風外老師　（同）

䫻風援々吹花樹、騒客斷膓枉徘徊、雲井一株風雨外、孤吟獨步慰情回、

○擬寒山　（同）

可怜名利塵、絡箇無爲身、不識安心處、枉爲伶䮉人、放言遑彼我、刻意受沈淪、世事多乖忤、已哉不可伸、

○心路　（同）

馳䮉心路々遐窮、心路窮時活路通、踢却意山三界沒、蕩翻識海大千空、彩雲解頤花啼月、翠岳畫黛猿笑風、應笑春花秋月夜、任地癡客刻西東、

○次隆澄律師韻　（丙午年）

麁氣麁禪瞎盲人、元非辨妄那知眞、佛家深理如牆面、笑殺從前無事身、

○祖忌　（同）

西州遠自乘扁艭、隻履由來傳孰家、千載枉稱東地祖、至今孫子弄空華、

○佛成道　（同）

夢破伽闍山頭曉、恩深四十九年說、若要破夢報恩句、杜宇三冬夜叫血、

○除夜二首　（同）

今歲今宵今且去、來朝來歲又將來、來々去々有何限、稍勝人生老不回、

拂塵求淨倣痴禪、送盡歲時已就眠、半夜有人敲柴戶、恨無一夢到明年、

○陽春行　（丁未年）

由貧曾學獨醒人、偶遇陽春酒入脣、弊衣依然難掩醜、醉意卓爾堪消嚬、墟坵之中欲試洋、人稱毘尼須護身、嚴淨之土嫌受報、自笑淸麴能發眞、壚墟不種布芳草、洲汀無根浮綠蘋、梅解隨時凝香艶、柳似得意紆綠綸、還憐雪後摧殘樹、爭若春來色香新、壚側獨自可甘睡、慷慨何必敢求隣、乾坤不識經幾劫、人間坐覺急於瞬、急於瞬兮長於劫、靈於鳳凰奇於麟、此中消息君知否、任縱我快酌陽春、

○獨遊吟次玄樓師韻　（同）

氣宇如狂容似僧、雖多所失少所能、住迹兀々如石頑、轉脚翩々似雲騰、淸歷遊空留不留、寒蟾印水流非流、無意北溟與南嶽、豈比溝濱兼壠丘、笑遨尋常歷年尼、酸辛何必問良師、螳螂拒轍徒掉臂、螻蟻圓柱漫獻誚、青眼利害不可瞞、雲雨花秤非所干、春來黃鳥啼花底、秋到紅葉滿樹端、宇宙雖小足寄身、蝸蚌守愚不哭旻、無數珠玉別人賓、一片氷心是我珍、曾穿萬翠入深山、又擁千醜下人間、花開葉落趣不窮、烏飛兎走誰盡空、我常獨遊花月下、世上幾許識雌雄、

○大笑　（丁未年）

昨夢得黃金、歡情溢胸臆、醒來摸懷裡、蟣蝨飽匍匐、

○三友　（一書典）（二筆硯）（三燈火）　（同）

性癖終年知過少、唯斯三友常同盟、卷書映眼照古今、筆硯隨時寫野情、夜對孤燈閑靜坐、心兼光焰自淸明、與君追逐長無背、請向人間謝利聲、

或曰子之嗜酒過三友、而今不能爲子友者何也、予曰、然雖嗜酒過三友、性愚而不能常得書、如隔室之於大賓尊客、未若三友之居常枕藉耳、

○廢酒　（同）

布襲敗盡缺餘撥、持戒先將廢酒樽、制斷釀家行賣者、從今愼勿入吾門、

○證道歌竝引　（丁未年）

永嘉禪師證道歌盛篇、名布西天、世徧知之、予頃者安臥有日、偶蹈其韻跡、遂以成篇、蓋宗說圓明須遜古人、生機發轉、豈敢多讓也哉、

積聚四大假爲人、成壞隨緣任本眞、依然孃生臭皮袋、敢保本性不壞身、不是心兮不是物、元非可名强稱佛、千生擾々無變易、萬死寂々非淪沒、賴有祖佛不傳法、得時了々脫行業、了則塵劫同刹那、不了刹那成塵劫、從前誰人喚爲禪、常恨名字終未圓、眼目定動三千條、心意擬議萬八千、艱辛刻苦總無益、面門鼻孔從孰覓、漫逐快活事旣違、却住鬼窟癡奚拆、生々不生孰妨生、不生之生曾非生、莫謂度生又成佛、生佛由來自圓成、淵底沈兎虛執捉、空裡野馬漫啗啄、八萬塵勞不用斷、一靈心性非關覺、我是太平無事僧、莫將佛法來相徵、佛法行業一無守、世上伎倆百不能、罵佛唾祖逞業識、作驢爲馬從所得、月華落地是何聲、風脚走空知甚色、直饒有技妙高力、自家眼底還難測、摩竭入山徒寥々、碧胡航海漫得々、勸君休擧鳥玄步、願且莫行無生路、果超祖佛總莫管、法過涅槃亦不顧、地無卓錐未稱貧、食絕粒米方始貧、四天之王曾凍餓、無裩之兒積珠珍、舌覆大千說不盡、身脫寸絲非敢慳、少林纔有漚和說、包垢忍惹傳心印、龍城奪頷下之璧、深閑偷甞裡之信、痴兒不了向外求、空裡跨馬欲何進、誰得往者多年非、身心艱苦漫勞疲、枯木定中絕念想、故紙堆中錯思議、有爲相法積功德、無爲淨裡空心識、自謂脩行爲日淺、未得安穩自在力、偶有一旦霄路通、又覺暫時心意空、幾回歡喜且愁惱、日久月還依舊同、欲取他憐不得說、要求自悟還難裂、巧盡力窮心殆死、死心却得通身悅、千丈涯上決駛川、百章頭邊了安禪、皆爾覺來生死夢、任運透過祖佛關、終年晏如不要禪、坐臥行住自暢然、魔佛分明瞬目裡、照用自在擬議間、唯爲人間玖壞客、不羨天上無漏仙、生緣盡了唯應死、脚跟困來也須止、能脫生死住生死、欲斷憂喜還憂喜、金剛直心名般若、即是五陰敗壞下、莫錯向久遠求佛、箇々脚底自蕭灑、頓辭至尊不論功、阿爺阿爹休議同、苑後花咲傍綠樹、山頭蟾飽眠碧空、轉眸天外玉露墜、回頭池邊動春意、啼烏帶風香飜天、落葉沒徑霜掩地、誰家巧兮彫梢末、何處匠兮劉天月、寒蟬抱樹悲何事、清飈穿裕凉無竭、嶺上閑雲任風吹、階前蘚紋非人爲、天寒孤鳧凭冰爐、雪飛連嶽襲素衣、我唯有一條之錫、東西南北恣經歷、有時住兮非有意、無緣居兮不停跡、垢淨之別眼中妄、三千之境夢裡相、一心不了有千差、坐斷千差無一相、千差萬

相元不碍、唯人自甘立封界、十方之土微塵中、剎那之頃曠空外、孰謂百劫成佛果、尾生守信自惹禍、可怜逐影却失頭、不知燈光元是火、心豁非是融事理、眼明不敢作離僞、寄語嬴々伶併人、悉是堂々長者子、從前憑奚失功德、久劫由錯認心識、浮塵金光無碍眼、泡聚清淨自在力、譬如鞘中芙蓉劍、又似灰裡猛烘燄、撥灰四邊不可觸、脫鞘天地皆嗇膽、更似神庫重秘鼓、杷之妖魅形容露、一鼓祖佛猶逡巡、再鼓泥黎還了悟、塵俗之道多劇雜、緇披之流少眞珍、或向人天衒嘯呪、又入世間索妄法、心中爲貪他人利、終年不免被魔攝、有漏痴福漫愁盡、無愧臭顏苟欲合、元雖平々坦々事、還成涸々汨々業、唯爲心祖不了絕、枉入險路經沙劫、偶修淨業意不眞、三經五論漫獵涉、惡遭他謗喜他讚、平等性裡立際岸、安得明眼靈機士、目擊之中親相見、要求眞道眞難得、唯息求心道易得、澄潭切忌守玄默、沈吟漫莫愁空寒、饑來喫飯別無法、困來打睡休勞力、火裡之蓮誰可識、松柏之操尤難測、若愛錢財身常煩、由厭名聲心每惑、人能要知眞實旨、莫問世上非兼是、直到纖毫不疑地、廓然非記非無記、竟空勞身穿黃土、向外剌意求佛祖、巍々高士猶難免、悠々庸流豈足數、說有執有說空空、有元非有空奚空、

辭同意遠非小異、意同辭異作大同、賢聖妙果心上塵、菩提涅槃性地痕、諸法本來唯是妄、唯是諸法本來眞、世人不了求出世、痴根徹骨頓難制、不獨巳躬長昏昧、復且向他傳災害、縱了心原莫保重、直振神力須擊碎、唯能解爲安閑身、夢幻法中非別人、毘盧頂顊喫痛棒、阿鼻底裡轉法論、拋來驪珠珊瑚樹、玉殿寶樓亦不住、不住不依又絕蹤、人疑更向甚處去、驢哉之前馬年後、不蹤之步無音吼、不蹤步兮唯任脚、無音吼兮漫從口、脫却聖心與凡情、無差法中何須爭、睫眉之際隔塵剎、毫厘之差墮深坑、法々元知無非是、蹶踢詎更望萬果、氣傳春溫百花發、風自何來向誰問、氣憑甚生休徒論、碧眼之胡會不識、黃面之老方堪困、身也心也不在責、難兮易兮無所益、十字街頭乘安車、莫作長年傭賃客、法無眞僞誰能解、證有深淺非陀制、路遠多難過化城、時澆每易住聞艷、若遇實法却驚駭、偶逗念想漫會解、曾由畫龍起愛情、忽見雲雷生疑怯、自古達士多不存、當今不知能幾在、一粒之米千日飢、半文之錢萬兩償、努力不至償不償、粟米不多飢亘瘥、不會唯任他不會、唯傷古道漸次壞、悉是胡亂修證來、由無眞正道流在、喚爲如々既假說。懊惱何須換皮胡、不可傳兮不可語、無言說處有妙訣、要得大活

須大殺、炭燄之中堅氷結、請看少室安心人、亦曾斷臂且立雪、未到寶所無得力、永年嚙臍腹何極、上山若不到山頂、山頂好景看難得、入海直須徹海底、海底珠寶特不億、萬法之中何殊勝、證元非道々非證、非證非道奚思議、不思不議唯相應、六賊和兮不逐物、群迷謝兮還嫌佛、不虧之月常妍々、無邊之風長拂々、等閑放下多差過、仔細檢點亦却失、火聚凉冷氷雪熱、但向情下休亂說、語裡出身不拘執、句外明宗無守轍、遙峰含烟鳥語幽、斜陽十里試春節、蝸牛御雲鳴一聲、無舌之語奈何決、

○夢妣三首

（丁未年）

喪母如今己十年、幾回入夢覺閑眠、恐無此界餘情斷、切利那邊未熟緣、
誤疑吾己得神仙、過去十年在枕邊、覺了意情猶未盡、愁慚愛見落人緣、
夢醒猶記語言時、傍膝摩頭和々辭、豈是童心終不變、幾多事業似雛機、

○猫兒

（同）

堪笑猫兒性似余、饱來肢脚上床舒、獨憐無意衣乘住、一箇頑皮生有餘、

○悼故香積風外老師

（同）

壬寅春予初參師々當時示以疏山壽塔因緣及頌曰老々疎山云云後乙己予復寓河內因讀五燈會元逍壽塔因緣乃和前頌以呈師曰富如毘阜云云師復有再酬曰疎山不知云云今玆六月二十二日師歸寂時壽六十九予追懷往事不止因蹈前韻更打一偈供師之奠、

壽塔從來隨豐儉、小大何須索匠錢、奠到分毫纔觧絕、憾君不見淚潸焉、

○古路

（丁未年）

一條古路無人訪、歲月蕭々荊棘生、回首春秋相推逐、風光日夜有餘情、

○自敍

（同）

嘗入宣尼學、螢雛究經史、早悟非至法、圓顱爲釋子、盡力南頓宗、偶得安心指、

憶昔少小時、慷慨期傑士、自惕我何人、永朽山野裡、東志忘寢餐、郤慚屈姚姒、不若了一心、萬法歸胸襟、天地從改變、世情任浮沉、生死夜乘晝、今古晴又陰、清宵孤杖月、和日閑窗食、齒意可自掬、免遣佗搜尋、

○寄龍海奕堂和尚 龍海院在上野前橋 (庚戌年)

盛化遙知動萬天、烱生依舊唯貪綠、多般風景多般興、憶得楚圓大道泉、

○鼻祖忌 (同)

古道衰頹至若斯、每逢祖忌徒追思、兒孫非但隨疏懶、又遇魔强法弱時、

○雪夜 臘月十日 (庚戌年)

天上月華山下雪、輝光映徹百千娟、恨無詩酒酬風色、獨推竹扃寒榻眠、

○歲旦 (辛亥年)

歲元把筆擬童稚、一句半章也不消、自笑辭材與年盡、春來猶未見新條、

○自況 自號踈齋又禿民 (壬子年)

袈裟直綴纔存形、酒肆淫房無所擇、裸畜禿民雖可名、醜顏饒倖免王責、

○黃檗三掌頌 (壬子年)

和氣輕風鬪馥芳、前山後苑試閑行、黃鶯飛去花狼藉、添得夕陽興味長、

○觀音大士贊 (同)

五々圓通之最、四八無碍之身、君更有千手眼、唯莫錯渾沌人、

○看妓 (同)

嬌歌醉舞入情鄉、銀燭香風綵艷粧、具識巫山雲雨意、假令百屈可傾城、

○夢書大藏化薄後 (癸丑年)

聞道因緣功德聚、悉從一箇信心來、(於是曉鐘一聲醒後續後二句) 百千經卷無量義、夢破曉鐘第一回、

○次酬奕堂和尚韻 (同)

雲居羅漢住雲居、多是神通在麴車、近日鴨河逢旱魃、未霑唇吻已無餘、(予時住洛北雲居山)
(此年臨國大旱)

○附奕堂和尚詩 (同)

雲居羅漢住雲居、多是神通在麴車、吞却鴨河透底水、鉢盂傾盡得無餘、

○味所花 (甲寅年)

花影朦朧半月前、閑容却勝日中鮮、尋常人事貴明白、味所誰知有絕妍、

○草要義集 (甲寅年)

扶倦挑燈草要義、婆情一片未全灰、浮詞非肯釣聲利、願以深心供後才、

○癡隱二首 (甲寅年)

市隱山逃猶未奇、思量眞隱不如癡、橫眠都邑無人問、野欄山蔬才療飢、
隱超巢由癡與貪、雖非求隱更無倫、支公何意買山遁、却以遁名賣世人、

○轉衣戲賦 (轉衣時搭紅袈裟見童喚爲赤坊主) (乙卯年)

洞門三級不搖稱、浮義閑名競超昇、我亦隨他不得止、無端被喚作紅僧、

○自詠 (元有十數號兮詠其五△坦山、瓦作、癡隱乍住、尼乾子、裸畜、禿民、鵰巢、逸民、逸郎、行成、鎌庵、迂足齋、醉殴、露月、醒山、) (同)

坦平之山、險奇難究、良巧之作、儱侗不鏤、性痴名隱、乍住乍走、姓尼乾子、自號裸畜、

○寄龍海奕堂和尚　(同)

雷聲洪振動三天、更望法霖霑大千、狂客依然狂且健、飢來難飯困難眠、

○大佛頂首楞嚴經開講　(丙辰年)

古佛無畏談、山僧無差說、雖如墨與棊、元是鹽飛雪、

○賀奕堂和尚移住加州天德院　(丁己年)

看君如龍變、騰躍克昇天、三兩何須怪、觀音亦恭然、

○偶作　(戊午年)

萍跡螻居四十年、愧無一事說人前、世情法儀俱蕭洒、尙把强顏向佛天、

○透禪和尚見惠犢鼻褌戲寄贈　(同)

曾恨無褌長者子、今嗟有褌困窮人、細思塵事堪抱腹、千里寄君欲消嚬、

○感時二首　(已未年)

才能自古多遭禍、眞覺人間行路難、狂懶却斯萬全術、得爽治亂不相干、

爲惡無近刑、爲善無求名、此是古人語、我今深發明、

○僑居偶作　時在京師寺町三條上處　(同)

曾閉四條五條禪、今我三條送數年、貴賤往來混馬糞、李兒張婦唯重錢、

○庚申新年　(庚申年)

三條官道邊、突兀迎新年、兒童戲庭際、車馬喧門前、來者多塵俗、與誰欲語禪、

唯貪杯裡物、坐訪卷中賢、

○刻自著心識論　(同)

一念心明暗、無量劫苦辛、機輪展轉妙、楚庭抱璞人、

○次酬同師見題自述心識論韻 (同)

非無聰達人、流弊慣群類、蚊力欲擔山、自欺又自愧、

○謝慧全和尙贈金 (同)

乍住庵中土鍋友、君居名刹我孤貧、追憶故人戀々意、萬里方金見惘眞、

○降魔 (同)

單刀抵萬敵、赤手入魔宮、瓦解氷消去、三更打日中、

○法身 (同)

身心滅盡了、覺性滿虛空、眞月非來去、影光西又東、

○報身 (同)

自甘闇裡禪、誰識壺中天、浮雲任來去、空界永依然、

○應身 (同)

諸佛慈悲、因緣衆機、感應各受、妙難思議、

○演法 (庚申年)

佛以一音演說法、衆生隨類各得解、各得解了歸一乘、同入甚深薩若海、

○歲晩 時得狂名幽居于北漢倉滿寺屋 (同)

前峰後嶺似寒山、獨與梅花相對閑、歲晩一床塵世外、狂歌亂舞唯鎖關、

○元旦 時尙在滿寺屋 (辛酉年)

上天最勝最尊王、即斯牢獄鐵枷生、東來明帝辭元日、萬像森羅祝太平、

○春晴（滿壽屋庭在松藤樹）（同）

天晴山嶽着新粧、春入梅花風有香、庭際松藤與櫻樹、漫勞詩筆比甘棠、

○詠雲（得昇呈近衛關白公）（同）

蓋覆乾坤嗤女媧、或昇山嶽或泥沙、隨風隨處無常態、時起甘霖利國家、

○自題（同）

古賢先聖異中同、千句萬章空裡風、文筆有時隨意得、任他爲白又爲紅、

○途中先奉寄本師和尚（同）

狂慵疎慵自作性、昔曾吾友住寒山、世人驚愕如虎狽、拾得豐干相對閑、

○偶成（辛酉年）

八風吹馬耳、三毒死空身、四苦更交到、壺中別有春、

○狂僧（同）

世情法態總漫事、地獄天堂元佛乘、쑸席野糧何所乏、乾坤獨步一狂僧、

○寒村（同）

寒村破院委原隰、事々蕭々春似秋、寄語梅花無發氣、清香何供野人求、

○碧巖集開講（同）

從上閑伎倆、雪竇及夾山、乖身在箇裡、駁々又班々、

○仲秋代簡奉報本師老和尚（同）

天下流行傳屍病、頑然無事送殘生、故山風物知依舊、萬里秋聲獨自驚、

○晩秋　(同)

凄色被山野、悲風滿市城、秋深細草盡、霖露片雲濟、纖月雖難見、閨中還有明、
籬邊黄菊在、聊足慰幽情、

○讀三祖信心銘　(癸亥年)

至道非難易、唯人自促延、妙能知這意、獨步曠空前、

○佛祖三經開講　(同)

佛祖之經緯、已墜千百年、獅絃更欲續、意氣獨悄然、

○海　(同)

不論汚濁與淸川、小大歸恢絕際邊、魚鼈蛟龍何足謂、吐紅陽欲呑靑天、

○賀環溪和尙住大溪山豪德寺開堂會　(甲子年)

松柏壇頭雲自在、淸凉橋下水縱橫、雨過富嶽添深翠、新染楓林媚好晴、

○遺經開講應大溪山衆請　(同)

四十九年最後說、愍兒忘醜須畏悅、雖火中氷海中炎、誰識斧頭元是鐵、

○永平忌二首　(同)

霖雨初晴日、承陽收化辰、漫天片雲絕、空界現眞身、
六百十有二春秋、雲子水孫滿四洲、愧將廢身投祖室、聊把寸香訴幽愁、

○遊橫濱　九月之初　(同)

偶乘秋霽好、兩友遊橫濱、海畔才七里、先宿神奈津、中宵忽驚夢、聞雨到曉晨、
脫履替草鞋、小傘才潛身、山路泥滑深、衣袖頓淫淪、侵此風雨裡、外內遍沿循、

盛哉萬家富、偉哉六州人、亞細與白皙、米利又笠身、形異意相類、語怪情却親、
就身笠身容、近日初來賓、首絡長條布、躬擁巤毳綸、其容尤長大、面色黑髯鬚、
我奉笠敎者、對之一吟呻、向晩到港崎、娼樓如比鱗、鄭衛歌舞女、趙吳妖嬌倫、
長鬚與赤髮、揶揄共相馴、唯及接言語、恰如壎與旻、又似鷇中鳥、喃々啼陽春、
心事雖萬緒、聊記聞見新、

○永平學道用心集開講 （甲子年）

佛祖學道、唯在用心、用心熱處、佛祖收襟、

○成道佛 （同）

無量劫中死生中、今古多是欲捉風、堪嗤人間論成壞、塵々刹々遍虛空、

○般若理趣分會賛 （同）

閑遊自在處、佗化天王宮、末尼寶藏殿、總看此箇中、

○十六羅漢賛 （同）

內秘菩薩行、外現是聲聞、乘興遊花塢、月艸浮彩雲、

○寓江戸駒籠釁舍寄似豪德環溪和尙 （乙丑年）

一間茅屋足容身、數卷典書好養眞、遮莫世僧誇勢利、寧爲脫俗懶狂人、

○瓦鉢引贈龍海藏雲和尙 （同）

京洛有女字蓮月、異才妙伎君所知、和歌書畫皆可見、就中陶工尤古奇、我曾使渠陶一鉢、長爲幻身良藥資、我且東西南北士。雲飛水漂跡参差、如今世上愛巧僞、畫龍高昇眞龍饑、眞龍豈唯饑與渴、世人厭之如鬼魍、我道不行我將遁、此鉢贈君君且持、

○不動明王賛二首 （同）

眞源不動、威儀嚴然、捕魔誅逆、邦家萬全、
此王常住衆生心、現相聖賢皆歛襟、照破乾坤伏魔外、永安家國護來今、

○題猿猴捉月圖 （同）

人嘲我癡行、我歎彼貪心、我入淸波沒、人隨五濁沈、

○地藏大士乘雲圖贊 （同）

南北東西雲自由、人間天上打閑遊、曾在鑊湯爐炭裡、永令群生絕苦憂、

○題圓形十八羅漢圖 敝悦子製念珠每珠刻尊者今圖之者 （乙丑年）

借問神通自在身、依何手脚不全伸、夜來有報爲吾說、方廣未如圓頓純、

○野鶴 （同）

野鶴巢高樹、意氣蔑丘墳、雖有饑渴困、不入燕雀群、安處眠幽邃、翺翔凌白雲、
塵寰何擾々、下土一紛々、禽獸强與弱、人間臣又君、不索軒車貴、誰責攻伐勳、
羅弋不相及、鵰鷲絕見聞、悠々天地際、孤跡每欣々、

○偶作 （同）

不須深隱與幽仙、雲意水身任幻緣、且喜狂名布天下、自今塵世打閑眠、

○獨遊次鄭所南韻二首 （同）

我見鄭所南、忠肝如鐵者、世々滔々時、孤節驚天下、我遇吾道窮、陷然學聾啞、
春來百花妍、秋到萬木赭、因循獨戲遊、不取亦何捨、自知唯自安、焉更哭玄野、
吾非遠世人、世皆遠吾者、皝々稱沙門、喋々誑凡下、若問本來事、如聾亦如啞、
不願心中惱、無慚面皮赭、求名逞我人、貪利恪取捨、可憐五濁時、無端臥草野、
附鄭所南獨遊詩 名思肖字億翁號所南連江人宋末烈士及革命後不仕坐臥不北向聞北 語必掩耳亟走及至清時古井中出鐵函其中在詩集近來有梓行人者 吾非
好獨遊、無與吾同者、不行衆所行、所以驚天下、逆哉一世人、昔辨而今啞、吻涎流醒翹、趨
尾面不赭、若曰汝爲人、寧不識取捨、止々勿多言、淸風生四野、△又有句曰、古人重立身、

今人重養身、

○題神妙錄 （乙丑年）

精神到處道方親、地卑天尊秋又春、心外早知無一物、最玄最妙只精神、

○寄總寧鑑司元良和尚二首 （同）

人生自古少知音、誰向聾兒弄素琴、二十年前有風外、悠々今日唯餘君、

君向塵寰鞭驢河、我於山野索眞價、請君刮眼須甄別、雪裡之炎火裡氷、

○題閻王對鏡々面現二少女之圖 人爲 （同）

嬋娟雙美艶粧成、鏡裡千嬌百媚生、想像人間多少意、閻王不識作何情、

○鼻祖贊 （丙寅年）

身心廓落、面目堂々、思議千里、相名早償、

○三幀贊 ○十一面觀音、○道了善神、大黑天（三面）戲句頭冠名爲獸室和尚、 （同）

十號曾辭謝、一體現多身、面目雖巧畫、誰圖自在眞、

道器長荷負、了々照周天、善現非常態、神光恆燦然、

三相非同別、面容伊字身、大哉威德力、黑業頓消泯、

○金翅鳥王吟 （丙寅年）

世有金翅鳥、異類生中王、鯤鵬徒瞠若、豈論鳳與凰、屠龍如蚯蚓、捉虎似蝗螂、

乾坤不滿翼、空界獨翱翔、此物不必大、至小却難量、變形巣蚊睫、收機遊蚤腸、

人間不能識、爲妄又爲狂、謹敢鞠養此、其人在西方、永住鷲山頂、不老又不亡、

何人相親近、信力如金剛、不惜身命者、唯能見眞相、

○賀環溪和尚從武州豪德寺遷住于宇治興聖寺 （丁卯年）

君務弘宗頻超昇、我甘狂㒵作村僧、普霑草樹一雲雨、宇水大溪頓沸騰、

○風外老師二十一周忌　(同)

與君千古寃、終歳遂難忘、三七電光裡、九回斷鐵腸、

○詠梅二首贈乘國寺元良和尚　(戊辰年)

淡々雖非競豔妍、能占千紫萬紅先、怕寒蜂蝶無消息、闇袖清香自撲天、
群芳圃裡不爭春、僻地寒辰獨斬新、莫恨幽香賞識少、橫科應免野人薪、右野梅

○詠梅賀乘國元良和尚遷住于總寧錄寺　(戊辰年)

一花五葉發多時、結果已成抽逸姿、酸烈元由凝清馥、不言翻使衆津知、

○感時二首　(同)

老來幸遇日新時、聖主賢才改萬機、吾道獨嗟尙依舊、曇華何發伊蘭枝、

今古皆心醉、利名唯所宗、蝸頭爭智勇、盧枕競崇封、依勢狸欺虎、乘時蚓似龍、
應憐三徑廢、幽鶴倚孤松、

○眞性二首　(同)

眞性純圓妄自欲、妄源涸處亦無眞、非眞非妄非眞有、殘臘窮時是孟春、
入凡入聖無蹤跡。爲色爲聲不見塵、空裡清風炎裡月、森羅萬像即非身、

○觀野梅有感　(己巳年)

牟尼已滅後、經歷三千回、雖有達道者、無奈此衰頹、獅身多蟲類、千林乏良材、
一思千行涙、三嘘萬死衰、非無慷慨志、恰似荊中梅、幽香散曠野、清委委草萊、
幸免樵者斧、何望九層臺、自應安寒節、何必索栽培、

○丹霞燒木佛圖　(庚午年)

眞佛燒木佛、木佛現眞佛、世人勞思議、何能得彷彿、

〇讀天主教書　（同）

錯去錯來誰辨眞、黠兒巧飾誑痴民、嗚呼天主知吾否、吾是先天不滅人、

〇達磨大師贊　（同）

莫論南北、奚問西東、廓然無聖、掘地求空、

〇六　祖　（同）

獦夫占祖位、古今唯仰君、本來無一物、黄梅獨拔群、

〇南泉斬猫贊　（同）

不入虎窟裡、爭能得虎兒、可惜南泉老、窟中無一兒、

〇凍臥次東坡居士醉臥韻　（同）

酒貴麴輕不能醉、天寒衾薄難成眠、老僧凍臥此茅堂、唯有乞兒知是意、

附東坡詩云（有道難行不若醉、有口難言不若眠、先生醉臥此石間、千古無人知是意、）

〇題報行誠上人死牛溲卷末　（壬申年）

火裡之蓮氷裡烟、喚天爲地地爲天、有人若問解何道、爲報牛屎馬糞禪、

〇四月官命許僧徒婬肉蓄髮及民服　（同）

文明之化及緇流、房有嬋娟膳牢牛、唯是蠢頑與檑木、終年獨可保圓頭、

〇又戲題　（同）

朝命大寛如淨名、肉妻螺髮天眞佛、堪嗤陰馬五本指、今後長爲無用物、

〇偶成二首（明治初年嚴判神佛、今年復混同之、）　（同）

天竺陋人全嘲世、如夢幻亦如水泡、本朝教法尤奇怪、神佛判然又混淆、

異人外客且休嘲、貴富功名終水泡、今日和親連歲冠、素纓涇渭總紛淆、

○有感　(同)

廢學陳談不若愚、愚猶可諭廢難扶、枯身朽木爲何用、多少良工勞刻鏤、

○散髮二首　(癸酉年)

蓬頭亂髮任天眞、不是敢爲開化人、憶得最先神世趣、衣冠未必競奇新、

不須虛飾不求新、天授孃生即本眞、垂髮僧容君莫怪、寒山狂士是前身、

○再以瓦鉢贈大内青巒氏　(同)

曾爲瓦鉢引、略演其來由、共贈藏雲師、渠早脫世囚、遺物皆流落、詩鉢失所留、
詩君己購得、鉢予自入收、今年偶相會、談話幾春秋、相與喜奇遇、雲月欸難求、
宿昔如水漂、今日似虛舟、乾坤一客舍、四海變浮漚、彼此總不管、任運委波流、
萬事恰夢幻、一身猶贅疣、且更把此鉢、贈君尋舊遊、降龍與煮肉、唯君自相謀、

○送佐々木狂介還故園　(同)

浮世去留雖爲期、深情況復異時宜、鄉園縱有多歡樂、莫使故人悲斷絲、

○大内氏席上以狂友談美人歌見求句　(癸酉年)

狂友談催英士靈、美人歌慰庸夫聰、如今醉裡得兩全、願不令吾到睡醒、

○詠史　(同)

禍福之幾治亂基、利名權勢又妖姿、英雄半不得其死、無事好人多庸貲、

○詠海　(甲戌年)

汪漾未誇朝百流、風破却欲撲天球、羨君萬寶千珠富、袖裡抱成五大洲、

○逃俗　(同)

吾每逃三俗、俗僧又俗儒、就中俗吏甚、永不相馳驅、

○賀島地氏留守歎婚娶新夫名八千代 (甲戌年)

雄名震四海、仙洞房生、桃子知幾許、堪令王母慙、

○送赤松氏歸鄉連城 (同)

歸情萬嶽挽難回。稚子依門婦凭臺、趙璧元非鄉邑物、肝膽秦國疾還來、

○戲擬古風 (乙亥年)

鶴之長兮、不可截矣、鴨之短兮、不可續矣、續之截之、匪鴨匪鶴。任短任長、維鴨維鶴、

○仙骨 (同)

不須鍊丹與霞英、稍覺老來仙骨成、自古求仙多失術、深山幽壑獨空名、

○道趣 (同)

道深趣愈奇、任運休量度、火宅猛然中、誰知有妙樂、

○偶成 (同)

曾逃白俗又逃僧、非俗非僧緣號稱、僧俗元斯形狀耳、何能足表我眞乘、

○次鳥尾中將放言之韻 (丙子年)

公以奇才屈十年、余抱活佛臥塵烟、莫言相遇不相遇、將覺人天千古眠、

附中將放言之詩 濟世奇才屈二十年、十年心事伴雲烟、先生別有平生眼、自托神仙置午眠、

○看臥龍梅有感 (丙子年)

錦衣車馬接聯行、總是劉君三顧情。草臥茲馳六十歲、愧無一事比梅兄、

〇自況　二首（癸酉七月致部省免教導職、爾後自號居士、又號逸民）　（同）

曾作游僧稱和尙、又爲居士號先生、從前五十八年事、不識更成阿那名、
鷦棲蝸縮又雲行、晩歳僑居皇武城、貴富尊榮別人夢、終事轗軻老書生、

〇送木邊權中教正還江洲　（同）

江之山水雄天下、遙望歸途各奏奇、法道如山意如海、唯期淸敎滌渾時、

〇春日書懷　（同）

老來猶絡風塵夢、世路艱難尤脆危、行樂遊情總蕩盡、梅花開落不關思、

〇自嘲　（丁丑年）

轉居匆々不成產、恰是飛禽依樹巢、自笑老迂生計拙、猶如野獸餔西東、

〇春晩淺草奧山看花有感　（同）

春花落晩秋花未、巧出人爲却破眞、悟得世間皆若此、興亡榮枯一眸瞬、

〇寄贈得庵居士（中島將尾）大坂臥病　（丁丑年）

聞說維摩現小痾、豈斯痴愛有殘留、老迂頑健坦山子、聊寄一詞問病候、

〇偶成二首　（同）

日々遊城市、逍遙送老殘、寄言浮世客、莫擾我槐安、
乾坤更變虛空剖、富貴於吾何所有、遮莫百年身後名、不如三酌生前酒、

〇歳晩二首　（同）

澹泊生涯自可憐、素貧無債亦無錢、床頭典籍壺中酒、聊伴閑眠送暮年、
五十九年之傀儡、未遭今日歳除閑、歷遊城市醉闤闠、散步公園弄假山、

○歳旦　（戊寅年）

乾坤昨夜一塵斜、日月今朝三尺加、雨滴敲窗聲瑟々、床邊唯見水仙花、

○自況　（同）

曾以吾生擬古人、吾生絕儔今日倫、心如響影身如幻、唯是昇平老逸民、

○贈得庵居士二首　（同）

三十年來尋劒客、草鞋破盡獨歸休、如今敵手始相遇、笑倒徒前只漫遊、

言外之言機外機、瞬間不用容思議、塵光照破滿三千、遮莫傍人勞眼意、

○戊寅四月八日天皇幸上野公園
我輩亦遊覽　（戊寅年）

偉哉文化及幽遐、皇帝庶民同弄花、解語之花嬌態步、櫻花妖艷媚煙霞、

○吾心篇并引　（同）

古昔寒山有詩云、吾心似秋月、碧潭澄皎潔、無物堪比倫、教我如何說、後來膾炙人口、有人和之曰、吾心似燈籠、火點內外紅、有物堪比倫、明朝日上東、亦甚奇偉、予近日安臥有日、亦和之名吾心篇、凡十五首、

吾心似虛空、悠々六合通、森羅乘萬像、了々現其中。
吾心似彌陀、神光照十方、煌々超日月、身壽亦無量、
吾心似浮雲、依々無所寄、西東風至時、曾不論難易、
吾心似海淵、誰能識際邊、鯤鯨猶在消、何更問鮎鱣、
吾心似富嶽、八風無動搖、群峰不爲侶、孤標出雲霄、
吾心似堯帝、蕩々能無名、却笑天猶小、無功率土平、
吾心似官客、登々望不窮、得隴又思蜀、更欲究蒼穹、
吾心似癡兒、一飽忘百飢、便々唯鼓腹、到々獨遊嬉、
吾心似顏回、簞瓢獨可樂、唯除尼父知、餘外何能度、

吾心似楊柳、婀々唯隨時、春到吐新綠、秋來脫棄枝、
吾心似狂人、言語亦無倫、失此增三百、得之無一塵、
吾心似古鏡、明々絕纖塵、假令遭失曉、元是舊時人、
吾心似虛舟、停流無喜憂、東風向西岸、北勢到南頭、
吾心似放屁、大異上天事、聲臭時々發、撲然驚耳鼻、
吾心雖有似、到底總非眞、欲識眞正物、無如本性親、

○僑居即事 九月住草公園 (戊寅年)

淺草公園裡、幽捿纔一間、不須買山谷、占得鬧中閑、

○仝　記實 隣舍有鳥歌死 (同)

市城闤闠裡、却覺在澗欒、日々哀猿叫、時々恠鳥鳴、孤貧自避世、靜適恰忘生、
偶遇絃歌起、又爲天上情、

○宿鳥尾氏別樓 (戊寅年)

時論禪話夜三更、美酒嘉肴月影傾、借得一宵富貴夢、猶疑我又化盧生、

○六十一歲生日 予以文政二年己卯十月十八日生以大陽暦符之則十二月五日也故以此日招道友開小筵 (己卯年)

明治己卯冬、臘月第五日、甲子壹周前、坦山此世出、

○次酬香亭中根君見寄之韻 (名淑靜岡之士) (己卯年)

曾學舊典慕孔尼、又入佛門追釋迦、豪傑之士實難過、六十年來等閑過、
偏見天下儒佛輩、只仍舊慣守舊窠、浮圖之流尤多弊、千載唯獨見達磨、
有爲名相盡唾棄、經奴論隷皆痛呵、我亦雖癡稍可擬、豈傚紛々小頭陀、
君是眞儒能具眼、於我所說視作麽、如今辟雍添佛典、我生應選抱慚多、
蚊子恰如負鐵柱、溟海恐是生風波、請看蒼溟渺無際、能吞盡百流萬河、
唯願以身投佛海、忍耐黽勉住娑婆、有口可談有脚步、何必默々學維摩、

附中根香亭詩 己卯冬日聞坦山老師應大學召爲諸生講佛典作詩寄之 坦山禪師性豪放、求法直追老釋迦、四海九州參學徧、五山七寺幾度適、近住東京城北野、慈雲堂下結茅窠、此中自有安心境、何須斷臂問達磨、金磬焚燈視如芥、柴衣僧侶任口呵、殺佛殺祖門風大、飲酒喫肉忘頭陀、聞君頃應辟雍聘、授受文字爲誰歷、新舊經局四千軸、叵耐注家鑿鑿多、說法由來手指月、言論學覺水與波、何若古人不言妙、可厭雄辯如懸河、默思道老別開眼、故轉禪機入老婆、枯木寒迺覺道耳、悲心欲救痾維摩、

○歳晩 (己卯年)

囊中阿堵足賖酒、又有二瓢富于回、歳晩優遊城市裡、春色先唯到早梅、

○地藏大士賛 (庚辰年)

苦中占妙樂、火裡發青蓮、誰識此間意、願王唯巍然、

○送鳥尾得庵居士赴浪花 (同)

搖落花開一樣風、鸞鳳鵰鶚竝林中、人間別有楊州鶴、漫把得喪論塞翁、

○應大雄山請 寺曰最乘寺在相州足柄上郡關本邑 (同)

曾逃三俗愛幽獨、翻爲塵緣作俗僧、白日天邊車蓋遠、八風狂浪任飛騰、

○偶成 (同)

無始劫來幾萬辛、驢胎馬腹死生身、大雄山下採菌客、猶是塵間流落人、

○函關 (同)

曾設函關三百年、英雄多少盡封纏、昇平不用雞鳴術、車馬縱橫達四邊、

○題永平正法眼藏辯註後 (同)

悲哉近世僧徒輩、漫以浮辭競利名、祖訓明々如日月、唯慚閑事誤平生、

○江邊卜居 上野不忍池之側 (辛巳年)

東京第一園、任運爲吾有、上野数仞山、忍池幾萬畝、

○寄贈島地默雷氏臥病 （同）

晴天白日照清穹、又看雲雷和雨風、惑病同源君信否、苦因全在五陰中、

○素軒前島公次予舊韻見贈再次前韻呈之 （同）

未必要脩治、氷心千古堅、曇花無春夏、秋冬霜雪鮮、離苦曾學佛、畏死非求仙、
人々談空裡、箇々說妙玄、爭如任放曠、自得方寸便、萬世溢瞬裡、八荒滿咫筵、
從古丈夫士、心操箭離絃、處々觀自在、何爲憂縛纒、

○題菅公像 （壬午年）

人間忠節士、上界盛威神、敬礮群生利、公明自在身、

○題髮繡淨土圖 （同）

蹬後宇佐國東顯迷之所有
空念法師之所給也云云

瞬裡淨邦十萬億、毛端現出無量身、偉哉空念指頭德、卓矣顯迷開悟仁

○梵網經 （同）

漫天羅網罩群生、霜露蕭風秋氣淸、掃盡浮雲排遯霧、屋頭依舊一輪明、

○三　奇 （癸未年）

我究三奇事、癡根與病源、塵中占仙樂、不羨給孤園、

○次酬巽軒井上氏見寄之韻 （同）

老齡纔存枯骨形、猶於塵世說仙經、市城山谷跡難定、冬蹈雪霜春蹈靑、
附巽軒氏詩
寄坦山禪師在大雄山、
老來恬淡似忘形、世念不生天又寧、自入山中只讀經、
茫窓夜雨一燈靑、

○有人贈酒一舛索書 （同）

欲酬一升酒、把筆思茫然、方時春三月、柳梅皆艷姸、

○辭最乘寺三首　後二首用舊製規　（同）

曾號逸郎逸不能、爲僧爲俗又爲僧、更爲逸老思爲逸、亦是傀儡三四棚、

曾逸三俗愛幽獨、又爲塵緣作俗僧、更免俗僧歸塵俗、八風狂浪任飛騰、

解脫出家似出家、蕭然斷盡利名枷、爲僧爲俗亦游戲、春苑恰如弄百花、

○中敎正靑蔭雪鴻禪師以闔國公選喬遷于越州大本山聊裁一偈奉賀　（同）

佛道從來絕己躬、諸宗唯恐猶未通、洞門新闢眞公選、師是僧中和聖東、

以全國公選住大本山以師爲本朝之權輿

○妙園樓　（乙酉年）

最妙園樓風景奇、乾坤落盡虛空葵、毛端國土億千萬、閑臥牀頭日月遲、

○南條氏名文雄以詩稿見囑評語余已老朽迂痴謝以一絕　（同）

英雄今古有家風、獨把梵書立宇中、君是後生可畏者、何須老朽贊成功、

○佛仙二首　（同）

頃來窮得佛仙眞、惑病同原一苦因、想像古今幾明晦、誰知劫賊本家親、

佛苗仙樹抽光英、妙樂奇觀獨盛榮、唯我非敢貪異福、願將至道附群生、

○佛仙兼酒仙　（同）

卷盡西天古聖編、孤瓢傾倒一床眠、瞬間宇宙纖塵絕、占得佛仙兼酒仙、

○稚仙　（同）

癡隱老人號稚仙、客來相問其何義、蝙蝠如非蟲鳥群、爲人已老爲仙稚、

○極樂　(同)

聞說易行淨土敎、往生極樂壽無窮、我家別有難思法、極樂來生方寸中、

○阿彌陀佛賛　(乙酉年)

歸命無量壽世尊、豁開安樂度生門、微塵法界妙嚴土、摩尼窟中風月魂、

○恠獅吟賀瀧谷琢宗禪師喬遷于越祖山　(同)

妙中之妙奇中奇、瀧谷洞源生恠獅、天上人間縱騰奔、黃頭碧眼尙猜疑、

○示僧　(同)

莫安小康地、莫爲名利僨、最乘眞樂處、炎裡結淸氷、

○謝客

近日坦山懶接人、交情義務共因循、事非至要多辭謝、老病爲患請莫瞋、

○得庵居士見惠詩文誦之賦之贈之　(丙戌年)

得庵居士一家言、兩句余倒傾半樽、落々胸中閑日月、悠々夢裡別乾坤、

○送眞晃斷際禪師赴越祖山　(同)

金腸鐵膽壓群雄、釣月耕雲興祖風、我向塵寰立法幢、誰知水火有眞同、

○題哲學雜誌　(丁亥年)

眞理常存宇宙中、人間殊別末精通、究之應有透霄路、今日新開一大瞳、

○偶成　(丁亥年)

人遊歐米適西天、我向一心索佛仙、佛性自他來去絕、仙身不滅億千年、

○題原人論聞解　（同）

人性之原理、額中力士珠、見聞及會解、得免要忘株、

○和三島中洲讀維摩經作　（戊子年）

佛本應緣自在人、杜鵑叫月鳥啼春、乾坤直是莊嚴國、君亦維摩一化身、

○眞光　（同）

人間元有難思法、儒佛神仙唯義名、萬象之中宇宙外、眞光赫々照幽明、

○眞同　（同）

儒佛神仙道本同、恰如萬類現虛空、秋來千樹催搖落、春到百花開紫紅、

○題自像　（同）

通身如水沫、本性似金剛、生滅電光裡、無爲坦寂相、

○新年　（己丑年）

日月如流水、七旬又過春、頑然何所作、唯是太平民、

○心如巧畫師　（同）

天地神祇無盡人、畫圖場裡自由身、一毫頭上丹青技、萬像參差唯一眞、

○偶作　（同）

今年七十一、陀那因原絕、聲色眼中花、知情炎裡雪、

○講首楞嚴經　（庚寅年）

眞心常位體、七大本元精、妙果非他物、金剛現淸淨、

○法性　(同)

法性身中日杲々、眞如山上月沈々、回頭烏兎如泥彈、擧足乾坤似被衾、

○承陽大師賛　(同)

天童失鼻孔、空手還鄉翁、清表聳雲霄、雲孫溢日東、

○偶成　(同)

生滅淵源竭、金剛入脊梁、十方空索々、寰外現清陽、
人間千古夢、水月唯空明、掬水知虛影、謝名察闇聲、

○佛經　(辛卯年)

佛經千萬卷、今古摸名義、早晚喪其實、群類漫泣岐、

○生滅々已二首　(辛卯年)

無明生死本、轉作金剛窟、五蘊皆空淨、始成圓滿月、
生滅之原滅盡了、淨雲幽景見新晴、色聲堆裡冥々夜、天上人間白日清、

○自況　(同)

畢生之盡力、才出死生關、半生之艱苦、聊占方寸間、魯痴如隱逸、平坦似非山、
治亂無相及、利名不用攀、

○題釋尊印土古蹟圖　(壬辰年)

乾坤間出聖、獅吼動天球、悠久寂然裡、眞光照萬秋、

○偶作二首　(同)

人世七十古來稀、過老如今休萬機、與臥數年餘生在、唯將落日弄殘輝、

乾坤碧落絕終窮、生滅去來跡朦朧、幽景浮雲日出沒、世情反覆無邊風、

○教原五首

佛仙敎學創業始祖原坦山廣告

經曰諸修行人不能得成無上菩提皆由不知二種根本錯亂修習云何二種阿難一者無始生死根本則汝今者與諸衆生用攀緣心爲自性者二者無始菩提涅槃元淸淨體則汝今者識精元明能生諸緣緣所遺者、

二種原

淸淨之元生死本、混淆無始失涵澂、恰如水乳尤難擇、唯有鵝王獨分明、

生滅原

生滅之原名陀那、玄機動殖現始終、異同小大無邊際、眞性冥冥宇宙中、

人類原

腰骨盤中生滅根、昇流涵濁侵眞元、眞元涵濁無明體、五蘊六根醸惑原、

寂滅原

惑病之原即陀那、腦中涵濁是無明、蔓延胸腹名煩惱、解脫澄淸始至精、

淸淨原

實性眞元絕色聲、菩提涅槃唯空名、長年落落天邊月、良夜淸宵常皎明、

明治二十三年八月

敎原五首就中三四二原先哲未發坦山畢生之盡力所謂知我罪我其唯是也而已

(一〇) 自述大意

(一) 集議院江再度建言

初度三四度は專ら宗制を論ず、故に此を載せず、

佛法眞理實效の建白

先般宗制の儀竝拙著献上仕候に付奉献納大凡佛法は治心辨惑の要道に御座候處近來餘敎の著述竝士大夫の議に佛法誕等の語見聞仕候是れ未だ佛法の眞理實效を知らざる故にござ候愚拙弱年の時京師にて洋學者小森某なる者と理論仕り佛法は虚誕多しと厭せられ愚答ること能はずに因て深く慚愧仕り殆んと寢食を忘すると十餘年遂に佛法の大本心身